伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇二五年　第一〇五号

史料と伊能図「伊能忠敬研究」
二〇二五年　第一〇五号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.105　2025

表紙解説

神戸市立博物館蔵「近江国及附近絵図」部分

表紙は神戸市立博物館所蔵「近江国及附近絵図」から琵琶湖の南部の部分を拡大した。縮尺は十万八千分の一の特別地域図で針穴があるという。特別地域図としては他に厳島と天橋立の図が現存する。

サイズは縦一三七・〇cm、横六四・六cmである。伊能忠敬記念館の「琵琶湖図」が縦一二三・四cm、横一〇三・〇cmであるのに比べ横幅がかなり狭い。

左のコンパスローズを見ると地図自体が傾いて描かれていることがわかる。そのため、下の「近江国及附近絵図」全体では中央部に琵琶湖から大阪までが縦に連なっている。料紙の上部が西側に傾いた結果、「琵琶湖図」の北西部に描かれていた三方五湖はこの地図の外になり、同様に中央右側の東海道についても土山宿のあたりから東の方が消えた。スペースが生じた上部右側には、関ヶ原附近から木本（きのもと）宿までの北国脇往還が追加されている。何のためにこのように傾けたのだろうか。「琵琶湖図」に比べ横幅が六割ちょっとに減り、紙は少なくて済む。まさかそれが理由でもあるまい。なお、武佐宿から日野町を経て土山宿までの脇街道は描かれていない。

コンパスローズ

「近江国及附近絵図」

琵琶湖岸の測量は第五次測量の往路で文化二年に大津から反時計回りで東岸、北岸、西岸を進み大津に戻った。琵琶湖周辺の街道筋は第五次測量の復路で文化三年に測量している。

会報第一〇四号で前田幸子会員が琵琶湖測量の様子を報告した忠敬の書状を紹介している。書状では琵琶湖の東岸は蘆や葭が生い茂っていて道もなく、船中引縄測量も行った。湖岸から街道筋に測線を繋いでおいて、復路の街道筋の測量では鉄鎖を使って測量するつもりであると記している。また琵琶湖については別図を仕立てるよう指示されているとあり、特別地域図の作製は第五次測量の開始前から予定されていた。

第五次測量では主に平山郡蔵が麁絵図を担当したようで、測量日記では「平山は長命山上に登、眺望図を成」「平山は山本山に登て麁図を認」などと記録されている。また文化二年九月二十日未明、平山郡蔵らは上坂本村から比叡山四明ヶ岳に登り山々の方位を測量した。「山島方位記」によると、忠敬らは九月二十四日には紫式部ゆかりの石山寺に登り、月見亭から遠くは比良の山々、近くは瀬田橋の方位を測定している。

玉造　功

表紙題字は伊能忠敬の筆跡

目次　105号

表紙解説
神戸市立博物館蔵
近江国及附近絵図　玉造　功

研究と活動
●伊能忠敬測量隊資料を襖の下張りから発見！(2)　橋本　惣司　1
●『天文簡要論』の山高　菱山　剛秀　14
●特集「測量方伊能忠敬がやってきた！」
薬師寺の『文化五年年預所日記』　前田　幸子　17
●高橋景保宛て伊能忠敬書状　玉造　功　27

資料
●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」
連載第三十八回　渡辺　一郎・井上　辰男　34

会員だより
「能登半島地震」続報　河崎　倫代　57
貝塚市「文化の日のつどい」で
伊能測量と岩橋善兵衛について語る　星埜　由尚　61
小説「伊能忠敬の化身～シーボルト事件を
尻目に伊能図は世界へ～」を出版　樋口　宗司　62

各地のニュース
「伊能忠敬の歩いた道」ウォーキング
「金辺峠編」に参加して　馬場　良平　66
第８回数矢小の子どもたちによる
富岡八幡宮「伊能忠敬銅像清掃デー」実施　前田　幸子　69
「健脚御守」を作ってみました！　河崎　倫代　69
新入会員自己紹介　松本　正子　70
お知らせ　門脇　利勝　70

伊能忠敬測量隊資料を襖の下張りから発見！(2)

橋本惣司（岡山県津山市）

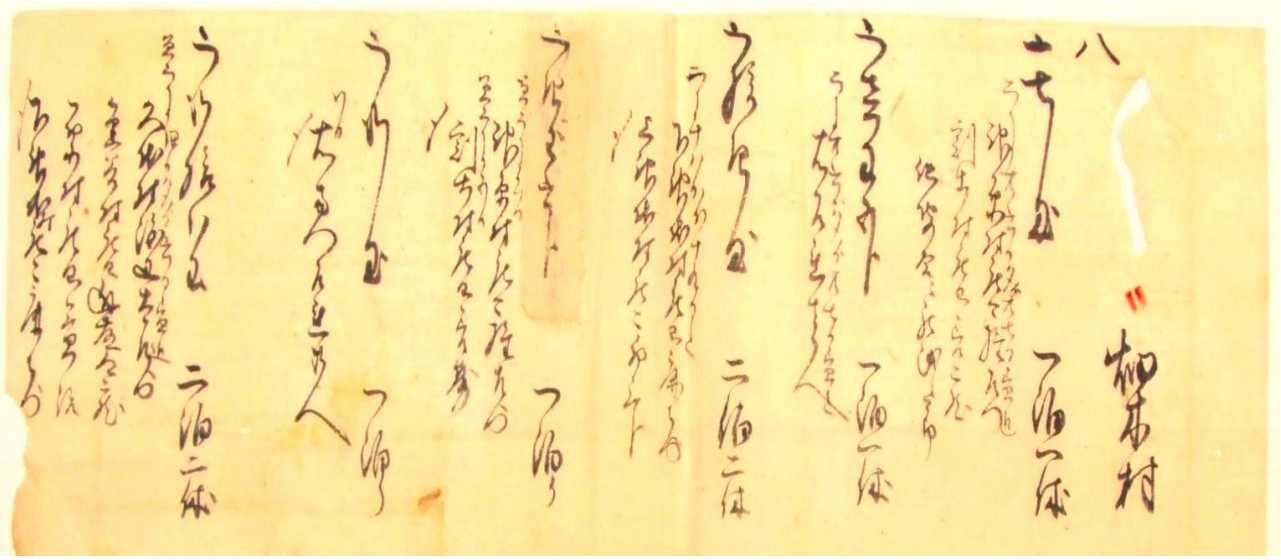
本誌一〇二号に紹介させていただいた、岡山県高梁市鉄砲町民家の襖下張り文書の伊能測量隊関係史料（橋本家文書）についての第2弾である。

前回は人足帳について述べた。五枚の文書から八四一人以上の人足が、備中国北部の村々から人数の多寡はあるが駆り出されたことが明らかになった。伊能測量のルートから遠く離れた村からも、測量に関わる役から荷物を持つ人足まで駆り出されており、大名領・幕府領に関わらず備中国全体がこの国家的事業を支えていたことになる。

一　賃金帳

今回紹介する賃金帳は九枚の古文書からなり、村ごとに備中北部の大庄屋、庄屋、肝煎らと、召し連れた下人などが宿泊や休憩を「○泊△休」とし、それに掛かった経費を書き記している。村名には数字（番号）がつけられているが、測量ルートに沿うといった順序性はない。また日付は時系列になっていない。なお、史料に見える村については、前回も掲載した「第7次伊能忠敬測量隊ルート」地図を参照していただきたい。

賃金帳も人足帳と同様、襖の下張りにされたもので、残念ながら表紙は見当たらず、残された九枚の古文書も下張りになったため破損が多い。法量は古文書(1)の場合、半折にして三八㎝×一四・三㎝である。



古文書（1）－1

古文書(1)―1

八　〃畑木村（新見市）

一　七匁　一泊一休

二月廿六日夕方廿七日昼迄、
神原村庄屋権左衛門
割出村庄屋善蔵
但聞合二罷越候節、

一　壱匁五分　一泊一休

二月廿六日夕方廿七日昼迄、
右召連壱人

一　拾四匁　二泊二休

二月十八日方十九日迄、
下神代庄屋鹿右衛門
上神代村庄屋卯三郎
〆

（貼り紙）

一　四匁六分　一泊り

閏二月三日、
神原村庄屋権左衛門
閏二月五日、
割出村庄屋善蔵
〆

一　弐匁　一泊り

同日、右両人召連弐人
〆

一　弐拾八匁　二泊二休

閏二月四日夕方六日昼迄、
久代村渡辺太郎左衛門
金谷村庄屋近藤郷蔵
原村庄屋益治
下神代村庄屋鹿右衛門
〆

古文書の順序は、内容を勘案して筆者が便宜的につけた。末尾に賃金帳を「表」にまとめた。

この時期の当初、伊能測量隊本隊は出雲国、坂部支隊は石見国を測っている頃で、伊能忠敬から備中国松山板倉藩、新見関藩、幕府領久世代官所等へ先触れが来ていたはずである。受け入れ側にとっては初めてのことであり、測量に対する認識もない状態で宿泊地、そのもてなし、人馬の用意などなどの準備を一か月以上前から始めたと思われる。

【橋本家文書「賃金帳」の翻刻】

○古文書の番号(1)〜(9)は、筆者が便宜的に付け、半折で使用されているので、文書番号の下に、表・裏を1・2で表した。

○翻刻にあたり、村名の上にある朱点「〃」はそのまま記し、村名の下に便宜的に（現市町名）を記した。

○各文書の状態を文書番号の下に、「○上部破損」のように編者註を加え、破損箇所は　]・[　]・[　等で示した。

○欠損による不明文字や解読できない文字は□で表し、推定できれば、右傍に小さく〔　〕で示した。誤字・当て字の訂正も、右傍に小さく〔　〕で示した。読点（、）と並列点（・）を施し読み やすくした。

○抹消されている箇所は、「木ノ五ノ」のように抹消線を加筆し、訂正があれば、その右行に書き加えた。「古文書(4)―2」のようにまとまった行を弧曲線で抹消している時は、その箇所の初めに「○以下五行抹消、」と編者註を加え、抹消線を加えた。

古文書(1)―2　○上部破損、〈畑木村〉

]九匁　二泊二休

同日（閏二月四日）、

久代村・金谷村・原村召連三人

〆

]拾匁五分　一泊一休

閏二月六日、原村人足四人

同十三日、原村飛脚壱人

〆

]□匁四分　四泊四休

]月十七日ゟ廿一日迄、

矢田東村庄屋太十郎

但松山出勤宿払、

]五匁一分六厘　四泊四休

同日、右召連壱人

]六匁三分　三泊三休

閏二月朔日ゟ四日迄、

矢田東村庄屋太十郎

松山出勤宿払、

]三匁弐分七厘　三泊三休

同日、右召連壱人

古文書(2)―1　〈畑木村カ〉

、一　拾四匁六分　六泊六休

外二東城一泊

畑木村杉三郎右衛門

閏二月十六日、東城宿払

同廿二日夕ゟ廿八日昼迄、松山宿払

、一　九匁七分四厘　右同断

右召連壱人右同断

、一　弐拾三匁弐分　二泊一休

金谷村近藤郷蔵

矢戸村庄屋柳助

八鳥村庄屋要兵衛

上神代村庄屋卯三郎

〆御泊前ゟ相続候支度代、

、一　弐拾弐匁五分　一泊一休

下神代村肝煎壱人

上神代村肝煎壱人

同村丈右衛門・清七

同村庄屋召連れ壱人

杉三郎右衛門召連れ壱人

矢田西村肝煎壱人

肝煎人足四人

〆

閏二月十七日夕ゟ十八日昼迄支度代

、一　四匁五分　一泊一休

古文書(2)―2　○上部破損、〈畑木村カ〉

八鳥村庄屋召連壱人

矢戸村庄屋召連壱人

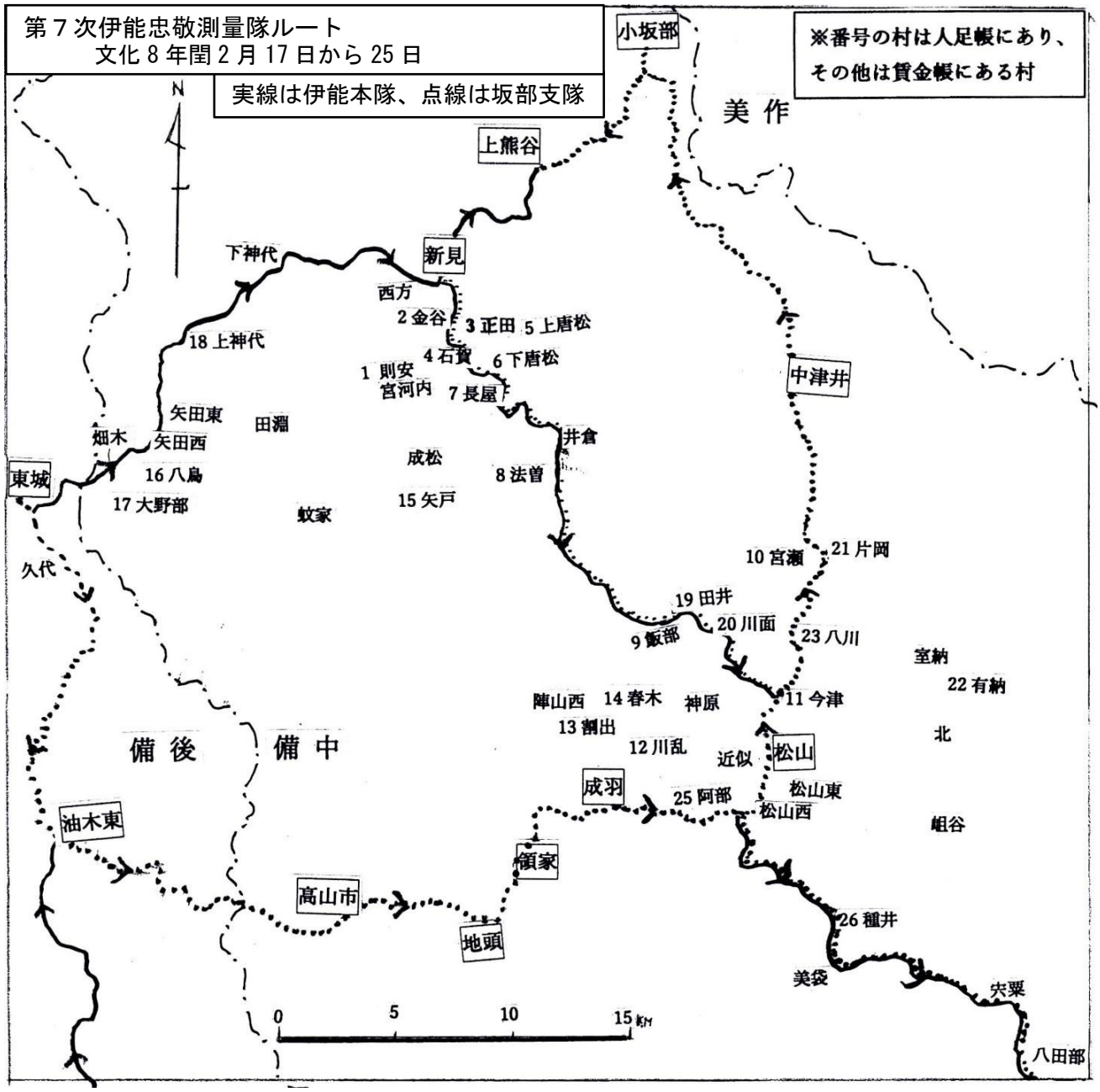
〆

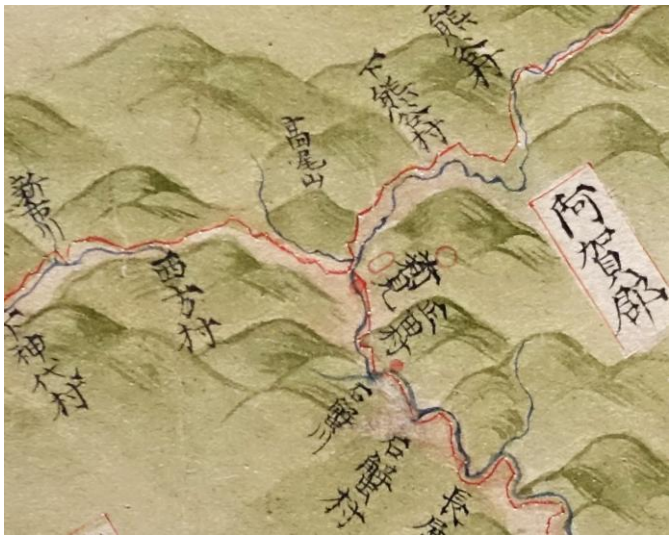
□　七匁　二泊一休

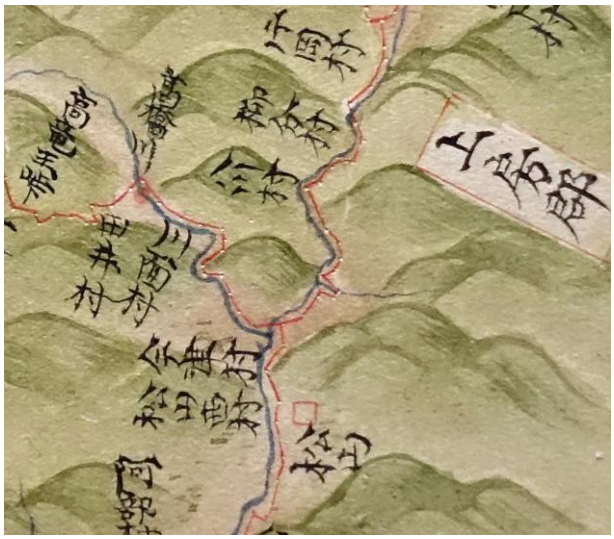
十六日夕ゟ十八日朝迄、

料理人四人支度代

一　弐匁壱分　壱泊一休







東京国立博物館所蔵の中図「大日本沿海輿地図 中国四国」から新見（右）と松山（左）（朱の測線に針穴が確認できる）

二　賃金帳の説明

賃金帳は、人足帳とは綴じ紐の穴の位置が異なり、村名に番号が付され、赤い印が二つ（〃）付されていることから別帳である。番号・村名は破損による欠落や不記載もあり、「六　飯部村」から「三十二　陣山西村」まで、推定を含め十五カ村確認できるが、地域ごとの順番ではない。松山から最も南方の八田部村は「廿九」が付されている。

内訳に記載されている村名は、新見（新見関藩陣屋所在地）以外はすべて松山板倉藩領の村々であり、**古文書**(4)は当初新見町に計上された経費と推定してみたが、賃金帳全体が松山板倉藩に関わることから新見藩のものとは考えられず、不明とせざるをえなかった。

賃金帳には備中北部の各郡内の大庄屋、村庄屋、松山板倉藩の代官らとその召連れ達の宿泊に伴う日時と金額が書かれている。番号の付いた村には、計上された経費が生じたのであり、集計し報告の必要があったのである。順番に見ていこう。

古文書(1)―1　「八　畑木村」これには、伊能本隊が畑木村に宿泊する一か月前の二月十八日から十九日、下神代村庄屋鹿右衛門と上神代村庄屋卯三郎が二泊二休し十四匁計上されている。畑木村に近いうえ、下神代村庄屋が杉三郎右衛門との打ち合わせに来たのであろう。

また、二月二十六日・二十七日、神原村・割出村庄屋が召連れとともに宿泊し、あわせて九匁五分を計上している。おそらく測量隊からの先触れが松山藩、新見藩などに届き、大庄屋たちはその準備の打ち合わせが始まったと考えられる。

閏二月三日から六日にかけて神原村・割出村・久代村・金屋村・原村の庄屋が召連れとともに一泊、二泊し四十一匁三分を計上している。

古文書(1)―2　これは**畑木村**の続き。閏二月初旬に矢田東村庄屋が松山に宿泊している。閏二月十三日原村庄屋が宿泊している。

古文書(2)―1　村名はないが、内容から**畑木村**の続きと思われる。「拾四匁六分―六泊六休」と「外ニ東城一泊」とあるのは、閏二月十六日、測量隊本隊がこの日東城村に宿泊しており、「備中割元庄屋杉三郎右衛門、案内庄屋卯三郎、数取書役丈右衛門、読上エフ指清七」が挨拶に訪れたこと、また二十二日から松山に三泊したことが『測量日記』にあるので、これに連動して畑木村大庄屋杉三郎右衛門も十六日東城村で一泊し、次いで六日後の二十二日から六日間松山に宿泊したのである。一人召連れていて九匁七分四厘と合わせて二十四匁三分四厘を計上している。

本隊が畑木村に宿泊する前になると、その支度に金谷・矢戸・八鳥・上神代村の庄屋卯三郎たちは二泊一休し、二十三匁二分を計上している。本隊が畑木村杉三郎右衛門宅に宿泊した閏二月十七日、畑木村に近い下神代村肝煎、上神代村肝煎、矢田西村の肝煎や上神代村丈右衛門・清七と召連れたち十五人の村役が、測量隊の宿泊した日から翌日の昼の支度代として二十二匁二分五厘を計上している。

古文書(2)―2　前半は**畑木村**の続きで八鳥村・矢戸村庄屋の宿泊経費と、閏二月十六日夕から十八日朝までの、料理人ら六人分と飛脚五度分の経費を書いている。畑木村の書き上げ合計が百五十五匁九分一厘になる。十七日は畑木村杉三郎右衛門宅が測量隊本隊の宿所となっており、料理人らはその仕度（食事の用意等）を担当したのである。

料理人荷持人足弐人
一　九匁四分五厘　　壱泊壱休
但飛脚五度分松山宿払、
合百木拾壱匁九分壱厘
五拾五匁九分壱厘

六　〃　**飯部村**（高梁市）
］六匁　　御一泊り
二月廿二日、
内海宗右衛門様御上下三人
］下々　七匁弐分　諸入用
□拾三匁二弐分

］六匁　　御一泊り
閏二月七日、
内海宗右衛門様御上下三人
］下々　七匁弐分　諸入用
〔メ〕
□拾三匁弐分

］弐匁　　御一休

古文書(3)―1　○一部破損、〈**飯部村**カ〉
丶一　弐［　　］　三泊三休
閏二月十［　　］日昼迄、
近似〔村〕□［　　］〔久〕□右衛門
同［　　］
大野［　　］
メ
丶一　四匁五分　　三泊三休

後半の「**六　飯部村**」は、松山の上流約九キロにある村で、二月二十二日と閏二月七日、松山藩代官内海宗右衛門が家来を連れて宿泊した経費を記録している。『測量日記』に、代官内海宗右衛門は閏二月二十二日、松山の宿所「大坂屋」へ挨拶に来たとあるので、賃金帳に見える「二月二十二日」の日付は閏二月二十二日の可能性もある。

古文書(3)―1　これは前の**飯部村**の続きであろう。最初の「弐[　]匁―三泊三休」は近似村と大野部村庄屋が、閏二月十日から、準備に三泊した経費。

三項目の「八匁二分―二泊三休」に見える、現在の総社市中心部にあたり備中松山藩の飛地であった八田部村は、松山城下から二十キロ以上も南にあるが、大庄屋池上直左衛門が閏二月二十日夕方から二十二日の昼まで一人召連れて宿泊している。それは数日後高梁川に沿って総社まで測量する測量隊への事前の情報収集のためでもあったであろう。

五項目の「弐拾壱匁―一泊一休」では、閏二月二十一日夕、六人の大庄屋・庄屋らが集合し一泊している。

古文書(3)―2　これは前の続き（**飯部村**か）。

最後の「二匁五分―一泊一休」は、閏二月十九日夕方近似村人足の宿泊経費である。この村の経費の合計が百四十匁二分で、**古文書(2)―2**後半の「**六飯部村**」からの合計とほぼ一致することから、ここまでは飯部村と思われる。

古文書(4)―1　これは**新見に近い松山藩領の村**と推定されるが具体的には不明（番号も不明）。閏二月二十二日、下神代村、近似村、原村、八田部村、矢戸村、春木村、割出村の庄屋が召連れとともに宿泊した経費である。庄屋は一泊三匁、一休

久右衛門召連一人
〆
、一　八匁弐分　二泊三休
閏二月廿日夕方廿二日昼迄、
八田部村池上直左衛門
〆
、一　三匁五分　二泊三休
同断、右召連壱人
、一　弐拾壱匁　一泊一休
閏二月廿一日夕方廿二日昼迄、
畑木村杉三郎右衛門
下神代村庄屋鹿右衛門
矢戸村庄屋柳助
長屋村庄屋太三右衛門
宮河内村庄屋常蔵
成松村手伝要兵衛
、一　三匁　一泊一休
同日、杉三郎右衛門・鹿右衛門召連弐人

古文書(3)―2　○上部破損、〈**飯部村**カ〉
一　拾八匁六分　三泊二休
閏二月十九日夕方廿二日朝迄、
石賀村杉丹右衛門
金屋村近藤郷蔵
〆
]拾六匁八分　二休
閏二月十五日、
上唐松村・長屋村・宮河内村・
下唐松村・石賀村・成松村・
矢戸村七ケ村庄屋、諸事

申談出会仕候節支度入用
〆
]四匁五分　一泊一休
閏二月廿一日夕方廿二日昼迄、
矢戸村肝煎良右衛門
同村広治人足壱人
]二匁五分　一泊一休
閏二月十九日夕方廿二日昼迄、
近似村人足三人
合百四拾匁弐分

古文書(4)―1　〈**不明**〉
、一　弐拾四匁五分　壱泊一休
同（閏二月）廿二日昼方廿三日朝迄、
下神代村庄屋鹿右衛門
近似村庄屋久右衛門
原村庄屋益治
八田部村池上直左衛門
矢戸村庄屋柳助
春木村庄屋良右衛門
割出村庄屋善蔵
〆
、一　拾匁五分　壱泊一休
右召連七人
、一　拾五匁　一泊一休
同日、通し宰領四人
召連四人
、一　四匁二分　二泊二休
法曽村庄屋鎮太町宿払

は五分、七人で二十四匁五分であった。召連れは、一泊一匁、一休は五分なので七人で十匁五分となる。閏二月十九日から二十日には則安村人足三人、長屋村数人が宿泊している。『測量日記』によれば、新見町には閏二月十九日に伊能忠敬本隊が、同二十一日には本隊と坂部支隊が宿泊している。

古文書(4)―2　これは前の続き。本隊・支隊合同隊が新見本陣正田屋に宿泊した二十一日、料理人平四郎や手伝いを含めて九人が宿泊している。測量隊の食事用意のためであろう。料理人らを誰が派遣したかは不明であるが、同じ時期に石賀村の状持ち、新見村の人足四人、法曽村肝煎らが支度に十一度も来ていることからこの**古文書(4)―1・2**は新見に近い松山藩領の村と考えられる。

古文書(5)―1　**割出村**（番号不明）は、当村庄屋善蔵が召連れとともに松山へ出勤し四泊四休し、合わせて十三匁五分六厘を計上している。庄屋善蔵は一泊が二匁、一休が一分の計算になる。

　正田村には、閏二月二十一日から二十二日昼まで家臣を連れた松山藩代官柳井与次右衛門が宿泊している。一泊二休で八匁、他に諸入用として十三匁二分を計上している。『測量日記』によれば、柳井与次右衛門が閏二月二十二日、本隊小休所の長谷村庄屋方まで挨拶に来たとある。柳井与次右衛門は**古文書(6)―1**にも見える。

古文書(5)―2　これはほとんど破れていて解読不能である。

古文書(6)―1　（**松山東村**か、番号不明）閏二月二十日、松山藩代官神戸忠之進が家臣を連れて宿泊し、六匁二分を計上している。また同じく代官柳井与次右衛門上下二人が二十日夕から二十一日昼迄と二十二日夕、計二泊一休している。『測量日

、一　弐匁五分八厘　　二泊二休
　　右召連壱人
、一　四匁五分　　一泊一休
　　十九日夕方廿日昼迄、
　　則安村人足三人
、一　弐匁　　一泊
　　廿一日夕、
　　長屋村人□〔足〕□人

古文書(4)―2　○一部破損、〈**不明**〉
、一　五匁　　一泊リ
　　廿一日夕、
　　料理人□[
　　手伝い三□[
　　荷物持一人[
　　〆五人
、一　八匁四□〔分〕　　二泊二休
　　廿一日昼方廿三日朝迄、
　　料理人平四郎
　　手伝人三人
　　〆四人
]三匁五分　　支度七度
　　閏二月五日、
　　原村状持弐人
]十九日、
　　石賀村状持壱人
]廿二日、
　　新見人足四人
　　〆
十―三匁二分五厘―支度十壱度

　　法曽村肝煎御通行前役共
一　九匁四分五厘
　　□□□□　　四郎三郎
○以下五行抹消、
十―七匁七分―支度弐度宛
　　但□丈□□□仕人五人
十―四匁二分―五度支度
　　肝煎弐人保頭二人
〆―拾二匁九分

古文書(5)―1　○上部破損、
[　]　　〃**割出村**（高梁市）
]八匁四分　　四泊四休
　　庄屋善蔵松山出勤
]五匁一分六厘　　四泊四休
　　右召連同断
]拾三匁五分六厘
[　]　　〃**正田村**（新見市）
]八匁　　一泊二休
　　□〔閏〕二月廿一日昼方廿二日昼迄、
　　柳井与次右衛門様御上下弐人
　　外二、
　　十三匁二分　　諸入用
　　〆
]九匁四分　　一泊二休
　　閏二月廿一日昼方廿二日昼迄、
　　割出村庄屋善蔵・
　　春木村庄屋良右衛門

記』には、松山藩代官神戸忠之進が三日前の十七日に本隊宿所の畑木村大庄屋杉三郎右衛門方、翌十八日は下神代村本陣庄屋鹿右衛門方へ忠敬に挨拶に訪れ、またこの日「山中谷合」（**松山東村**か）の藤井鎮右衛門方が坂部支隊の宿所になったとある。**古文書(6)―1**は、松山城下に隣接し藤井鎮右衛門の持家藤屋がある松山東村と考えられる。松山藩の代官たちは、受け入れの準備や測量が行われる様子を見るために活動したのである。

日付は前後するが、閏二月四日頃春木村庄屋が二休、閏二月十三日、川面村・田井村の庄屋が一休、同十四日井倉村・石賀村・金屋村の庄屋たちが一休して八匁四分を計上している。

備中松山藩、新見関藩、幕府領代官、旗本領陣屋には二年近く前から先触れが届き、宿舎、人馬など測量隊の活動に支障がないように指示され、一か月前になると忠敬から測量予定の村などに先触れ状が届けられたようで、受け入れる村は宿舎でのもてなし、人足の用意に大庄屋を中心に村役たちは聞合せ、打ち合わせに努めたであろう。

古文書(6)―2　これは、前の続き（**松山東村**か）で一部破れによって読めない部分がある。閏二月十九日近似村庄屋が四人を召連れて、また八田部村池上直左衛門も宿泊している。また、二十日は割出村庄屋が宿泊している。

二十一日から二十四日まで西方村庄屋□蔵（□は破損で読めず）が召連れとともに三泊三休し合計十五匁を計上している。松山東村の合計は不明であるが、測量隊の支隊が止宿した村で、到着までの二十日前からの庄屋、松山藩役人たちの動きがわかる。なお『測量日記』に、西方村庄屋幸左衛門が閏二月十八日に宿所の下神代村本陣、翌十九

メ
］四匁　一泊二□
］人召連弐人
□〔メ〕

古文書(5)―2　○破損大、
□泊三休
］松山宿払
、一　九□〔匁〕［　］　五泊三休
［　］同断
［　］□□□
、一　五匁□〔五分カ〕□
右召［　］
メ拾四［　］
三
□□〔泊カ〕□休
、一［　］
□［　］　□□

古文書(6)―1　○上部破損、〈**松山東村**カ〉
閏二月廿日、
神戸忠之進様御上下弐人
］下々四匁弐分　諸入用
□〔メ〕六匁弐分
］六匁　御一泊御一休

閏二月廿日夕ゟ廿一日昼迄、
柳井与次右衛門様御上下弐人
］□〔下〕々九匁　諸入用
□〔メ〕拾五匁
］四匁　御一泊り
閏二月廿二日夕、
柳井与次右衛門様御上下弐人
］□〔下〕々四匁弐分　諸入用
メ　拾匁弐分
七　匁
］弐匁五分　二泊二休
□月廿一日、
春木村庄屋良右衛門
三　匁　二泊二休
］~~六匁五分~~
右召連壱人
］八匁四分　七休分
閏二月四日、春木村庄屋良右衛門弐休
十三日、川面村庄屋要右衛門壱休
［　］田井村庄屋太市壱休
同十四日、井倉村庄屋柳右衛門壱休
同日、石賀村杉丹右衛門壱休

古文書(6)―2　○破損アリ、〈**松山東村**カ〉
同日（十四日）、
金谷村近藤郷蔵　壱休
メ
、一　五分　一休
井［　］連壱人

日に宿所の新見町本陣に挨拶に来たとある。賃金帳に西方村庄屋を「□蔵」とするのは、前の「割出村庄屋善蔵」に引きずられた誤記だろうか。

古文書(7)―1　「**廿一　片岡村**」は、坂部支隊が松山―今津から有漢川を遡って多和山峠を越え、下中津井村までを測量する途中の村である。閏二月五日から肝煎十五郎が宿泊（場所不明）して活動が始まっている。日付は記されていないが、支隊による閏二月十七日松山城下から翌日片岡村の下流八川村まで、さらに片岡村から阿賀郡との多和山峠を越えて下中津井までの測量にも携わったかもしれない。宮瀬村の庄屋など村役の宿泊を記載し、経費が合計三十八匁一分八厘になっている。

古文書(7)―2　「**三十二　陣山西村**」は、日付が書かれてなく、庄屋が召連れと四泊四休して十三匁五分六厘を町宿に支払っている。この村は、松山の約九キロ西にある。「**三十一　北村**」も日付はないが、庄屋が召連れと四泊四休して陣山西村と同じく十三匁五分六厘を町宿払として記している。この村は、松山の約八キロ東にある。「**三十　岨谷村**」も日付がなく、おそらく庄屋が二泊四休し五匁六分を町宿払いしている。岨谷村は、松山の約八キロ東にある。これら三か村は宿泊地や日付が書かれていない。

古文書(8)―1　「**廿四　室納村**」は庄屋の恵兵衛が、閏二月十五日から一人召連れて宿泊し、合計四匁五歩二厘を計上している。「**廿三　有納村**」は室納村の南二キロにあり、庄屋志津太が一人を連れて三泊二休で合計十匁一分七厘を計上している。日時、宿泊地は書かれていないが室納村庄屋とともに坂部支隊の測量に関わったと思われる。

古文書(8)―2　「**十八　田井村**」は庄屋が召連れ

、一　[　　]　一泊り
　□[
　[　　]右衛門
、一　[　　]　一泊り
　　]召□[連]□人
、一　壱匁弐分　一休
　同十九日、近似村庄屋久右衛門
、一　弐匁　一休
　同日、右召連四人
、一　拾匁五分　一泊一休
　十九日夕、矢田部村池□[上]□[直]左衛門
　廿日夕、[　　]村[　　]右衛門
　□□　割出村庄屋善蔵
　　〆
、一　四匁五分　一泊一休
　　右召連三人
、一　拾匁五分　三泊三休
　廿一日昼方二十四日朝□、
　　西方村庄屋□蔵
、一　四匁五分　三泊三休
　　右召連壱人

古文書(7)―1

　　□□
廿壱　　〃**片岡村**（吉備中央町）
、一　七匁七分　四泊三休
　　庄屋代平蔵町宿払
、一　四匁七分三厘　四泊三休
　　右召連一人

、一　弐匁壱分五厘　二泊二休
　閏二月五日夕　七日朝迄、
　　肝煎十五郎町宿払
、一　三匁五分　一泊壱休
　　宮瀬村太治右衛門
、一　壱匁五分　同断
　　右召連人足
、一　九匁六分　一休
　　但用懸り庄屋八人
、一　四匁　同断
　　右召連人足
（貼り紙）
　〆九匁四分
　　□□
一　三匁五分　一泊り一休
　　室納村恵兵衛
一　一匁五分　同断
　　右召連人足
合三拾八匁壱分八厘

古文書(7)―2　○一部破損、
三十二　　〃**陣山西村**（高梁市）
、一　八匁四分　四泊四休
　　庄屋丈右衛門町宿払
、一　五匁壱分六厘　同断
　　右同断召連
　〆拾三匁五分六厘
三十壱　　〃**北村**（吉備中央町）
、一　八匁四分　四泊四休
　　庄屋弁十郎町宿払

人足とともに三泊四休し、十一匁三分を町宿払している。日付と宿泊地はない。田井村は、飯部村の下流にある。「廿九　八田部村」は、庄屋助右衛門が一泊一休し二匁六分町宿払いをしている。二月二十六日から二十八日、庄屋荘平が召連れ人足と松山で二泊二休している。八田部村は、松山の南約二十キロの総社にある松山藩の飛地で、大庄屋池上直左衛門の動きについては古文書(3)―1・古文書(4)―1・古文書(6)―2に見える。

古文書(9)　これは「（番号不記）上唐松村」の人足宰領の茂十郎が一泊一休で一匁三分を計上している。上唐松村は人足帳に十九人が見えており、茂十郎も正田村から飯部村まで四人を連れているので、この一泊一休はそれ以外の動きかもしれない。この古文書は賃金帳の最後になっており、合計金額一貫三百二拾九匁七分八厘と書かれている。

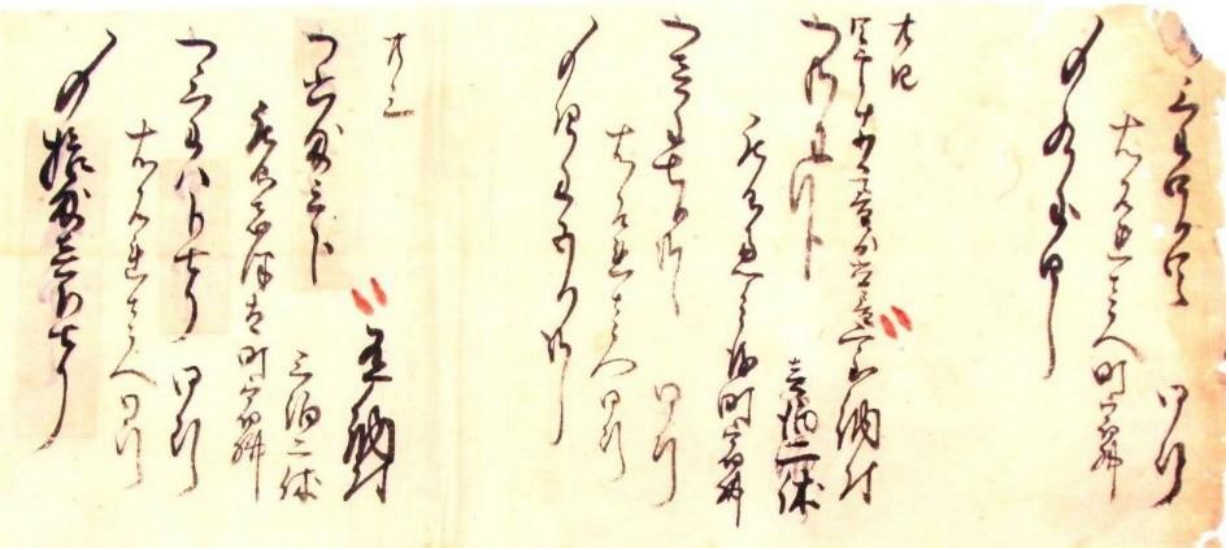
三　賃金帳まとめ

（1）測量隊と庄屋たちの動き

九枚の古文書から測量隊が九州からの帰路、浜田から安芸、備後へと測量している二月十八日には備中北部の庄屋たちは測量ルートに関わりなく、その受け入れのための準備に取り掛かっていることが読み取れる。本隊が畑木村へ宿泊する一か月前である。本隊と支隊の測量ルートに沿う村も沿わない村も村役たちが誰からに指示で動き始めたのであろうか？松山板倉藩の代官である内海宗右衛門は測量隊が備中国を測量する一か月前に宿泊予定地の飯部村に宿泊している。

（2）村ごとの経費の報告先

賃金帳は備中北部の村々の村役（大庄屋・



古文書（８）－１

古文書(8)―1

、一　三匁四分四厘　同断
　右召連壱人町宿払
　〆九匁弐分

廿四　〃室納村（吉備中央町）
閏二月十五日昼方六日昼迄、
、一　弐匁弐分　壱泊二休
　庄屋恵兵衛町宿払
、一　壱匁七分弐厘　同断
　右召連壱人同断
　〆四匁五分弐厘（ママ）

廿三　〃有納村（吉備中央町）
、一　六匁三分　三泊二休
　庄屋志津太町宿払
、一　三匁八分七厘　同断
　右召連壱人同断
　〆拾匁壱分七厘

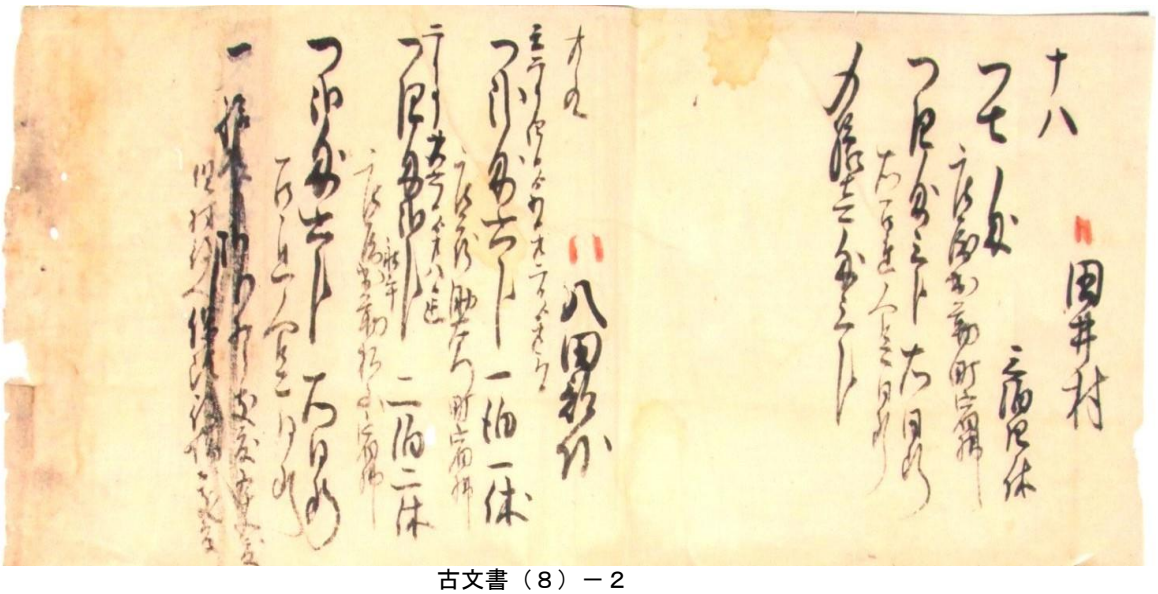
、一　五匁壱分六厘　同断
　右召連一人同断
　〆拾三匁五分六厘

三十　〃咀谷村（吉備中央町）
（貼り紙）
□　五匁六分　二泊四休
［　　］之丞町宿払

庄屋・庄屋代・肝煎）と召連れたちが伊能測量隊を迎えるための準備ともてなしのために事前に宿泊と休憩にかかった経費を書き上げた帳面の一部である。日付から見ると本隊が畑木村へ宿泊する一か月以前からその準備にかかっている。「支度」と書かれているがその内容は料理、宿舎、夜の天体観測に関することなど様々であったと思われる。経費については庄屋一泊一休三匁五分、召連は一匁三分～一匁五分で計算され、松山藩代官柳井氏は一泊六匁となっており、庄屋、庄屋代、肝煎らの経費が「町宿払」としているのは、すでに支払ったことを表している。

これらの経費がどこへ報告されたかについて考えてみると、松山藩領の二人の大庄屋である畑木村杉三郎右衛門と八田部村池上直左衛門の具体的な動きと経費は明記されるが、『測量日記』に見える新見藩の大庄屋戸田専左衛門の記述はないので、この賃金帳は松山藩向けの報告である可能性が高い。人足帳と賃金帳が襖の下張となって残っていたのが松山市内の民家であったことも、松山藩に提出されたことを物語るのではないだろうか。

江戸時代将軍の代替わりに派遣された巡見使の費用は村割、郡割によって賄われた例がある。（『中央町誌』）また、文化十年第八次九州測量の帰路、美作国を測量した際、宿泊した津山大年寄玉置氏の日記に測量隊を迎える様子が残っている。それによると、津山へ到着するのは十二月四日だがその年の正月三十日には岡山、松山へ聞き合わせに派遣しその覚書をまとめている。岡山へは第五次、松山へは第七次に測量隊を迎えていたからである。また、本隊が鳥取に



古文書（８）－２

古文書(8)—2

十八
一　七匁　　〃**田井村**（高梁市）
　　庄屋出勤町宿払　　三泊四休
一　四匁三分　　右同断
　　右召連人足同断
　　〆拾壱匁三分

廿九　　〃**八田部村**（総社市）
閏二月四日ゟ五日、廿二日ゟ廿三日、
一　弐匁六分　　一泊一休
　　庄蔵〔屋〕助右衛門町宿払
二月廿六日ゟ二十八日迄、
一　四匁弐分　　二泊二休
　　庄屋荘平出勤松山宿払
一　弐匁六分　　右同断
　　召連人足同断
十、拾匁弐分五厘支度二十五度
　　但村役人保頭□□仕度

古文書(9)

○番号ナシ、
一　壱匁三分　　〃**上唐松村**（新見市）
　　但宰領茂十郎町宿払　　壱泊壱休
合　壱貫三百弐拾九匁弁
　　七分八厘

到着したことについて鳥取城下の大年寄と連絡し合っている。「測量隊の宿泊地である玉置邸の塀に破損個所が見つかったが、座敷から見えにくいので幕で隠すようにした」という記述があり、事前に様々なことが検討されたことがわかる。四月になると町絵図を作らせ、五月には「測量方被参候ニ付、御本陣詰入用七百四十四匁九分書付、其儘御役所差上置」として津山松平藩へ提出している。

(3) 人足帳や賃金帳をだれが書いたか

日付から見ると測量隊が備後国を測量しているころに庄屋が宿泊地である畑木村杉三郎右衛門宅を訪問しており、測量隊の動きを大名や代官から連絡を受けて、いち早く行動できる立場の者が書いたと思われ、それは備後国との国境に近い哲多郡畑木村の大庄屋杉三郎右衛門ではないかと推定できる。

『測量日記』には、本隊が閏二月十二日備後国箱田村(箱田良助の生誕地)に宿泊した翌日、百谷村大庄屋山手十郎平宅に宿泊した時、畑木村庄屋代丹蔵が来たと記している。本隊が畑木村へ宿泊する四日前に挨拶のため庄屋代を派遣したのである。三郎右衛門は、十六日には東城町の忠敬の宿舎へ挨拶に行き、十七日は本隊の宿泊地に自宅を提供し、十日後の二十六日には坂部支隊が別ルートで松山へ向かう頃、五日間も松山へ宿泊している。

賃金帳九枚の中に大庄屋は、松山藩畑木村杉三郎右衛門、松山藩（飛地）八田部村池上直左衛門の二人が確認できる。『測量日記』によれば、伊能本隊が下神代村・上熊谷村に宿泊した時に新見藩領の大庄屋戸田専左衛門が挨拶に来ているが、賃金帳にその動きの記述はない。

畑木村杉三郎右衛門自身の動きと畑木村の項には多くの村庄屋が来て宿泊し、準備をしていることが記述されていることから、測量隊受け入れの本部として杉家邸宅と実行委員長的な役割を杉三郎右衛門が担当していたのではないだろうか。

終わりに

・人足帳、賃金帳合計十五枚の古文書は、昨年八月下旬、千葉県香取市の伊能忠敬記念館に寄贈した。多くの方々に見ていただくと共に、受け入れ側の史料としてさらに研究を深めていただくことを祈っている。

・この古文書の翻刻では津山市在住の三好尚子氏、漆間千香子氏の協力を得た。
・本会誌への執筆・投稿については、水田清会員（岡山県瀬戸内市）に多大の尽力を頂いた。記して感謝します。
・原稿の校正には室山孝氏にご指導いただいた。

【参考文献】

・佐久間達夫校訂『伊能忠敬測量日記』第三巻、大空社、一九八九年
・下山練「伊能勘解由の津山測量行に関する記録」（津山郷土館報第6集）一九七四年
・西村直城「伊能忠敬測量隊第七次測量における安芸・備後北部の行程」（広島県歴史民俗資料館研究紀要第9集）二〇二〇年
・『中央町誌』通史編、岡山県中央町誌編纂委員会、二〇二〇年

東京国立博物館所蔵の中図「大日本沿海輿地図 中国四国」から畑木村周辺

賃金帳まとめ　（古文書の漢数字は算用数字に書き換え）						測量隊の動き 本隊は伊能隊・支隊は坂部隊
(1)-1	**八　畑木村**	8匁	1泊１休	2月26日夕～27日朝	神原村・割出村庄屋	本隊石見銀山へ、支隊安芸八千代
		1匁5分	同	同	召連	
		14匁	2泊2休	2月18日~19日	下神代・上神代村庄屋	合同隊石見浜田出発
		2匁3分	1泊	閏2月3日　　神原村庄屋	閏2月5日　　割出村庄屋	本隊、支隊とも三次五日市付近
		2匁	同	同召連れ	同召連れ	
		28匁	2泊2休	閏2月4日～6日昼	久代・金谷・原・下神代	本隊、支隊とも三次五日市付近
(1)-2		9匁	同	同	同久代・金谷・原召連	
		10匁5分	1泊1休	閏2月6日原村人足4人	閏2月13日原村飛脚1人	13日本隊吉舎、支隊備中高山村
				閏2月28日料理人荷物持2人		本隊足守村
		□匁4分	4泊4休	17~20	矢田東村庄屋（松山宿払）	
		□５匁１分6厘	同	同日	同召連れ	
		□６匁３分	3泊3休	閏2月1日~4日	矢田東村庄屋（松山宿払）	本隊備後横谷、三次付近
		3匁2分7厘	同	同	同召連れ1人	支隊安芸深瀬村から三次
(2)-1	2枚目	14匁6分	１泊	閏2月12日	杉三郎右衛門東城宿払い	本隊備後箱田村、支隊備中高山市
			5泊6休	同22日~28日	杉三郎右衛門松山宿払い	合同隊松山から総社、足守へ
		9匁7分4厘	同	同	同召連れ	
		22匁2分	2泊1休	宿泊前からの支度代	金谷・矢戸・八鳥・上神代村庄屋	
		22匁5分	1泊1休	閏2月17日夕～18昼	下神代・上神代村肝煎3人・丈右衛門	本隊畑木村泊・下神代村着
					清七・召連1人・杉三郎右衛門召連1人	
					矢谷氏肝煎4人・肝煎人足4人	支隊八川村から下中津井村
(2)-2		4匁5分	1泊1休	破れ	八鳥村・矢戸村庄屋召連	
		7分	2泊1休	16日夕~18日朝	料理人4人支度代	本隊浜田、支隊石見街道
		1匁1分	1泊1休		料理人荷持人足2人	
		9匁4分5厘	1泊1休		飛脚五度分　松山宿払い	
		合 155匁9分1厘				
	六　飯部村	6匁	御一泊り	2月22日	内海宗右衛門御上下3人	本隊石見銀山？支隊山県郡蔵迫
		7匁2分	諸入用		下々	
		13匁2分				
		6匁	御一泊り	閏2月7日	内海宗右衛門御上下3人	本隊宇賀村、支隊備後庄原
		7匁2分	諸入用		下々	
		13匁2分			御1休は2匁	
(3)-1	3枚目	21匁	3泊3休	閏2月10日昼迄	近似村久右衛門・大野部村？	本隊府中、支隊東城から東油木村
		4匁5分	３泊３休		久右衛門召連れ1人	
		8匁2分	2泊3休	閏2月20日夕~22日昼	矢田部村池上直左衛門	合同隊新見泊・松山着
		3匁5分	2泊3休	同日	召連れ1人	
		21匁	1泊1休	閏2月21日夕～22日昼	畑木村杉三郎右衛門・	支隊飯部村泊・松山着
					下神代村庄屋鹿右衛門	
					矢戸村柳助・長屋村庄屋太三右衛門	
					宮河内村庄屋常蔵・成松村手伝要兵衛	
		3匁	1泊1休	同日	杉三郎右衛門・鹿右衛門召連２人	
(3)-2		18匁6分	3泊2休	閏2月19日夕～22日朝	石賀村杉丹右衛門・金屋村近藤郷蔵	本隊下熊谷村泊・松山,支隊下中津井
		16匁8分	2休	閏2月15日	上唐松村長屋村宮河内村下唐松村	本隊油木東、支隊地頭~下原
					石賀村成松村7か村庄屋諸事申談	
					出会い仕り候節支度入用	
		4匁5分	1泊1休	閏2月21日夕～22日昼	矢戸村肝煎良右衛門・廣治人足1人	支隊飯部村泊・松山着
		2匁5分	1泊1休	閏2月19日夕～20日昼	近似村人足3人	本隊上熊谷村泊・新見着
		合140匁2分				
(4)-1	4枚目	24匁5分	1泊1休	閏2月22日昼～23日朝	下神代村庄屋鹿右衛門・近似村庄屋	合同隊松山出発・宍粟泊
					久右衛門・原村庄屋益治・矢田部村	
					池上直左衛門・矢戸村庄屋柳助	
					春木村庄屋良右衛門・割出村庄屋善蔵	
		10匁5分	1泊1休	（同日）	（上記庄屋の）召連7人	
		20匁	1泊1休	同日	通し宰領4人・召連4人	
		4匁2分	2泊2休		法曾村庄屋鎮太　町宿払	
		2匁5分8厘	2拍2休		（上記庄屋）召連1人	
		4匁5分	1泊1休	19日夕～20日昼	則安村人足3人	本隊新見泊、上熊谷村へ出発
		2匁	1泊	21日夕	長屋村人□□□人	合同隊新見泊
(4)-2		5匁	1泊	21日夕	料理人、手伝3人、荷持1人　5人	合同隊新見泊
		8匁4分	2泊2休	21日昼～23日朝	料理人平四郎、手伝人3人　４人	合同隊新見泊から松山
		3匁5分	支度7度	閏2月５日	原村状持2人	本隊三次、支隊三次畠敷
				□19日	石賀村状持1人	合同隊新見泊
				22日	新見人足4人	合同隊新見出発
		3匁2分5厘	支度11度		法曾村肝煎御通行前役共	
		9匁4分5厘	破れ～～～～～～～～～～			

(5)-1	5枚目**割出村**	８匁４分	4泊4休		庄屋善蔵松山出勤	
		5匁1分6厘	4泊4休		召連同断	
		〆13匁5分6厘				
	正田村	□8匁	1泊2休	□2月21日昼～22日昼	柳井与次右衛門様御上下2人	本隊新見~松山、支隊新見合流
		外に13匁2分			諸入用	
		9匁4分5厘	1泊2休	閏2月21日昼～22日昼	割出村庄屋善蔵、春木村庄屋良右衛門	支隊飯部村出発松山着
		4匁	1泊2休		□□人召連2人	
		破れ～～～～～～～～～～				
(5)-2		破れ～～～～～～～～～～				
(6)-1	6枚目	破れ～～～～～～～～～～				
				閏2月20日	神戸忠之進様御上下2人	合同隊新見出発上熊谷泊
		4匁2分			諸入用	
		〆6匁2分				
		6匁	御1泊御1	閏2月20日夕~21日昼	柳井与次右衛門様御上下2人	合同隊新見出発
		9匁			諸入用	
		〆15匁				
		4匁	御1泊り	閏2月22日夕	柳井与次右衛門様御上下2人	合同隊松山泊
		4匁2分			諸入用	
		□（〆）**10匁2分**				
		7匁	2泊2休	□2月21日	春木村庄屋良右衛門	支隊は飯部村泊か？
		3匁	2泊2休		右召連1人	
		8匁4分	7休分	閏2月4日	春木村庄屋良右衛門　2休	支隊三次付近
				13日	川面村庄屋要左衛門田井村庄屋太市1休	本隊備後百谷村支隊高山村
				14日	井倉村庄屋柳右衛門　1休	支隊川上郡地頭村泊
				14日	石賀村庄屋杉丹右衛門　1休	本隊備後下井関村泊
(6-2)				同日	金谷村近藤郷蔵　1休	
		5分	1休		□□人召連2人□召連1人	
			1泊り		□□右衛門	
			1泊り		□召連□人	
		1匁2分	1休	同19日	近似村庄屋久右衛門	本隊新見、支隊は阿口村泊
		2匁	1休	同日	召連4人	
		10匁5分	1泊1休	19日夕	矢田部村池上直左衛門	本隊新見、支隊は阿口村泊
				20日夕	□右衛門、割出村庄屋善蔵	本隊上熊谷・支隊小坂部村
		4匁5分	1泊1休		同召連3人	
		10匁5分	3泊3休	21日昼～24日朝	西方村庄屋嘉蔵	合同隊新見から松山城下
		4匁5分	3泊3休		同召連1人	
(7)-1	**21　片岡村**					
		7匁7分	4泊3休		庄屋代平蔵　町宿払	
		4匁7分3厘	4泊3休		同召連1人	
		2匁1分5厘	2拍2休	閏2月5日夕～7日朝	肝煎七右衛門町宿払	支隊三次から正原
		3匁5分	1泊1休		宮瀬村太治右衛門	
		1匁5分	同断		同召連人足	
		9匁6分	1休		但　用懸庄屋8人	
		4匁	同断		同召連人足	
		張り紙〆9匁4分				
		3匁5分	1泊1休		宮瀬村恵兵衛	
		1匁5分	同断		同召連人足	
		合38匁1分8厘				
(7)-2	**32陣山両村**	8匁4分	4泊4休		庄屋丈右衛門町宿払	
		5匁1分6厘	同断		同断召連	
		〆13匁5分6厘				
	31　北村	8匁4分	4泊4休		庄屋丈右衛門　町宿払	
		5匁1分6厘	同断		同断右召連	
		〆13匁5分6厘				
	30　岨谷村	5匁6分	2泊4休		□□之丞　町宿払	
		破れ～～～～～～～～～～				
(8)-1		3匁4分4厘	同断		右召連1人　町宿払	
		〆9匁2分				
	24　室納村	2匁2分	1泊2休	閏2月15日昼～6日昼	庄屋恵兵衛　町宿払	支隊地頭村から下原村
		1匁7分2厘	同断		右召連れ壱人　同断	
		〆4匁5分2厘				
	23　有納村	6匁3分	3泊2休		庄屋鎮太　町宿払	
		3匁8分7厘	同断		右召連れ１人　同断	
		〆10匁1分7厘				
(8)-2	**18　田井村**	7匁	3泊4休		庄屋出勤　町宿払	
		4匁3分	同断		右召連人足	
		〆11匁3分				
	29 矢田部村	2匁6分	1泊1休	閏2月4日~5日・22日～23日	庄屋助右衛門　町宿払	支隊三次十日市・新見松山
		4匁2分	2泊2休	2月26日～28日	庄屋荘平出勤松山　宿払	本隊石見銀山へ、支隊安芸八千代
		2匁6分	同断		召連人足　同断	
		消し～～10匁2分5厘～～支度25度～～				
(9)	**上唐松村**		1泊1休		但　宰領茂十郎　町宿払	
		合　1貫329匁7分8厘				

『天文簡要論』の山高

菱山 剛秀

はじめに

伊能忠敬の測量は、地図作りを目的に実施されたため、平面位置の測量である。高さの測量は星の高度を測り、その地の緯度を求めるために行われたが、土地の高低測量は坂道の距離から水平距離を算出するための高度角の測定で、富士山など一部の例外はあるが、山の高さを測った記録は残っていない。

ところが、忠敬と親交のあった會田安明（算左衛門）が残した『天文簡要論』には、江戸深川の忠敬宅と第三次測量の途中で測定した合計12の山の高さが記録されている。記録には測定をおこなった地名と目標の山名のほか、山高の算定に用いた諸元と計算方法も記載されている。

そこで、この記録を現在の地図と比較してみた。

山高の測定と計算

山高の基本的な測定方法は、先ず、「度分秒を見て而して八線表を検査して其正切線を列する也」とあるように、高度角を測り、三角関数の正接(tan)を八線表（正接を「正切」と表記）から求める。

次に、「山の心迄の尺寸を斗り、（中略）一里を六分詰にする分間繪圖ならば即ち六分を法として其尺寸を除く」とあるから、測量地点から目標の山までの距離を作成した分間絵図上で測り、その長さを六分で割り、現地の里数を求める。

さらに、「是に其正切線を乗ずれば其山の直高となる」とあるので、先に求めた高度角の正切と測量地点から山頂下までの水平距離を乗じることで山の高さを求めるとしている。（図1）。

$$H = \tan(\varphi) \times S$$

H：山高（測量地点との比高）

φ：高度角

S：距離

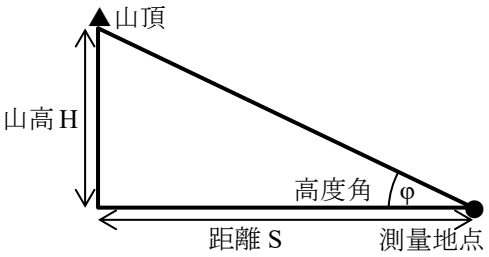


図１ 山高の計算方法

表1は検証に使用したデータであり、図2・図3・図4は、観測地点と山の位置図である

観測地点	緯度			経度			標高
深川黒江町	35°	40′	28″	139°	47′	40″	1m
本庄宿	36°	14′	28″	139°	14′	28″	55m
秋山村	37°	25′	10″	140°	04′	52″	516m
乱川村	38°	23′	12″	140°	22′	33″	111m
象潟	39°	12′	43″	139°	53′	49″	3m
弘前城下土手	40°	35′	58″	140°	28′	28″	39m
目標地点	緯度			経度			標高
冨士山	35°	21′	38″	138°	43′	39″	3776m
筑波山	36°	13′	33″	140°	05′	55″	871m
日光中善寺山	36°	45′	53″	139°	29′	24″	2486m
武甲山	35°	57′	06″	139°	05′	52″	1304m
大山	35°	26′	27″	139°	13′	52″	1252m
赤城山	36°	33′	37″	139°	11′	36″	1828m
浅間山	36°	24′	23″	138°	31′	23″	2568m
磐梯山	37°	36′	03″	140°	04′	20″	1816m
月山	38°	32′	57″	140°	01′	37″	1984m
葉山	38°	31′	45″	140°	12′	38″	1462m
鳥海山	39°	05′	58″	140°	02′	56″	2236m
岩城山	40°	39′	21″	140°	18′	11″	1625m

表１ 検証に使用したデータ

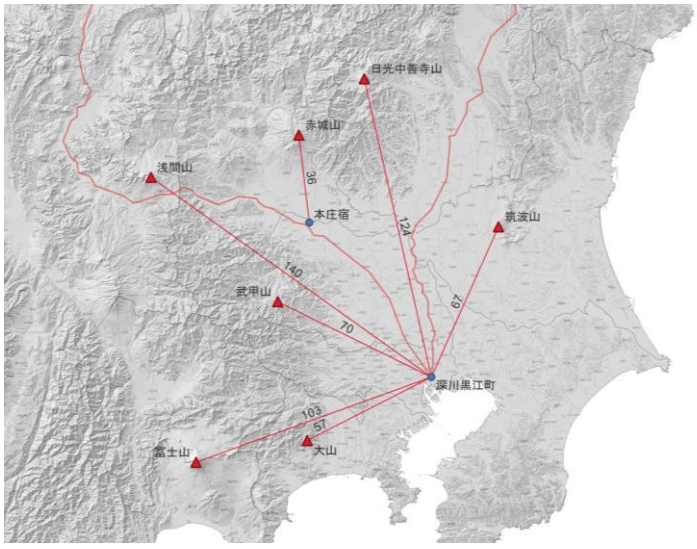


図２ 関東地方の山と観測地点・目標地点位置図

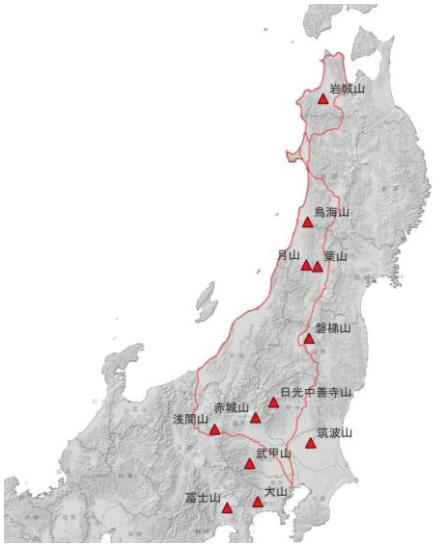


図１ 第３次測量ルートと山の位置

表２は、表１の座標値から計算した観測地点と目標地点の距離と比高を天文簡要論の記録と対比したものであり、方位角は表１の座標値から計算したものである。

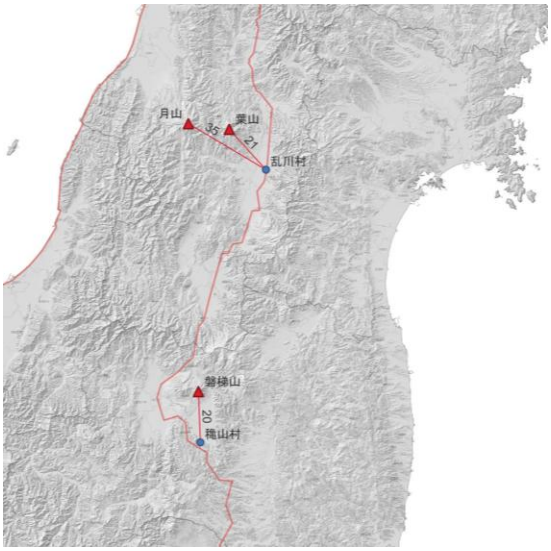


図３　東北地方南部の観測地点・目標地点位置図

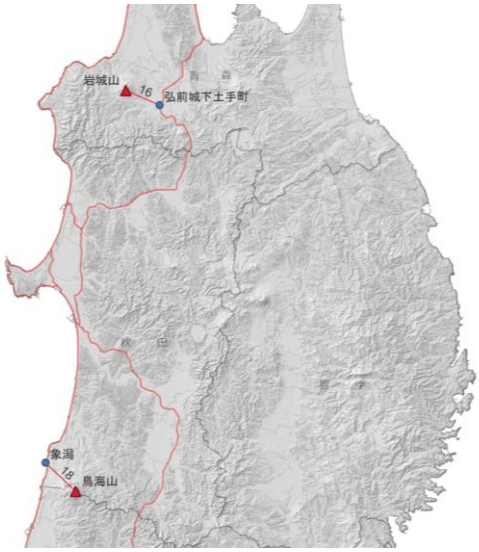


図２　東北地方北部の観測地点・目標地点位置図

この計算方法では、気差や球差を考慮しておらず、また観測地点から目標までの距離が長くなるほど高度角の観測精度が低下するため、距離が長いと概して誤差が大きくなる傾向が見られる。

會田安明が忠敬の測量結果を元にこれを記述したのは、忠敬の第３次測量後と推察されるが、忠敬は別に球差を考慮した江戸から富士山の山高の算定をおこない、一里（３９２７ｍ）の値を得ていることが『地球測遠術問答』に記されている。

観測地点	目標地点	比高	要論比高	測地線長	要論距離	方位角
深川黒江町	冨士山	3775m	4276m	103km	102km	250°
深川黒江町	筑波山	870m	1088m	67km	68km	24°
深川黒江町	日光中善寺山	2485m	2057m	124km	122km	347°
深川黒江町	武甲山	1303m	1415m	70km	70km	296°
深川黒江町	大山	1251m	1409m	57km	57km	243°
本庄宿	赤城山	1773m	1774m	36km	32km	353°
深川黒江町	浅間山	2567m	1582m	140km	143km	305°
秋山村	磐梯山	1300m	1198m	20km	19km	357°
乱川村	月山	1873m	1909m	35km	36km	300°
乱川村	葉山	1351m	1302m	21km	21km	317°
象潟	鳥海山	2233m	1973m	18km	18km	133°
弘前城下土手町	岩城山	1586m	1553m	16km	16km	293°

表２　天文簡要論の記述の換算値と表１の値による計算値
（赤城山の比高は、計算過程の値と整合しないため、山形大本の16町16間を採用）

天文簡要論（坤）（東北大学附属図書館）※

諸国山高測量

今爰に云う所は尋常の丁見者の用ゆる所の術にはあらず東河先生蒙公命諸国を海辺通測量する次手に山高も測る所の術也

尋常の術とは異に乂甚精密なるもの也

譬えば道路を測量するとき高山を見るときは其所に大方位盤を居え彼山は子何分何厘或は丑の何分何厘に當ると彼山の至て高き所を測る也

此の方位を見定むる冂尤簡要なり

故に小方位盤及び小象限儀にても別々に測る也

而して其象限儀に盛附ある所の度分秒を見て而して八線表を検査して其正切線を列する也

此の如く其山の見える所々に於て測る冂なり後に分繪図を製して而后に其山の方位に随て白毛を引　幾筋も幾筋も彼山を見し數ほど毛を引　其毛各結び合所は即ち山の心なり

是に至て結び合わざるもあるもの立位に差ひあるもの也　故に各結び合を以て密合とする也

而後に其見る所より山の心迄の尺寸を斗り（乃曲尺を以て計之なり）一里を六分詰にする分間繪圖ならば即ち六分を法として其尺寸を除くときは其見る所より山の心迄の里數となる也

是に其正切線を乗ずれば其山の直高となる

乃し一里以下は三十六丁を乗して丁數とし一丁以下は六十間を乗乂間數を得一間以下は六尺を乗乂尺寸を得るなり

諸国山高

冨士山　直高一里三丁一十二間

是は分間繪圖に得て計り見る所　江戸深川黒江

丁より冨士山の心迄直径二十六里　是に其正切線を乗じて得るなり

筑波山　直高九丁五十八間四尺八寸
是は分間繪圖に因り斗り見る所　深川黒江丁より築波山の心迄直径十七里三分三厘なり　其正切線を乗じて得るなり

日光中禪寺山　直高十八丁五十一間三尺六寸
是は分間繪圖に因て斗り見る所　深川黒江丁より中禪寺の心まで直径三十一里零五厘なり　是に其正切線を乗じて得るなり

武甲山　直高十二町五十八間二尺四寸
是は分間繪圖に仍って斗り見れば一尺零六分二厘あり　一里を六分詰め分間圖なる故に即ち六分を法と乂割ば深川黒江丁より武甲山の心迄直径十七里七分なり　是に其角度の一度一十零分の正切線〇〇二〇三六を乗じて直高を得る　乃ち里下は三十六丁を乗じて丁下は六十間を乗じ間下は六尺を乗ずるなり

大山　直高十二丁五十五間二尺六寸
是は分間繪圖に仍て斗り見れば八寸七分一厘なり　一里を六分詰の分間繪圖なる故に即ち六分を法として除ば深川黒江町より大山の心迄の直径十四里五分一厘六六六余なり　是に其角度一度二十五分の正切線　〇〇二四七三を乗じて直高を得る乃ち丁間尺寸は前理に仍て得るなり

赤城山直高十六間（ママ）
是は分間繪圖に依って斗り見れば四寸九分あり一里を六分詰の分間繪圖なる故に即ち六分を法と乂除けば中仙道本荘宿より赤城山の心迄八里一分六六六余なり　是に其角度三度一十零分の正切線〇〇五五三三を乗じ直高を得る乃ち丁間尺寸は前理に仍て得るなり

浅間山　直高十四丁三十間
是は分間繪圖にて斗り見れば深川黒江丁より浅間山の心まで三十六里半あり　是に其正切線を乗じて得

磐梯山　直高十零丁五十九間二尺三寸
是は分間繪圖にて斗り見れば一尺七寸一分五厘あり　一里を三寸六分詰の分間圖なる故に三寸六分を法と乂除けば會津秋山村より磐梯山迄の直径四里七分六四あり　是に其角度三度四十零分の正切線〇〇六四〇八を乗じて直高を得る

月山　直高十七丁三十零間六寸
是は分間繪圖にて斗り見れば三尺三寸四分あり　一里を三寸六分詰の分間繪圖なる故に三寸六分を法と乂除けば羽州山形と天童との間乱川村より月山直までの直径九里十丁あり是に其角度三度の正切線〇〇五二四〇を乗じて直高を得る

葉山　直高十一丁五十六間
是は分間繪圖にて斗り見れば一尺九寸五分一厘あり　一里を三寸六分詰の分間なる故に三寸六分を法と乂除けば天童との間の乱川村より葉山の心までの直径五里十五丁六間あり是に其角度三度三十零分の正切線六一一六（ママ）を乗じて直高を得る

鳥海山　直高十八丁五間三尺
是は分間繪圖にて斗り見れば一尺六寸三分あり　一里を三寸六分詰の分間圖なる故に三寸六分を法と乂除けば庄内の象潟より鳥海山の心迄直径四里十九丁有り　是に其角度六度二十零分の正切線〇一一〇九九を乗じて直高を得る

岩城山　直高十四丁十四間
是は分間繪圖に斗り見れば一尺四寸四分あり一里を三寸六分詰の分間圖なる故に三寸六分詰の分間法として除けば弘前の城下土手町より岩城山の心迄の直径四里なり　是に其角度五度四十零分の正切線〇〇九九二三を乗じて直高を得る　是は家棟にて見し故に家の高さ凡三間余を減じて得るなり

抑諸国の山高の冂は其国所に丁間者ありて測りしよしの説あれども甚疑しき冂にして信用なりがたきものなり　其一二を擧て評す

冨士山　高二十五丁
是は本朝語園と云書に見へたり　又古へより云傳る所も二十五丁と云ふ也

月山　高十四丁五十六間余

鳥海山　高十七丁五十八間五尺
是は昔酒田湊に算者ありて測りしよし　古松軒が東游雜記に見えたり
右の如く大ひに相違あり　東河先生の測量と照し見て其相違ある冂を知るべし　抑大場大山等を測る冂は尋常の丁間者の一村分間或は樹木の高さなどを測る意にては必ず密合せざるものなり　其術理は相違なしと云ふ共大場に至りては手練の功無くしては密數は得がたきものなり　尋常の丁間者は少しく其理を知て何なる大場大山にても密合するものと必意只己れ一人が承知して妄りに測り置所なるべし　必ず信用すべからず　孰れ名達の算学者が丁間の達人と世に知らるゝほどの達人の測りし冂にあらざれば信用しがたかるべし

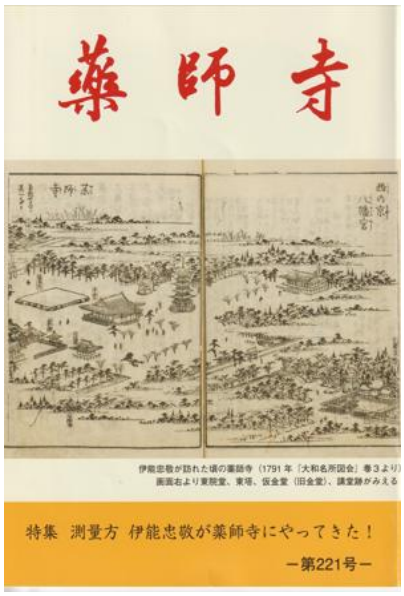
※　国書データベース
https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100328710/1?lr=ja

特集「測量方 伊能忠敬がやってきた！」

薬師寺の『文化五年年預所日記』

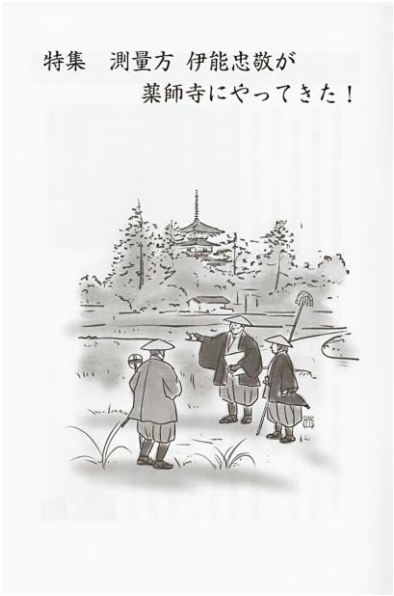
前田 幸子

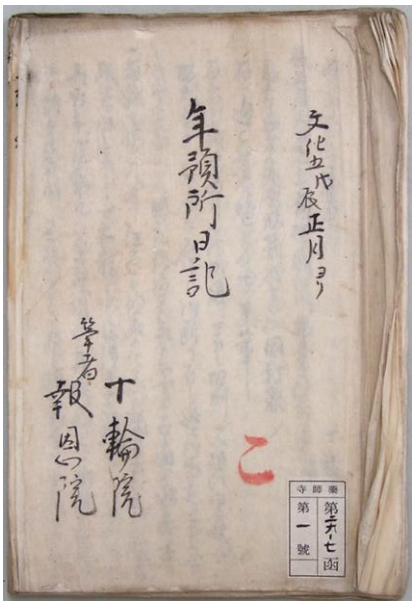
昨年十一月、奈良の薬師寺から同寺の機関誌『薬師寺』が届いた。「伊能忠敬の特集を発行したのでお送りします」との巻紙の鄭重な挨拶状付きであった。差出人は同寺の主事で唯識学寮研究員を兼務されている髙次喜勝氏。薬師寺の機関誌を担当されている。編集後記で「千年の歴史をもつ薬師寺では、江戸時代はあまり注目されませんが伽藍と教学の復興に尽力していた時代です。表紙には伊能忠敬が訪れる二十年ほど前の薬師寺を描いた『大和名所図会』を紹介しました」「江戸時代の薬師寺の雰囲気を感じて頂ければ幸いです」と述べられている。忠敬が第六次測量で大和路の寺社を訪れたのは文化五年（一八〇八）、今から二百十数年前のこと。薬師寺の長い歴史の中では比較的近年に属するのだとあらためて気づかされた。拝受した封筒の「奈良市西ノ京町四五七　法相宗大本山薬師寺」という住所が『測量日記』の「砂村を歴て西京薬師寺迄測」という記述と合致しているのも感慨深い。



特集「測量方　伊能忠敬が薬師寺にやってきた！」

『薬師寺』第二二一号は、伊能忠敬特集にふさわしく、多方面から忠敬訪問の内容に迫っていて読みごたえがある。全ての記事や論説を紹介したいところであるが、紙幅の関係上、いくつかにしぼって転載の許可をお願いした。特に『文化五年年預所日記』には忠敬訪問当日の経緯が記録されていて興味深い。測量隊を接遇した寺院側の記録としてはこれまで文化五年十二月一日に訪問した法隆寺の『年会日次記』が知られている（『伊能忠敬研究』第一〇一号）が、薬師寺の記録は今回の『年預所日記』が初めての紹介となる。「年預」とは年毎に寺務をつかさどる年番の役職とのこと。忠敬が訪問した際は、この時の年預である報恩院長叡が案内を担当した。その接遇に対して忠敬は大変満足したようで、『文化五年年預所日記』には「**大いに伊能氏よろこびの由也**」との記述が残されている。忠敬が大いに喜んだものは何だったのか。測量家・伊能忠敬の別の一面が窺える貴重な新史料である。次頁以降は『薬師寺』から転載した記事と参考資料である。





◇『薬師寺』頒布申込先・法相宗大本山 薬師寺
電話 0742-33-6001（代）FAX 0742-33-6004

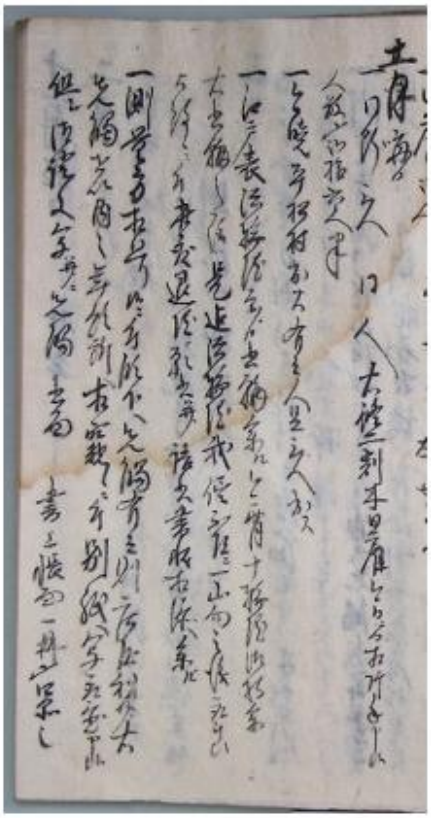
「薬師寺」第二二一号　目次

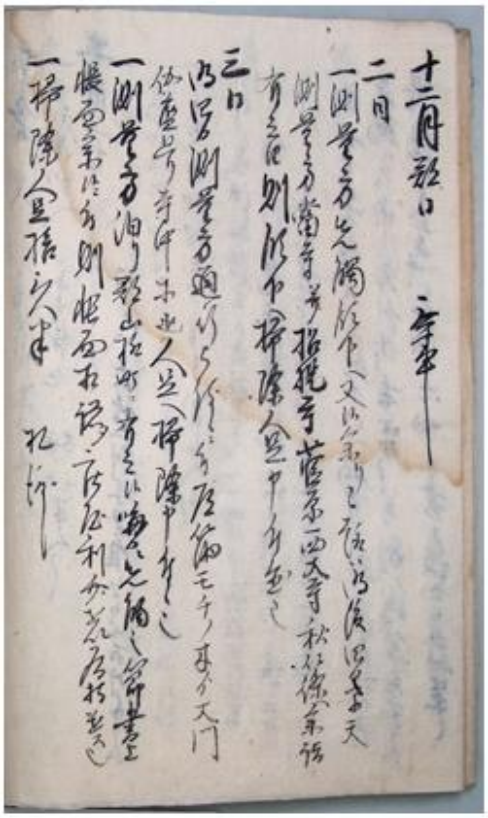
〔修理報告〕大講堂 四天王のうち広目天像
特集　測量方 伊能忠敬が薬師寺にやってきた！
薬師寺と伊能忠敬 …… 管主　加藤　朝胤　4
〔史料紹介〕「文化五年年預所日記」伊能忠敬来訪について …… 編集局　8
伊能測量方による地図と薬師寺付近の測量行程 …… 土平　博　10
薬師寺と幕府役人の巡見 …… 幡鎌　一弘　18
伊能忠敬も拝見した　薬師寺の宝物 …… 編集局　26
〔コラム〕雨傘・黒筒にまつわる伝承と信仰 …… 宍戸　香美　28
宝物拾遺（五十五） ……
高田好胤和上二十七回忌法要ご報告 ……
白鳳歌壇 ……
東京別院だより ……
薬師寺奉賛会だより ……
薬師寺修験咒師本部だより ……
まほろば塾だより ……
お香の会だより ……
定例お写経と法話の会　日程表 ……
お写経勧進報告 ……
32 34 36 38 40 42 43 44 45 46 48

令和六年九月八日発行
「薬師寺」第二二一号
発行所　法相宗大本山　薬師寺
奈良市西ノ京町四五七
発行人　大谷徹奘
編集人　髙次喜勝
印刷所　共同精版印刷株式会社
題字　橋本凝胤
カット　中田文花
表紙　「大和名所図会」

〔史料紹介〕『文化五年年預所日記』伊能忠敬来訪について　編集局

文化五年（一八〇八）十二月四日、伊能忠敬をはじめ測量方が薬師寺を訪れました。今回、伊能一行が訪れた際の薬師寺側の対応が『文化五年年預所日記』（薬師寺蔵）に記録されていることがわかりました。この記録から薬師寺の接遇や、伊能忠敬が拝見した宝物などがあきらかになってきました。





〈翻刻・書き下し文〉

十一月晦日（中略）

一、測量方相廻り候につき、領下へ先触これ有り。則ち庄屋利介、右の先触を以て、内々に年預所へ相窺い候につき、別紙へ写し取り置き申し候。但し、御証文写し、并びに先触、書面を書き上げ一冊にして置く也

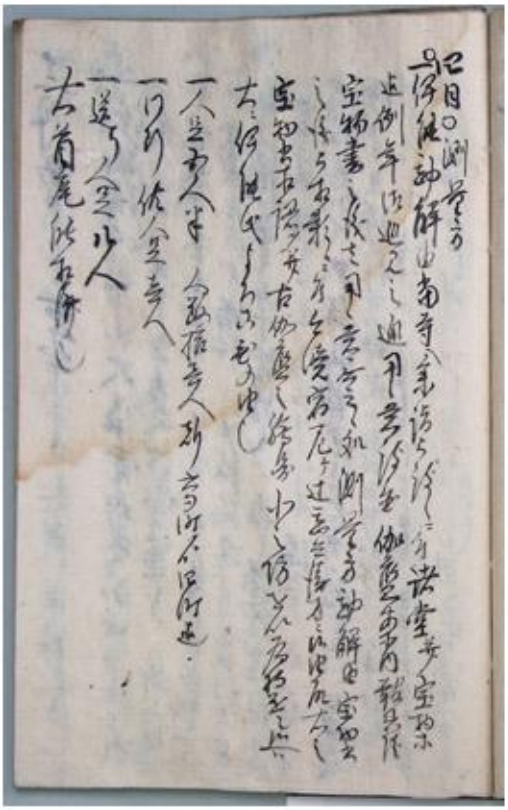
二日

一、測量方の先触領下へ又候参り候趣は明後四日早天に測量方当寺并びに招提寺、菅原、西大寺、秋篠へ参詣これ有る由、則ち領下へ掃除人足を申し付け置く也。

三日

明四日測量方通行致され候に付き、道筋モチノ木より大門、伽藍廻り寺中等まで人足へ掃除を申し付け候也。

一、測量方郡山柳町に泊まりこれ有り候、晦日に先触の節、書上帳面参り候に付き、則ち帳面相認め庄屋利介を以て持ち遣わす也。



一、掃除人足十三人半　相済まし候

四日

一、測量方　伊能勘解由、当寺へ参詣致され候に付き、諸堂并びに宝物等まで例年御巡見の通り用意致し置き、伽藍等報恩院案内す。宝物書の儀は用意これ無きの処、測量方勘解由宝物書の儀相頼まれ候に付き、今暁宿尼ヶ辻甚兵衛方に候由の故、右の宝物書相認め、并せて古伽藍の絵図、北之坊を以て持ち遣わせ候らへば、大いに伊能氏よろこびの由也。

（中略）右、首尾能く相済む也。（編集局書き下し）

〈内容解説〉

文化五年（一八〇八）十一月晦日、寺領の庄屋利介より測量方一行の来訪について先触が来た旨を、内々に薬師寺の年預所※へ相談があった。先触等を書き写して一冊に綴った。

十二月二日、再度測量方の先触があり明後日朝より測量方一行が薬師寺・唐招提寺・菅原寺（喜光寺）・西大寺・秋篠寺に参詣するとの由、領内へ掃除の人手を申し付けた。

十二月三日、測量方の通行のため、道筋の竊の木から大門（南門か）までを掃除した。庄屋利介をして測量方が宿泊している郡山柳町に遣わせた。

十二月四日、伊能勘解由（忠敬）が参詣された。諸堂や宝物等は例年のご巡見の通りに用意した。伽藍等の案内は報恩院長叡が案内した。宝物書（目録）の用意はしていなかったが、伊能氏がこれを所望されたので、今暁（翌朝か）、宝物書を書写して、宿泊先だった尼ヶ辻の甚兵衛宅まで宝物書と古伽藍の絵図（南都西京薬師寺古伽藍図か）を北之坊が持参した。伊能氏は大いに喜んだそうである。以上、首尾よく済んだのである。

※年預所…年毎に薬師寺の寺務をつかさどる年番の役職。

伊能忠敬も拝見した　薬師寺の宝物

黒漆鼓胴（くろうるしこどう）

長四〇・〇㎝　口径一三・五㎝　木製　黒漆塗
奈良時代（八世紀）

薬師寺にわが国古代の楽器が伝わっていることは、あまり知られていないのではないだろうか。本品は、両側の鼓皮面を失った鼓の胴部である。中央の腰部がしぼられた円筒形をなし、腰部には三条の紐帯（ちゅうたい）が巡っている。こうした形の鼓胴は、正倉院伝来品などと共通した特徴をみせるもので、奈良時代にまでさかのぼる可能性を示している。

ケヤキの一材製で、轆轤挽（ろくろび）きによって外形を挽き出し、さらに内側も轆轤挽きして空洞にしている。轆轤挽きの痕跡は外面ではほとんど見えないほどに処理され、内面も丁寧に削ったような痕がある。仕上げの黒漆塗りは、外面だけでなく、塗りにくい内面の深いところにまで及んでいる。一見、簡素な鼓胴だが、手の込んだ作りになっていることが了解されるだろう。

ところで、薬師寺に名器とされる鼓が存在したことを記す史料を、同寺の高次喜勝師よりご教示いただいた。この鼓は法隆寺聖霊会（しょうりょうえ）の鼓を作る際の手本にされるなど（東京国立博物館蔵・黒漆鼓胴の墨書銘）、一定の影響力を誇った品であったようである。この鼓と本品との関係は不詳だが、薬師寺と鼓の興味深いつながりが、両者の存在を通じてあらためて注目される。（三本　周作　奈良国立博物館主任研究員）

舞楽面（ぶがくめん）　還城楽（げんじょうらく）　一面

木造　彩色　漆塗
縦二五・五㎝
室町～江戸時代（一六～一七世紀）

還城楽は、胡人（こじん）が好物の蛇を見つけて喜ぶ様を踊る舞楽の演目で、本作はその所用の面である。目、鼻、頬をひとつに造り（動貌（どうぼう））、これを頭頂から上歯列に至る主体部に組み合わせ、紐を用いて顎を吊り下げる（吊顎（つりあご））構造で、動貌は舞楽面のうち還城楽面にのみみられる特徴。キリとみられる木材を用い、布貼りして錆地を施した上に朱漆を塗り、眼と上下歯列に銀泥を塗る。役柄に応じた怪異な面貌に、還城楽面独自の魅力がある。

還城楽面は天養元年（一一四四）作の法隆寺面や正安三年（一三〇一）長栄作の個人蔵面（天野社［丹生都比売（にうつひめ）神社］伝来）などの古例が知られ、いずれも浮き出た血管や執拗に刻まれた頬の皺を克明に刻み、眼を怒らせた瞋目（しんもく）であらわされる。本作はこうした諸特徴が認められず、形式化のすすんだ様子が見て取れるが、起伏に富む肉取りには作者の確かな彫技が発揮されており、制作時期は中世にさかのぼる可能性がある。

明治八年（一八七四）から同二三年（一八九〇）まで、東大寺大仏殿の廻廊を会場として奈良博覧会が開催されていた。博覧会では奈良の寺社の貴重な宝物類が陳列されたが、明治九年開催の第二回では本面も出陳されている。眉根を寄せて歯をむき出す力強い表情は、当時の人びとの脳裏に確かに焼き付いたことだろう。

（内藤　航　奈良国立博物館研究員）

宝物管理研究所だより

宝物拾遺（五十五）

宝物管理研究所研究員　宍戸香美

『妙法蓮華経』巻第四 見返絵と巻首

伊能忠敬が見た『妙法蓮華経』

伊能忠敬が大和巡見の際に閲覧した薬師寺の宝物のなかに、三つの経典が含まれている。伊能忠敬が閲覧した宝物を記録した『大和国寺社霊宝録』（伊能忠敬記念館蔵）には、

法華経幷開結経十巻　光明皇后御筆

成唯識論　十巻（中略）

大般若経　六百巻　魚養筆

とある。右のうち『成唯識論』と魚養筆の『大般若経』については以前本欄で紹介した（『薬師寺』一八八号、一九六号）。今回は、『妙法蓮華経』（以下、法華経と記す）を紹介する。

本経は法華経八巻と開経である無量義経一巻、結経である仏説観普賢菩薩行法経一巻、あわせて十巻で構成される。現在では一般に法華三部経と総称されるが、近世の宝物帳（後述）では「法華経並開結二経」などと記されている。紺色の料紙に銀泥で界線を引き、金泥で経文を書写している。奥書がないため正確な書写年次は不明だが、平安時代末期の写経とみられる。各巻の表紙には唐草宝相華文、見返には釈迦説法図が金銀泥で描かれ、各紙の紙背には比較的新しい時代の「薬師寺」朱印が捺されており、軸首は金銅製である。現在は奈良国立博物館に寄託されている。

『妙法蓮華経』経箱

伊能忠敬が閲覧した薬師寺の宝物は、奈良奉行や幕府老中の巡見の際に披露した宝物と一致する。天保十一年（一八四〇）『宝物目録帳』（薬師寺文書第二三函一三六号）をみると、巡見用の宝物は長持にまとめて納められていた。そのうち法華経の項には、

紺紙金泥　光明皇后御筆

一、法華経並開結二経　黒蒔絵箱入合　十巻

とある。本経は現在でも黒漆塗の経箱に納められており、蓋や側面に草花紋の蒔絵がほどこされている。右傍書に「光明皇后御筆」との由緒を記すが、光明皇后は奈良時代の人物であり本経の書写年代とは一致しないため、伝承とみるべきであろう。由緒の正確性はともかく、優美な見返絵をもつ古写経の優品である。薬師寺を代表する宝物の一つとして伝えられてきたが、各巻の表紙は破損が大きく、修理が望まれるところである。

同四日　朝晴天　霧深し　六ツ半前　郡山出立　柳町三丁目より初　二町目
一町目　堺町　南町　北町　本町　鍛冶町　観音寺町　郡山領　九条村　七条村
六条村　西京寺領　砂村を歴て西京　**薬師寺迄測　法相宗　真言宗**
兼学　御朱印三百石なり　諸堂宝物別記にあり　光明皇后仏足石に
万葉歌の真筆　碼瑙石の仏檀は世人の知る所なり　それより郡山領
五条村を過て　唐招提寺迄測　律宗惣本寺　御朱印三百石也
諸堂宝物は別記にあり　同寺領　五条村　郡山領　興福院村　石川若狭守知行
宝来寺村　安康天皇御陵あり　両村境に印杭を残し郡山領　斎音寺村　用水池
の中に垂仁天皇の御陵あり　を過ぎ郡山領菅原村を測　右村に喜光寺あり　寺
領三十石　元明帝　元正帝　聖武帝　三帝の勅願所　霊亀元年の建立　開山行基菩
薩なり　鎮守天満宮なり　菅丞相出生の地と云　それより　石河若狭守知行
青柳村　郡山領　西大寺領　柴村を経て秋篠山西大寺迄測　真言律惣本寺
御朱印三百石なり　諸堂宝物は別に記す　それより秋篠村に至る
秋篠寺真言院は真言宗　法相宗兼学　御朱印百石　和州広瀬郡大垣内村の内
人王四十九代光仁帝　同五十代桓武帝勅願所　開祖興福寺の六祖
善殊僧正也　宝物は別に記す　それより無測にて超昇寺村字御霊の神功
皇后　成務天皇　西畑村か　御陵を拝し横領村へ　字甘ケ辻　此所入会　惣名甘ケ
辻と云　七ツ後に着　止宿横領村　茶屋甚助　不残同宿　此夜曇天　**薬師寺使僧**
北之坊　止宿へ来る　此日郡山地方役植村順平　杉山新蔵出る　此夜雨

参考

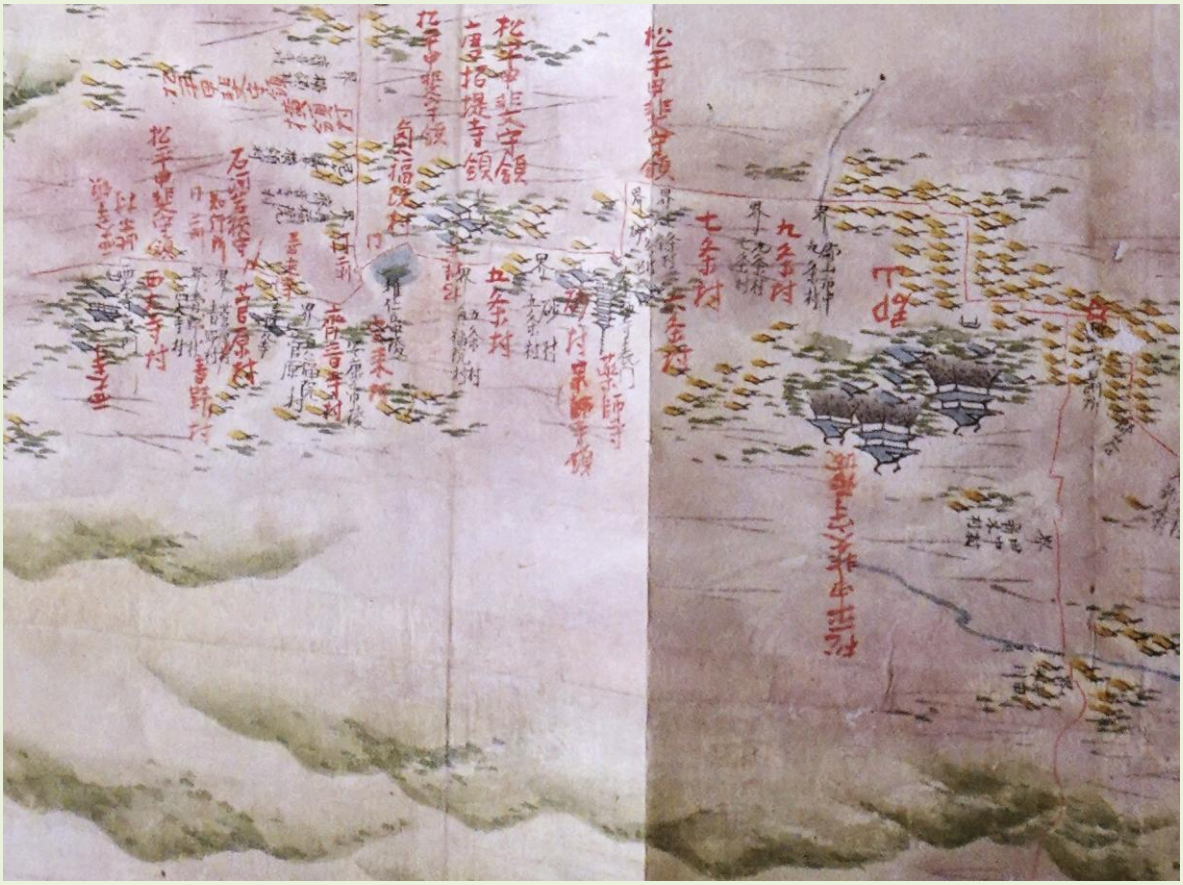
『伊能大図　奈良』（部分）

※　左が北　薬師寺は最下段中央

米国議会図書館蔵

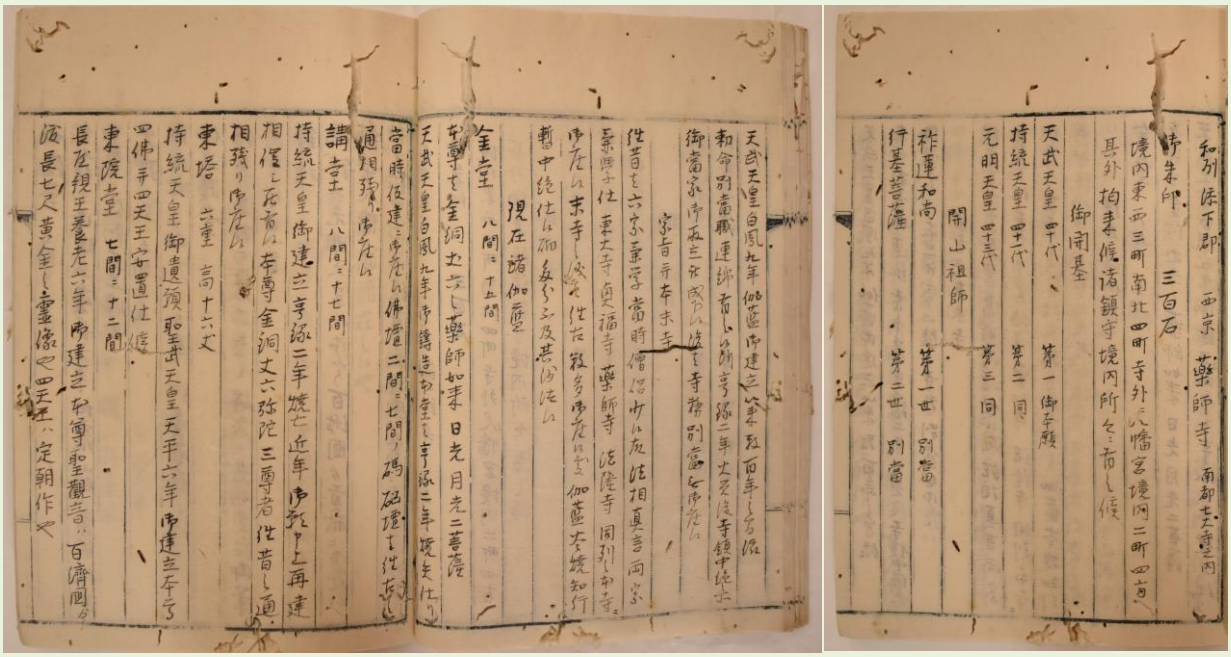
参考

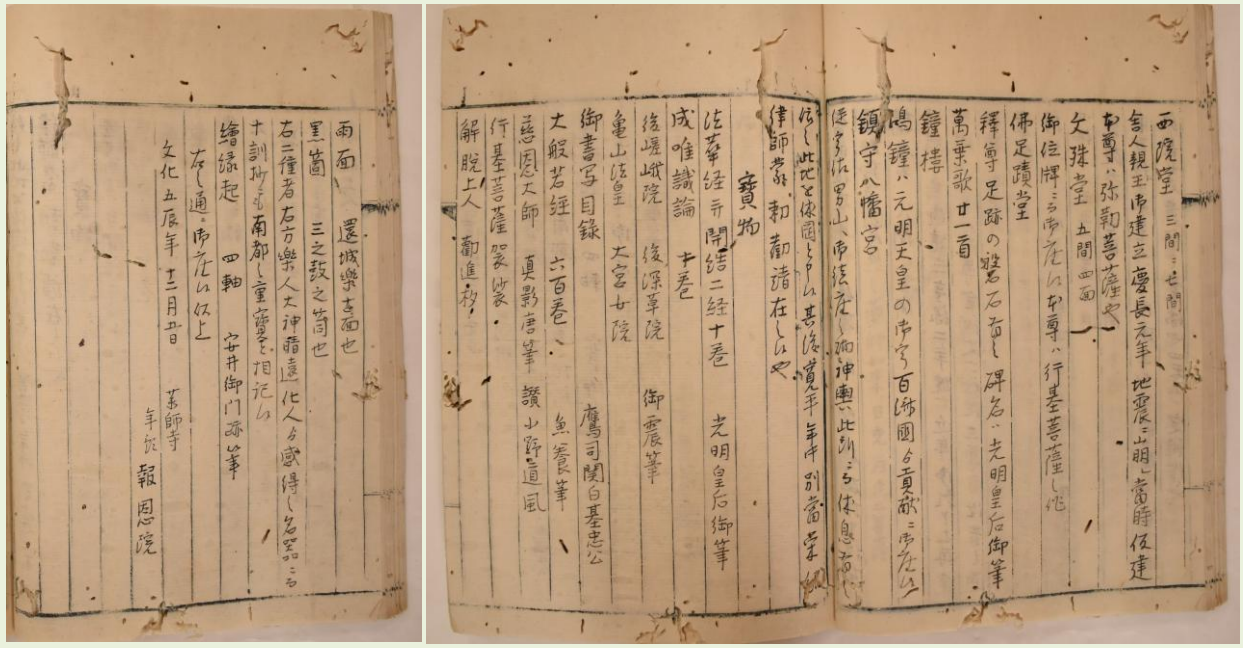
国宝　地図・絵図類85『和州式上郡古陰村　首』薬師寺付近



※　左が北　薬師寺は中央の塔

伊能忠敬記念館蔵　無断流用禁止





『大和国寺社霊宝録』薬師寺条

『大和國寺社霊寶録』伊能忠敬記念館蔵
無断流用禁止

『大和国寺社霊宝録』は測量隊が大和路測量の途次に参詣した寺社の由緒や宝物等を一覧にして記録したものである。『測量日記』に「諸堂宝物は別記にあり」としている「別記」がこの書物にあたる。薬師寺の宝物の項には「法華経」等の経典をはじめ、「雨面　還城楽古面也」や「黒筒　三之鼓之筒也」などの品名がみえる。末尾に「薬師寺　年預　報恩院」とあるのは『文化五年年預所日記』に記述された事情を反映している。『年預所日記』によると、当日は宝物の目録を用意していなかったが、忠敬が所望したので急遽宝物書を書き写し、北之坊に持たせて止宿先へ届けたという。『測量日記』にも「薬師寺使僧　北之坊　止宿へ来る」とあり『年預所日記』の記述に対応している。

国宝紹介　書状類一六四
高橋景保宛て伊能忠敬書状

玉造　功

はじめに

大谷亮吉は『伊能忠敬』の二一八～二一九頁で、「諸侯と地図」と題し徳島藩蜂須賀家が伊能忠敬から実測図を得るために交渉した事例として、高橋景保に宛てた伊能忠敬の書状を紹介している。大谷は「忠敬自筆にかかる書簡草稿の断片〔伊能家にあり〕」と記している。ただし『伊能忠敬』では「（中略）」とされた個所があり完全な翻刻ではない。また平井松午・島津美子『〈稿本・大名家本〉伊能図研究図録』（以下『研究図録』と略す）一四二頁でもこの翻刻を引用して徳島大学附属図書館所蔵伊能図の来歴を検討しているが、原本を確認出来ないとしている。

佐原古文書学習会では、伊能忠敬の未翻刻書状の解読に取り組み始めた。昨年十一月の例会で解読したのが今回紹介する国宝の書状類一六四であり、大谷亮吉が紹介した書状の原本であることが確認出来た。本稿では大谷が省略した十行分や、忠敬が推敲するなかで抹消した部分も紹介したい。

佐原古文書学習会の酒井右二代表からは、この書状の重要性に鑑み、会報に投稿して早く公開するようにと勧めていただいた。記して謝する。

※　佐原古文書学習会の会員は次の通りである。
石津藤好、伊能楯雄、大須賀洋一、岡澤澄枝、及川敏男、小西則子、佐伯悦夫、清宮香子、高橋丈夫、塚原芳久、堤輝彦、成家淑子、細野昌男、山内美和、若杉温

書状類一六四について

伊能忠敬は大名家からの依頼により実測図を作製し提供していた。その例としては三河吉田藩松平信明（老中首座）、近江堅田藩堀田正敦（天文方を所管する若年寄）、肥前平戸藩松浦家、仙台藩伊達家、長州藩毛利家、弘前藩津軽家などが知られている。

この書状では、忠敬本人が徳島藩に伊能図を提供した経緯を記しており、さらには第八次（第二次九州）測量の成果を反映した伊能図の提供を断った理由まで明らかにしている点で貴重な資料である。

忠敬がこの書状を作成した前提は次のようなことであろう。徳島藩側から間重富を通して高橋景保に第八次測量の成果の九州北西部の地図の作製依頼があったことが契機となり、高橋景保が忠敬にこれまでの徳島藩への地図提供の経緯を問い合わせ、それに対する忠敬の回答の下書きが国宝の書状類一六四と考えられる。

徳島藩蜂須賀家が入手していた伊能図

徳島大学附属図書館は徳島藩主であった蜂須賀家旧蔵の中図七舗、大図三舗の伊能図を所蔵している。いずれも針穴があり、渡辺一郎（一九九八）は描図秀逸、彩色優美、保存極良と評価している。その超高精細画像が針穴画像とともに徳島大学附属図書館ＨＰで公開されていることは有り難いことである。

『研究図録』によると、大図は「豊前国沿海地図」三舗で第七次測量の成果図であるが、書状類一六四でも触れておらず、また入手経路の記録もないので本稿では触れない。

中図は「沿海中図」と「大日本沿海図稿」の二種類からなる。

・「沿海中図」

「沿海中図　上」…　関東・東海・北陸
「沿海中図　中」…　奥州（東北）
「沿海中図　下」…　蝦夷（北海道南東部）

この三舗は「沿海地図」と表書きのある桐箱に収められていて、上蓋箱の裏書きには「文化元甲子歳造之　伊能勘解由」とあり、文化元（一八〇四）年に幕府に上呈された「日本東半部沿海地図」と同系統の中図と考えられるとのことである。

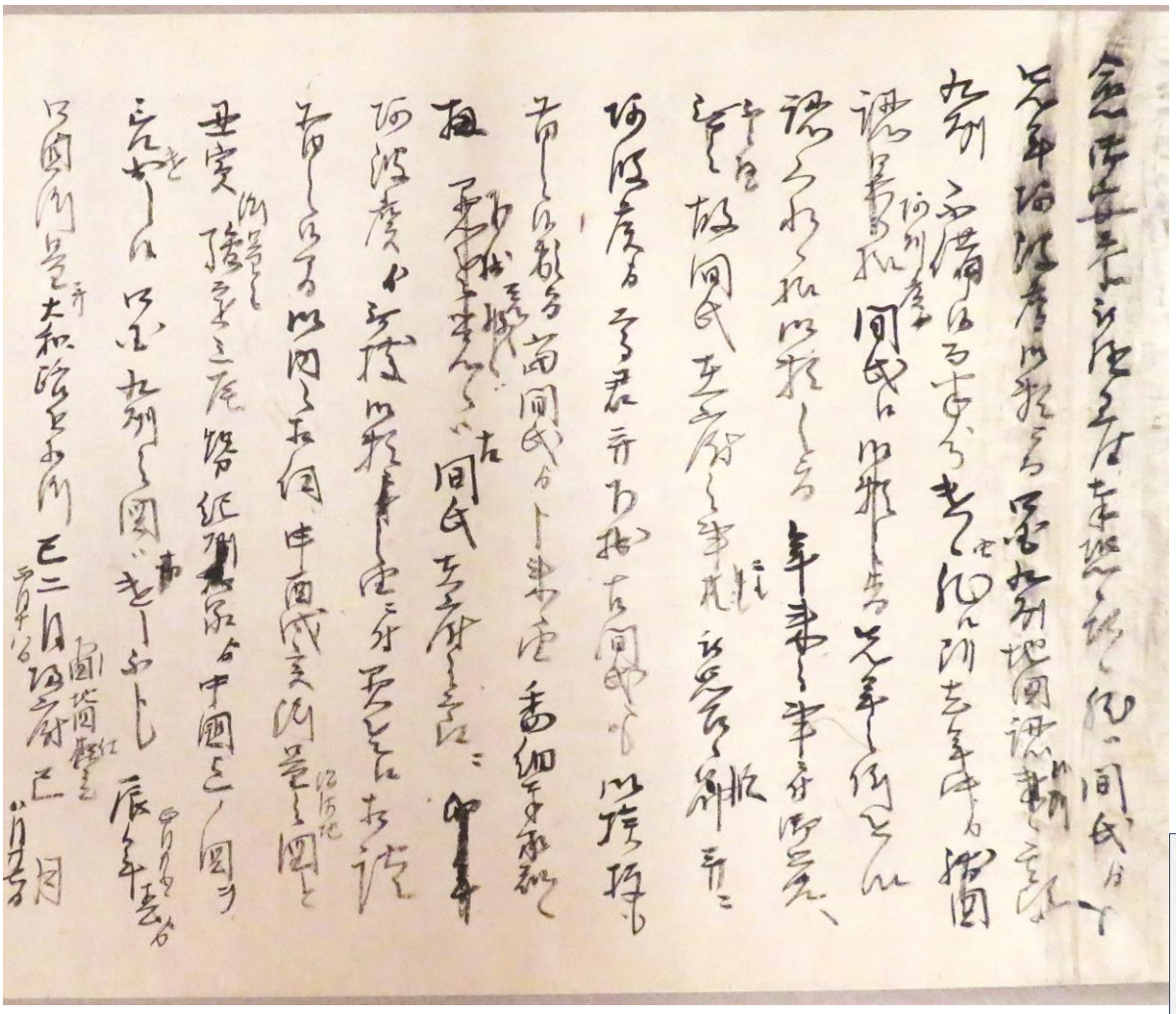
・「大日本沿海図稿」

「大日本沿海図稿　五畿東海　壱」
…　第四・五・六次測量の東海・近畿
「大日本沿海図稿　山陽山陰　弐」
…　第五次測量の中国・第七次測量の九州北端
「大日本沿海図稿　南海　参」
…　第六次測量の四国
「大日本沿海図稿　西海　肆」
…　第七次測量の九州東南部

この四舗は統一的な様式で描かれ、各図舗を接合するためのコンパスローズや切り込み、折り目があり、日本西半部を総合した沿海地図とでもいうべきものであると評価している。

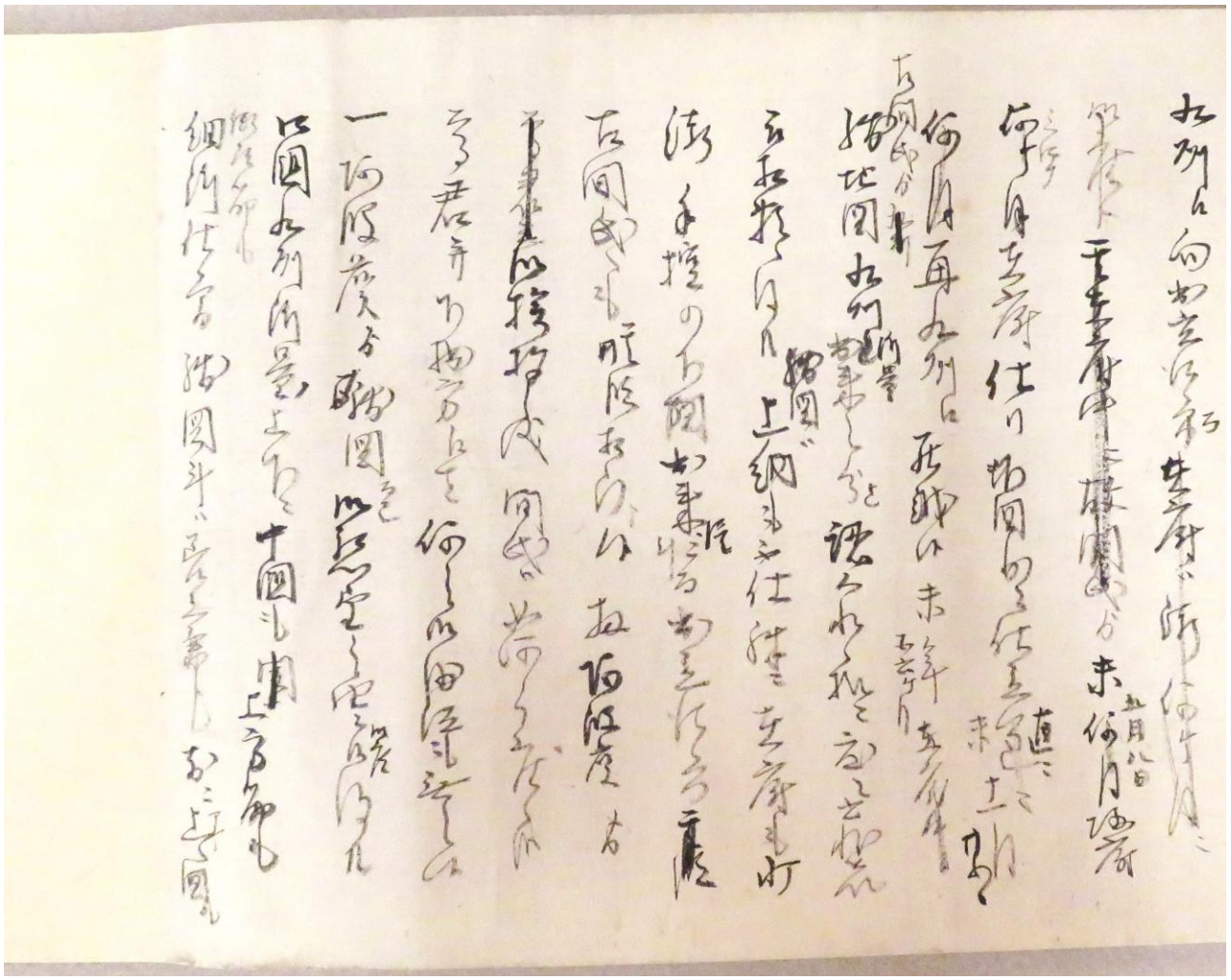
また「沿海中図　上」と「大日本沿海図稿　東海五畿　壱」の間でも、接合するための切り込みや朱書きの合印があるとのことである。これにより「沿海地図」と「大日本沿海図稿」を一つの統合図とすることができ、不完全ではあるものの日本列島の海岸線の形状を把握することが可能になるという。

図1　高橋景保宛て伊能忠敬書状（国宝：書状類一六四）
香取市立伊能忠敬記念館所蔵、無断流用禁止



※　旧字や異体字は適宜常用漢字に改め、読点をつけた。ゟや助詞の而・江・得・者・而已、古文書特有の表現などにふりがなを付けた。読解不能な文字は□で、補注は（　）で示した。

愈（いよいよ）御安泰被遊御座奉恐喜候、然ハ間（重富）氏ゟ（より）
先年阿波侯御頼二而（て）、四国九州地図認遣候（候所）、其頃ハ
九州不備候而（て）、半分遣候（由）、然ル所、去年中ゟ（より）残図
認来候様（阿州侯ゟ（より））間氏江（え）御頼之旨、先年之例を以
認くれ候様御頼之旨、年来之事二付御覚へ
無之（不被遊）故、間氏在府之事共（ともに）被思召候筋（段）、並二
阿波侯ゟ（より）尊君（高橋景保）並下拙（忠敬）右間氏へも御挨拶も
有之候旨（之旨）、当間氏ゟ申来候由、委細奉承知候、
扨（さて）愚老（下拙存候（覚候））覚候ハ、右間氏在府之節二卯年
阿波侯ゟ（より）無拠御頼十併之由二付、愚老江（え）相談
有之候間、御内々相伺、申酉戌亥測量之（沿海地）図と
丑寅　測量之　駿遠三尾勢紀州和泉ゟ（より）中国迄ノ図ヲ
差出（遣）し候、四国九州之図ハ遣（中）し不申候、正月廿五日辰年春ゟ（より）
四国測量（並）大和路を相測、巳二月帰府（下図地図□（仕）立候）巳月（八月廿七日）
（正月十八日）



九州江向出立仕候間、在府小漸何ヶ月十
御座候、其在府中上故、間氏方未何月帰府
何ヶ月在府仕候、下図少々仕立置候
何用再九州江罷越候、未年在府中
右間氏方九州
残地図九州出来之分迄認くれ候様二、度々書状を以
被相頼候得共、残図ハ上納も不仕、殊二在府も少、
漸手控の下図出来候二而出立仕候間、其侭
右間氏へも其段相断候、扨阿波侯方
尊君江御挨拶之儀、間氏ハ如何二御座候哉、
尊君並下拙方江者、何之御沙汰も無之候、
一、阿波侯方残図御懇望之由二候得共、
四国九州測量ノ上下二、中国も閑上方筋も
細測仕候間、残図斗ハ差上兼申候、前二上候図も

〔以下欠損〕

書状の大意と解説（景保からの書状の概要）

冒頭の挨拶文に続き、高橋景保からの書状の内容が要約されている。最初は間重富から高橋景保に対する依頼内容である。

間氏から先年阿波侯（徳島藩蜂須賀家）からの依頼で四国と九州の地図を作製したが、その頃は九州不備で半分を渡したとのことで、去年中より残りの地図を蜂須賀家から間氏に対し、先年と同様に作製依頼があったことが伝えられた。ただ高橋景保自身は以前のことであり蜂須賀家への地図提供を覚えておらず、「間氏在府」中のことかとも思っているとしている。

「間氏在府」とは、高橋至時の死去に伴い、二十歳で天文方に就任した高橋景保を教育・補佐するために、間重富が大阪から江戸に出て天文方御用を務めるように命じられたことによる。出府期間は文化元年（一八〇四）十月から文化六年（一八〇九）四月まで足掛け六年に及んだ。

この間の間重富の功績について嘉数次人（二〇一六）は、実質的に天文方高橋家の運営を任され、天文方の本務である暦作御用に加えて地図御用を監督しただけではなく、さらに新訂万国全図に結実する世界地図編集業務や、後の蛮書和解御用のもととなる外国文書の翻訳業務を加えたことを指摘している。大名家との交渉窓口も実質的に間重富が担っていたのであろう。このようのことから高橋景保自身は、覚へこれ無し、故に間氏在府のことと思うとしたのであろう。

最後に間重富からは蜂須賀家から高橋景保や伊能忠敬、間重富へ挨拶があったことも伝えている。

以上の高橋景保からの書状の内容について、忠敬は「委細承知」したとして、以下蜂須賀家への地図提供の経緯を回答している。

書状の大意と解説（地図提供の経緯１）

伊能忠敬の記憶によれば、間重富の在府中に阿波侯からの拠ん所の無い御頼みがあったということで、忠敬にも相談があった。「御内々相伺」の結果、「申酉戌亥測量之沿海地図」と「丑寅測量之駿遠三尾勢紀泉ゟ中国迄ノ図」を差し遣わした。ただしこの時点では「四国九州之図」は遣わしていないと記す。

間重富に阿波侯からの依頼があった時期について「卯年」と記しそれを消している。文化四丁卯年であれば間重富の在府期間にあたり、忠敬も第五次測量と第六次測量の間で周年江戸におり符合する。

「御内々相伺」とは間重富が若年寄の堀田正敦の意向を伺い、その内諾を受けて大名家に伊能図を提供したということではないだろうか。文化六年六月二十七日付けで間重富が足立信頭（左内）に送った書状（『天文暦学諸家書簡集』一五三頁）によれば、間重富は堀田正敦に内々で具申することが許され、その内命をうけていたことが記されている。

・「申酉戌亥測量之沿海地図」

「申測量」は寛政十二申年（一八〇〇）の第一次測量で、奥州街道・蝦夷地東岸を測量した。「酉測量」は寛政十三酉年の第二次測量で、関東と東北の東岸を測量した。「戌測量」は享和二戌年（一八〇二）の第三次測量で東北の日本海岸を測量した。「亥測量」は享和三亥年の第四次測量で、中部を測量した。「申酉戌亥測量之沿海地図」は以上の四度の測量を総合した日本の東半分の沿海地図ということになる。この中図に該当するのが徳島大学附属図書館所蔵の「沿海中図」の上（図４）、中（図３）、下（図２）の三舗である。

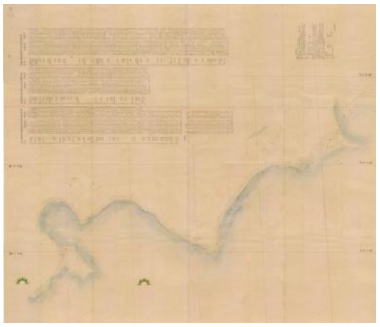


図２「沿海地図 下」

図３「沿海地図 中」

図４「沿海地図 上」

図２、図３、図４、図５、図６、図７、図８、図９の画像は徳島大学附属図書館所蔵、提供である

・「丑寅測量之駿遠三尾勢紀泉ゟ中国迄ノ図」

「丑寅測量」は文化二丑年（一八〇五）二月から文化三寅年十一月までの第五次測量で、駿河・遠江・三河・尾張の東海道、伊勢・紀州・和泉の海岸線、琵琶湖の湖岸、中国地方の海岸線を測量した。徳島大学附属図書館所蔵の中図「大日本沿海図稿　東海五畿　壱」と「大日本沿海図稿　山陽山陰　弐」が該当する。

書状では「四国九州之図」は渡していないと明記しているが、酒井一輔（二〇二二）は両図にはそれぞれ第六次（四国）測量の成果や第七次（九州第一次）測量の成果が描かれていると指摘する。図5のように、「大日本沿海図稿　東海五畿　壱」の場合は、第六次（四国）測量の帰路における大阪から大和路測量を行って伊勢へと抜ける測線が描かれている。同様に第四次測量の成果である遠江・三河・尾張の海岸線も描かれている。このように書状では「丑寅測量」と表現しているが、地図では第五次の「丑寅測量」に第四次測量と第六次測量の成果の一部が加味されており、第六次測量が終了した文化六年一月十八日以降に作製したことになる。

同様に図6の「大日本沿海図稿　山陽山陰　弐」の場合は、図7のように北九州側の門司などの企救半島が描かれているので、第五次の「丑寅測量」に加えて第七次（九州第一次）測量の成果が描かれている。作製時期は第七次測量が終了した文化八年（一八一一）五月九日以降となる。但しこの中図では同じ第七次測量の帰路に測量した西国街道を始めとする中国地方の内陸部の測量成果は反映されておらず内陸部は空白である。

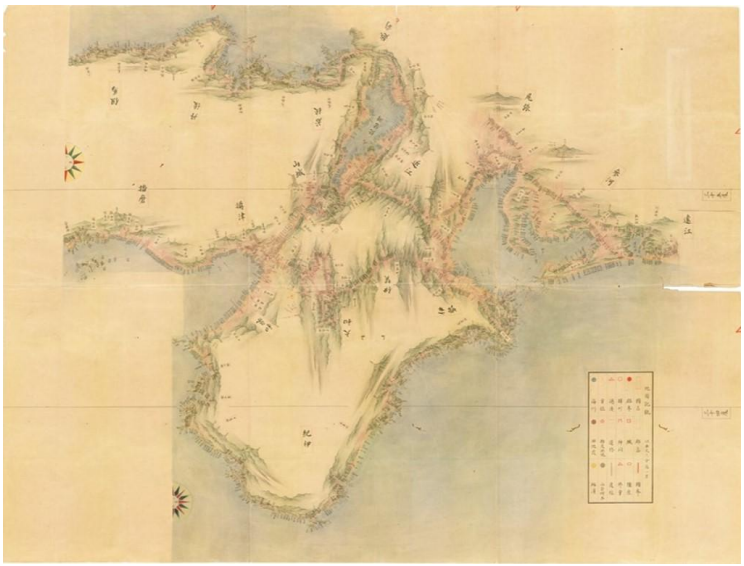


図５「大日本沿海図稿　東海五畿　壱」

図６「大日本沿海図稿　山陽山陰　弐」

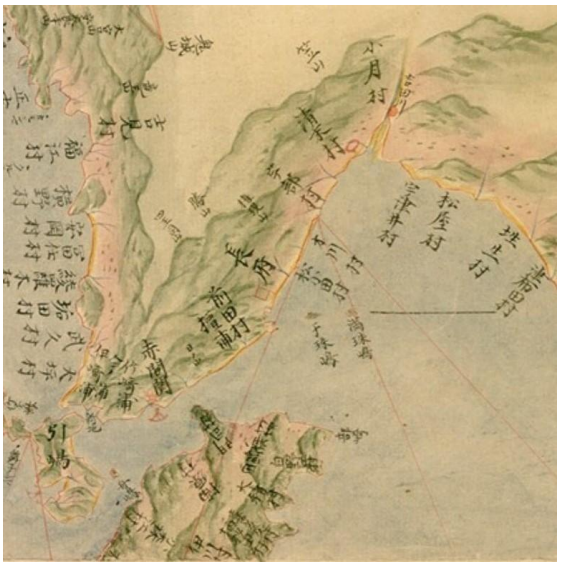


図７「大日本沿海図稿　山陽山陰　弐」関門海峡

書状の大意と解説（地図提供の経緯２）

「辰年正月廿五日春ゟ四国測量」以降十行にわたって大谷亮吉が省略した部分となる。この部分では「残地図九州測量出来候分」「残図」の作製依頼を断る理由が記されている。先ず第六次測量以降の慌ただしい日程を述べている。

文化五辰年（一八〇八）の一月二十五日から四国と大和路を測量（第六次測量）し、文化六巳年一月十八日に江戸に戻り下図と地図を仕立てた。

なお、江戸日記の文化六年七月二十四日の記事に「浅草御役所へ一同地図持参」、翌二十五日に「此日地図を上る。下役人中総て行く」とあり、第六次測量の地図を幕府に提出している。

図８「大日本沿海図稿 南海 参」

文化六巳年（一八〇九）八月二十七日には九州に出発したが、文化八未年（一八一一）五月八日にいったん帰府し、何ヶ月か在府して下図を少々仕立てて、直ちに同年十一月二十五日に再度九州へと出立した。第八次測量である。

後段では「残地図九州測量出来候分」「残図」の作製を断った理由を次のように説明している。文化八未年の五六ヶ月の在府中に、間氏から残る地図の九州測量が出来た分まで作製するように、度々書状で頼まれたが、残図は上納もしておらず、ことに在府期間も少なくてようやく手控えの下図が出来たばかりの段階で九州再測量に出立した。間氏へも残図の作製を断ったと記す。断る理由として時間がないということとともに、幕府に上納していないことが上げられており、興味深い。大名家への伊能図の提供は幕府への上納が済んでからということであろう。

ここまでが大谷亮吉によって「中略」とされた部分であるが、この後段には意味がとりにくい箇所がある。

・「上納不仕」か「地図上納」か

文化八未年の五六ヶ月の在府期間では、上納もしておらず、ようやく手控の下図が出来ただけであると記されている。ところが、江戸日記の文化八年十一月十五日の記事に「高橋より地図上納」とあり矛盾をきたしている。もっとも地図上納の十日後の二十五日には第八次（九州第二次）測量に出立しているので、どちらにせよ大名家のために作製する余裕がないことは確かである。

・二つの「残図」

この書状には二つの「残図」が記載されており、話をややこしくしている。

一つは大谷亮吉が省略したこの部分の、第七次測量後の文化八年の在府期間中に間重富から度々書状で制作を依頼されながら、それを断ったという「残地図九州測量出来候分」「残図」である。これは「申酉戌亥測量之沿海地図」と「丑寅測量之駿遠三尾勢紀泉ゟ中国迄ノ図」を渡した段階では渡していないと記された「四国九州之図」のことではないだろうか。日本全体の地図の中で東日本、近畿、中国地方の地図までを入手した徳島藩蜂須賀家にとって、残っているのは「四国九州之図」となる。それを文化八年の短期間の在府期間に頼んで断られたということになる。従って四国九州之図が作製・提供された「先年」とは第八次測量から戻った文化十一年（一八一四）五月二十三日以降となるであろう。

もう一つの「残図」が書状の冒頭に記されている。先年阿波侯の御頼みにて四国九州の地図を作製したが、その頃は九州不備で半分遣わしたところ、去年中よりその「残図」の作製を頼まれたというものである。九州不備で半分遣わしたという地図が図９の「大日本沿海図稿 西海 肆」であろう。従ってこの場合の「残図」とは図９で欠けている九州北西部や屋久島・種子島などの第八次（九州第二次）測量の成果部分ということになろう。

図９「大日本沿海図稿 西海 肆」

書状の大意と解説（御挨拶のあり方）

続いて地図提供の具体的な経緯から離れた微妙な内容が挟まれている。

最初の高橋景保宛て間重富書状の内容を伝えられた部分では、間重富から徳島藩蜂須賀家からの九州の残りの地図の作製依頼とともに高橋景保や伊能忠敬、間重富へ挨拶があったと伝えられたと

記され、忠敬も委細承知としていた。ところがここでは、蜂須賀家からの挨拶について、「間氏ハ如何ニ御座候哉」、どういうことなのかと疑義を示した上で、高橋景保と忠敬へは何のご沙汰も無いとする。

間重富が天文方高橋家の実質的責任者であった時期において各大名家との窓口であったことはやむを得ないことであったが、文化六年四月以降は高橋景保が名実ともに天文方である。それにもかかわらず、大阪に戻った間重富が相変わらず徳島藩との窓口として依頼してきたことに対し、筋違いと感じたのではないだろうか。尊君並びに下拙方へは何の御沙汰もこれ無く候と記したのは、徳島藩から直接高橋景保に挨拶があってしかるべきであるということであろう。

なお、平井松午（二〇二二）によると、忠敬に「何之御沙汰も無之」かったのは、蔵書家としても知られる第十一代藩主蜂須賀治昭が文化十一年（一八一四）に逝去したことも影響しているのかもしれないとのことである。

書状の大意と解説（残図を提供できない理由）

書状の残存部分の最後に、一つ書きで、第八次測量で測量した九州の残りの地域の地図を提供できない理由が述べられている。

徳島藩蜂須賀家は残図のみ御懇望ということであるが、四国九州測量の行き帰りに中国地方も上方筋も街道筋も詳細に測量したので、残図だけを差し上げることは出来ない。前に差し上げた地図も、と記したところで書状は欠損している。

酒井一輔（二〇二二）は第八次測量が終了した段階で作製すべき地図の性格が大きく変化したと指摘する。これまでの海岸線を中心に描かれた「沿海地図」に、内陸部分を描く「輿地図」の要素が加わった「沿海輿地図」ともいうべき新たな総合図に編集し直すことが必要になっていた。それまでに測量済みであった中国、近畿、中部、関東各地方でも、第七次、第八次測量の往復時にその内陸部の街道を詳細に測量しており、これまでの海岸線部分の地図や測量データに、新たに得られた街道部分の測量データを接合させて再編集し、全く新しい定稿図を作る必要が生じていたとする。

「大日本沿海輿地全図」が幕府に上呈されるのは伊能忠敬の没後の文政四（一八二一）年のことである。もし、どのような形であれ、九州の残図を提供すると、徳島藩蜂須賀家は幕府に先駆けて日本全図を入手することになる。徳島大学附属図書館に九州の残図に相当する地図が無いのはそのようなことも背景にあるのではないか。

書状類一六四と徳島大中図の矛盾点

平井松午（２０２２）はこの書状の記載内容と徳島大中図の間の矛盾点を指摘している。一つは書状では「丑寅測量之駿遠三尾勢紀泉ゟ中国迄ノ図」を渡した時期を文化六年四月までの「間氏在府之節」と明記しているが、酒井一輔（二〇二二）が指摘するように「大日本沿海図稿　山陽山陰　弐」には文化八年五月に終了した第七次測量成果の北九州の企救半島が描かれている点である。

また平井松午（２０２２）は徳島大学中図の「大日本沿海図稿」の四舗「東海五畿　壱」「山陽山陰　弐」「南海　参」「西海　肆」は同じ地図仕立ての図葉でありセットで桐箱に収納され、各図舗を接合可能とする切り込み、折り目があることから四舗同時に作製したと考えられるとする。また渡辺一郎（一九九六）は九州第一次測量後のある時期にまとめて作製したと考えられるとする。しかしこの書状では「丑寅測量之駿遠三尾勢紀泉ゟ中国迄ノ図」は文化六年までの「間氏在府中」に遣わされたことが、また省略されていた部分に文化八年段階で「残地図九州測量出来候分」の作製依頼を断ったと明記されており文化十一年以降の作製となる。四舗の同時作製とは矛盾する。

以上のように、書状に記載された「丑寅測量之駿遠三尾勢紀泉ゟ中国迄ノ図」「四国九州之図」の情報と徳島大学附属図書館の「大日本沿海図稿」の間には未解決の問題が残されている。

参考文献

・大谷亮吉『伊能忠敬』（岩波書店、一九一七）
・渡辺一郎「伊能図総目録」『伊能図に学ぶ』（朝倉書店、一九九八）
・『平成26・27年度伊能図検証プロジェクト成果報告書』（徳島大学附属図書館、二〇一六）
・平井松午・島津美子編『〈稿本・大名家本〉伊能図研究図録』（創元社、二〇二二）
・酒井一輔「『沿海地図』から『沿海輿地全図』へ」（『伊能忠敬の地図作製』（古今書院、二〇二二）
・嘉数次人『天文学者たちの江戸時代』（筑摩書房、二〇一六）
・渡辺敏夫『間重富とその一家』（山口書店、一九四三）
・上原久『高橋景保の研究』（講談社、一九七七）
・上原久ほか『天文暦学諸家書簡集』（講談社、一九八一）
・渡辺一郎「最近における伊能日本図の所在と概況について」「地図」三四-二（一九九六）

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第三十八回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修　渡辺一郎　　編著　井上辰男

【第九次測量】（伊豆七島）富士山裾野（熱海～三島～富士宮～三島～御殿場～箱根）　自　文化13年1月1日　至　文化13年3月2日

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
文化13年1月	（1816）					
1	（1・29）	熱海村	静岡県熱海市	本陣渡辺彦左衛門	熱海村滞留。一同越年の祝儀を述る。	一〇一
2	（30）	同	同	同	同所滞留。	一〇一
3	（31）	同	同	同	同所滞留。今日より地図御用始め。	一〇一
4	（2・1）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
5	（2）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
6	（3）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
7	（4）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
8	（5）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
9	（6）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
10	（7）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
11	（8）	熱海村	同 熱海市	本陣渡辺彦左衛門	同所滞留。地図御用調。	一〇一
12	（9）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
13	（10）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
14	（11）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
15	（12）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
16	（13）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
17	（14）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
18	（15）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
19	（16）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
20	（17）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
21	（18）	熱海村	同 熱海市	本陣渡辺彦左衛門	同所滞留。地図御用調。	一〇一
22	（19）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
23	（20）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
24	（21）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
25	（22）	同	同	同	同所滞留。地図御用調。	一〇一
26-1	昼休	軽井沢村	同　函南町	名主五左衛門	熱海村出立。無測にて山越一里半許行。豆州田方郡軽井沢村地内字ゾウシ場、去冬残置ソ印より初め、三島街道測量。是より下坂都て草野山広し。此辺より羅宇竹出る。字轆轤（ろくろ）坂、右駒形権現・観音合殿社の中、平石に駒形彫付あり、時代不知、人々摺行という。字鶴牧山、当村内字矢下洞に鸚鵡石というあり、不見。右天王小社、本村人家中昼休。	一〇一

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
26-2	（23）	平井村	同　函南町	百姓半蔵 百姓七左衛門	樫木川（細流）板橋、左丹那村道追分、字鬼窪（都て草野山）、字茶湯（トウ）坂、平井村、字硯石家なし、字鬢ノ沢、左観音堂あり、字五本松（観音あり）、左谷合当村枝柿沢、字赤坂、左塚原道追分、左右本村人家中に至て止宿測所前街道打止め平印を残終る。	一〇一
27	昼休	大場村	同　三島市	名主清蔵	田方郡平井村測処前、平印より始め、三島街道測量。右上沢村道追分、右鎮守天地天明神森あり。字濱井湯人家続、此辺広地一円田地、左樫屋道追分、鎮守右側金山童子大権現社、左側雷電大権現社。字北条辻、左側大土肥村、左韮山道追分、左右大土肥村、肥田川仮橋、右側仁田村、左に仁田村内庄屋大八庭内旧跡、仁田四郎忠常墳墓あり。此庄屋仁田四郎末葉という。八ッ溝川（用水石橋）、左右仁田村、右山根済家開白院というあり、左側間宮村、右側大場村（但大場村計君沢郡となる）。右十王堂、右小道制札、君沢郡左右大場村人家町並追分三辻石碑（従是左熱海道、右下田道）に繋、三島街道測量終る。同所昼休。	一〇一
	（24）	三島宿	同　三島市	本陣勢子（世古）六太夫	それより無測三島宿へ旧測の道筋を行、三島宿着。恒星測定	一〇一
28-1	昼休	伊豆島田	同　裾野市	百姓伊左衛門	三島宿字傳馬町制札向て右角より始め、東街道上方筋へ向て重測。右三島大明神構、右小横町、久保町四辻左竹林寺小路、真直東街道筋、新古測処勢子六太夫宅迄町並。従是新測、甲州街道へ向て御殿場村迄の道筋測量。桜川石橋、中央界、左側計裏町通り字払イ戸、左右裏町通り字払イ戸、右引込三島境内払イ堂あり。左横町裏町本通り、真直（右桜川添、左片側町）字払イ戸之内、又桜川石橋、界字新屋となる右三島境内添、左片側町並。但此往還筋三島神領持、人家は三島宿に属。神領宮の後、右宮外構木生添、左町並、右引込修験大徳院持国分寺あり（同所薬師如来安置す）、往還社家町と成。右横町社家町続、惣号字宮ノ後という。右横町社家町続、引込神主矢田部長門屋敷、従是左側計宮ノ後限り。右側宮ノ後社家町横手に添、右三島社の限り一円田地広し。	一〇一

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
28-2	昼休	伊豆島田	同　裾野市	百姓伊左衛門	左引込二ノ宮あり。左社僧愛染院構木森あり。此門前人家七八軒、字愛染院門前という。左畑中式内広瀬神社、此社廻り溜池あり。自然涌水にて是を千貫樋にて伊豆駿河へ、用水へ引、水上なり。左畑中田地中より水元桜川水上也。又三島宿地所、右田中に三島の摂社牛頭天王社あり。右沢地村道追分此村箱根山神領なり。右側許幸原村、右畑中に大場川流（此辺の通名寒川という）。是より右神領一町田村字向山、右寒川向に一町田村、右谷合箱根神領沢地村、左畑中旧跡金掛ヶ松、右幸原道追分、左畑中、駿州駿東郡下土狩村（家数百三十軒）、四辻（右戸沢、左中土狩）村道追分、左右一円幸原村、左耳石大明神社（耳石というあり）、寒川（又界川）仮橋、戸蔵郷戸蔵村、右引込古城跡、右鎮守八乙女大明神社、伊豆佐野村、字荻ヶ久保、右八幡宮、寒川（仮橋）、川上三国峠より流出す。国界迄三十四町十二間。駿河国駿東郡伊豆島田、用水川（仮橋）、右一町計に寒川と分水に成る。同村昼休。	一〇一
	（25）	佐野村字下宿	同　裾野市	名主常蔵 名主政右衛門	左側平松新田、右麦塚村、平松新田、左沼津道追分、字中曽根、左天家新田、字座頭塚、右畑中古墳十三あり。（旧跡字十三塚という）。右地蔵堂、座頭塚という。左五六町は過て測量筋略。右引込八幡の森、小栖沢川石橋。川中央佐野村、左字二本松新田、左沼津道追分石碑に繋ぐ。是は追て根方通り測量の繋印となる。従国界是迄十四町十四間二尺。左山手公文名村、稲荷村、左木瀬川向山根禅宗乗輪寺（此門前に人家あり。字桃園乗輪寺村という）、字下原人家、三辻追分（須山へ行道）石碑ありス印を残す。字下宿人家入口、右制札、佐野村人家百十軒という。右浄土宗法雲寺というあり。即止宿測所前に打止めサ印に終る。恒星測定	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
29	昼休	金沢村	同　裾野市	名主源七	佐野村地内三辻フジ道、右須走、左須山道追分ス印より始め、須山道測量。字西原、大栖沢川、石脇村、左引込大畑村、字繋橋、木瀬川仮橋、此橋を世に繋橋と唱。千福村、字四ッ溝、左引込八ッ川、左右字八ッの人家、左引込曹洞宗小田原早川海蔵寺末太平山普明寺、御宿村字平山、左引込荘園寺後口窪川流、左秋葉灯篭、字舞台、字歌窪、四辻右作道、左駒門村追分、右引込当村内櫃（カロウト）新田、右字金谷、左字土橋人家、清水川細流、左引込葛山村内、浄土宗京智音院末日当山仙念寺。此辺左冨士山より愛鷹山裾通り、右箱根山後通の広地なり。右側計上田村、右引込土手山根上田（ゼウデン）村、左右一円御宿村、葛山村、右冨士浅間社、字宮原、字中里、小流、字濱井場、右側計金沢村、同村内昼休	一〇〇
29	（26）	下和田村	同　裾野市	名主次郎右衛門 百姓次兵衛	左葛山村道、左右金沢村、右引込居村、用心残榎の大樹に繋。又左葛山道、左引込字王津沢、今里村字新田、右須山道追分用心残杉の大木に繋。下和田村字馬白坂、右須山道追分用心残石碑に繋ぐ。字女坂、同村内字神谷打止め神印を残し終る。	一〇〇
30-1	（昼休共27）	深山村	同　裾野市	浅間宮御師名主兼帯 渡辺市太夫	下和田村内字神谷、神印より始め、須山街道測量。本村人家字丸山、宮川（水なし。此辺にて宮河原という）、右制札（左村道引込昨夜の止宿人家散在）、左浄土宗千修院、左に鎮守浅間の社、山河原（川上愛鷹山谷と字大沢入という所より流出る。総村にて荒川という）、右駒門道追分、字棚ノ坂、小坂道、深山村（旧名須山村という故、当時他にては通名也。五十年前書誤るという。領主へは深山と書）、左引込下和田村枝大故山人家、左本村道追分、左壱町許愛鷹山裾、深山村字他向人家四十軒散在す。字供養塚、字ツトヒ、字原、三辻追分、字寺之前に寺印残す。従是浅間宮打上。右浄土宗天獄寺、左観音堂、字新井、字津土井、字寺坂、字窪、字馬場、本ノ沢（水なし）。境内鳥居建。左右杉並広前、石段を上る。浅間宮本社前に至て打捨終る。冨士浅間宮前ノ宮、祭神木花咲哉姫尊。又寺の前に戻り三辻の寺印より始め、本村の方へ向て行。字淵、本村人家左右御師の家構町並、浅間宮御師名主兼帯渡辺市太夫宅止宿測所前、同所昼休後仕越。	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
30-2	（昼休共27）	深山村	同　裾野市	浅間宮御師名主兼帯渡辺市太夫	左追分、当村枝十里木へ行道なり。同村内浅間社神主渡江対馬正外御師十二人。行先冨士山登道字南口、又字淵の人家（本村人家、〆百十一軒）、本ノ沢（無水）、又字窪の人家、左窪へ行道追分三辻（右印野通御殿場道筋）、浅間宮一ノ鳥居、字印野坂、鹿坂田地限り。是より冨士山裾野草生廣地となる。字坂向イ戸ノ平（左右大廣地限りなし都て一円冨士の裾野）諸山遠測。印野村字十文字という四辻に至る。左十里木筋大宮道、右印野通北久原道追分に至り、冨士山登口南口須山道限り街道打止め十印を建置終る。但是は追て北久原通りより大宮道へ測量の節、此所に来て十文字に繋ぐ為なり。真直は冨士山登口門迄十二間許絶頂迄行程是より一里行字馬返という。それより一里行即一合目に至り連綿十合目に至る。但一合目迄は木生にて、それよりは砂山也。山明け六月より七月二十六日頃まで五合目程に出茶屋ありて旅人泊す。又当村より強力を頼み登るという。絶頂御鉢廻り一里。それより元の道を戻り本村内止宿。	一〇〇

文化13年2月						
1	（2．28）	佐野村	静岡県裾野市	名主常蔵 名主政右衛門	無測量。深山村、下和田村、今里村、今沢村、葛山村、御宿村、千福村、石脇村、佐野村へ着。	一〇〇
2-1	昼休	神山村	同　御殿場市	名主十蔵	佐野村出立。佐野村地内（従伊豆島田一円、此已下御厩の庄という）去月二十八日残字中宿測所前サ印より始、甲州街道御殿場村へ向て測量。左右本村人家並馬次場、左時宗蓮光寺、引込深良村字震（ユル）木橋、右山根深良村内に禅宗桃園穴輪寺末霊亀山興善寺。右田地中本村内字町田、三間堀川、左大栖沢川分水、是を字佐野堰（せき）という、右田地中同村内に江戸芝増上寺末浄土宗大森山西安寺、右小根引込当村内字南堀、左大栖沢川添向石脇村、左用水川尻と大栖沢川落合、字サイカチ渡戸という。用水川、字遠藤、原人家軒並、右引込字和田の人家散在、左大栖沢川、木瀬川落合一筋となる。左木瀬川向は須山道測道に近し。右引込本村字切久保、左本瀬川向御宿村人家散在、右山根に字上原人家大散在、用水川、本村字新田、左用水川木瀬川落合、右字上丹、右山根に字原の人家（此家中古川流る）、	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
2-2	昼休	神山村	同　御殿場市	名主十蔵	新川（此所の名、三間堀川という。川上箱根湖水より流）。此川上、延宝元年、長さ七百五十間の間山中堀割と成る。即当村右山裾を流、この所に至る。此辺の字堀渡元という。左木瀬川に落合。岩波村（田地中より土手山後掛て新川、左右に深良村字須釜人家散在）、左木瀬川向三宿村字カロウト新田、左土手山根大久庵、左右岩波本村人家入口、（此辺より已前の測道と隔）、左木瀬川向神山村の人家散在、神山村（馬次場）字尾尻（人家）、左東川添此川下の方に木瀬川と落合、左愛宕山の森、右引込禅宗長泉院、左赤羽根川添川下は直に東川に落合、赤羽根川、右赤羽根川上流に添、左に東川添、それより先田地向に木瀬川流、此辺の人家川中、或は左右に散在、右赤羽根川上は山間へ入る所より東川分水流れ出、左の方東川に落入）、東川添東川（板橋）、此川中に大岩続きあり。字七里岩という。即七里続きたるという。左右本村人家、昼休。	一〇〇
（29）	竈新田	同　御殿場市	名主平蔵 百姓星右衛門	左後東川向野村字新畑の人家散在。右山峯の頂通り駿相の国界也。大坂村、中山村字一本松、左側界中山村一円と成。右東川向二子村、本村人家左右に町並、用水川、東川落合、左木瀬川向に駒門新田、左木瀬川手前に中清水村。此村前窪川添、用水川、右東川前本村字矢下、左右人家町並の左後窪川添、左中清水村・駒門村道追分、左浄土宗西方寺、左引込鎮守諏訪大明神社、往還に一鳥居建、左木瀬川向（此辺の名、西川と唱）に芝努田新田、但此本村は寛水年中、冨士砂降の節人家破壊す故に本村絶てなしという、右東川向山根に二子村枝新田、右沼田村・萩蕪村道追分、竈新田（此辺も御厩庄という）、右東川向に沼田村人家散在、左西川向に神場村、右東川手前往還下に萩蕪村（但沼田萩蕪とも往還に不拘）、竈新田人家町並即測所に至て打止め竈印を建置終る。恒星測定	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
4	（2）	御殿場村	同　御殿場市	百姓伊右衛門 名主平右衛門	雨天滞留、恒星測定	一〇〇
3	（3．1）	御殿場村	同　御殿場市	百姓伊右衛門 名主平右衛門	駿河国駿東郡竈新田人家中測所前竈印より始、甲州街道御殿場村へ向て測量。左引込枝郷上新田、左諏訪山玄清寺、マムシ沢、萩原村、左引込新橋村枝野中、左引込杉菜沢村、左側許川島田村、右側許川島田村一円と成る。右側許萩原村、三辻追分、真直は須走郡内道、正面の石地蔵に繋ぎ置。左引込川島田村、右側界川島田村一円となる、小流、字森ノ腰、新橋川土橋、新橋村、界川土橋、萩原村、右引込東田中村、前川（土橋）、当村枝茱萸沢入、左引込茱萸村、二枚橋村、二股川（土橋）、左浄土宗正定寺、左引込西田中村字八幡、左側西田中村・右側御殿場村（片側持、町並）。甲州街道に出る。即旧測文化八未年の残人家左角追分石碑（右須走、左三島）道繋、三島駅より御殿場村迄の街道筋連綿終る。但是より追分左の方十里木街道測量の残印ともなる。 従是本街道嶽の下通りへ向て人家中重測。両側（左字西田中村枝ビショメキ、右字御殿場村字上宿）家続、左側許御殿場村一円となる。馬次場、左引込禅宗庚申寺（此寺内天竺定朝の作、庚申あり）、右引込二枚橋村枝登り畑、同村小界中宿、右引込御蔵跡あり。左制札、左引込横町、神君御蔵跡あり。左右町並、左測所、従追分是迄重測。従是仕越、矢張重測。左浄土宗光明院、三辻追分（左嶽ノ下、右深沢）道に至て重測の限。従是右へ曲り嶽ノ下道を千石原通り伊藤越測量。左宮川、向片側町並、右一向宗真鏡寺構人家限、右引込西田中村飛地字北原、字土手ヶ丸、深沢村、左神明ノ森、右引込禅宗宝持院、左禅宗大雲院、字西、左是より引込同所に当村枝宮沢に古城跡（武田信玄抱城。但嶽ノ下街道に近し）、字マヽ、左引込字根岸、字窪、字篠場、三椒渡戸川土橋、字堂之前、右地蔵堂、字繁小田人家限、同村内に小印を建置打止終る。それより御殿場村へ戻る。	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
5	昼休	中畑村	同　御殿場市	清兵衛	御殿場村出立。御厨郷西田中村枝ヒショメキ家角、文化未年十二月四日、旧測残追分（右須走、左三島）道石碑より始、三島街道の方十里木街道重測。左右横町人家、左側許北久（ホック）原村、左右北久原村、右側許西田中村、右引込八幡宮、左引込西田中村本村、又左右北久原村、左西田中村字カヤノ木、宮沢川、左引込二枚橋枝カヤノ木、三辻（右御殿場中町追分）、左浅間ノ社、右引込山ノ尾村、仁杉（ヒトスギ）村、追分（右須走、左十里木）道石碑繋重測之限り。従是十里木街道新測。字板取畑、字佐喜、宮沢川、前川土橋、四辻（右須走道、左川島田通三島道）追分、中畑村、字八王子、四辻追分（左右村道）、同村昼休、	一〇〇
	（3）	印野村	同　御殿場市	名主八郎左衛門	右小道追分、此辺左は冨士野裾、字南原、永塚村、右に中畑村枝飯田新田、右側に川柳新田、右村道追分、右側に中畑村枝萩原新田、左永塚村字笹塚、左右印野村、印野村枝萩原、左右小道追分、左引込字塚、左保土沢村道追分、従是左道上保土沢村（但往還に不拘）、左引込保土沢新田、時之尾川（木瀬川上流也）、枝鷹（トキ）ノ巣（旧名鳥ノ巣という。）、左引込板妻村、右鷹ノ巣の字堀金、綱沢（水なし）、左右印野本村入口散在、右測所前に至イ印を建打止終る。	一〇〇
6	（4）	十里木新田	同　裾野市	組頭勝左衛門 百姓嘉左衛門	印野村出立。御厨郷印野村本村測所イ印より初め、十里木街道測量。右北畑道追分、此辺広野にて鶉（うずら）を取て江戸へ出す、右野末枝郷北畑、本村共家数百九軒、字十文字追分（正月晦日残）十印に繋（右冨士南口門、左先測深山道）。真直十里木街道を測。右に出茶屋一軒、夏の頃麓より出る。右冨士山裾野、左愛鷹山裾、愛鷹山本名、越前ヶ嶽（同本高）、塩水ヶ岳（郡界山也）、宇土沢水無（末にて水ノ沢という）、中央界、小田深山村枝十里木新田、同所野昼休、左深山村内字窪へ出る道追分あり、字三俵坂、此辺より左右雑木となる、左片スツコウ山の中腹愛鷹明神の小社是より三町許、字御本地、字二ツ坂凹道、左右十里木新田人家中測所前に木印を建置打止め終る。此村冨士愛鷹の間に狭り実に孤村の茅屋也。	一〇〇

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
7	(5)	今宮村	同　富士市	名主勇蔵 年寄茂右衛門	十里木新田出立。深山村枝十里木新田測所前木印より始め、東街道吉原宿へ向て冨士・愛鷹山間を測量。下り坂一面枯野、、冨士郡五社浅間別当東泉院領今宮村郡界。但此辺冨士野といて当村分中にあらず、冨士山廻り十九ヶ村の持なり。右大淵通り大宮道追分、字板小屋広野原、字初坂、野昼休、此辺より甲信の山々、豆州の浦々見ゆる、字丸ムネ、是より今宮村本地内となる、右吉原道という石碑繋ぐ。字志可良志坂、是より雑木生となる、左十里木道という碑繋、左引込山根幸崎村（同所追分あり）、字天神ノ原、本村人家入口、字サイノ神、浅間道追分に至サ印を残街道打止め終る。是より五社浅間宮打上。左右人家数在中を行、山沢、右制札、庚申堂、境内入口左右並木、左大宮道追分近道なり、浅間境内、石段、拝殿に至て終る。五社浅間の一社。当社を今宮浅間と称す。別当東泉院所務、浅間社五社は当所、入山治村の内、傳法の内三日市場村、東泉院境内日吉、原田村の都合五社。	一〇〇
8-1	(6)	吉原宿	同　富士市	脇本陣 近江（扇）屋伊兵衛	初午。今宮村出立。冨士郡今宮村字サイノ神三辻、浅間道追分サ印より始め、十里木通り吉原宿へ向て測量。左引込止宿（曇天不測）、本村人家散在、右浅間道追分、左引込山根に石井村、左追分根方道、神戸村、字下村、左村道小道追分、左山根に鵜無淵（ウナブチ）村、同所左に並て間門村、山沢、枝万樽、左引込三ッ沢村、一色村、左引込枝郷萩野原、今泉村、左引込土手山根に大淵村枝新田、右山根引込枝沼水、今泉村総家数四百二十八軒、右大淵道追分石碑繋置。右土手山後引込大淵村家数百軒、同所並て曽比奈村、左稲荷小社、字横道、四辻（右傳法村、左根方通大宮道）追分観音石碑に繋ぎヨ印を建置。是は根方通測量残印。真直吉原宿へ向て行。左引込右禅宗輪済如岳山福応寺。従追分通。従是左右本村人家町並中東泉院境内へ打込、境内右地蔵堂門前に至り終る。本堂迄三十間許。摂州醍醐山報恩院末古義真言宗冨士山東泉院弘法寺。但此内にて五社浅間宮神事祭礼修理料、及社人供僧社役料相勤。	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
8-2	（6）	吉原宿	同　富士市	脇本陣近江（扇）屋伊兵衛	境内本堂後の方引込（五社の内）日吉浅間社、境内三町四方。字和田、右引込日蓮宗勝劣本国寺、用水小流、左人家後古城跡、和田川用水仮橋（川上六社浅間御手洗より流る）、依田原（ヨダハラ）村（地先許）、左水車（吉原宿への引水）、右畑中引込今泉村字木綿島、吉原宿字裏町、左右町並、四辻、左右小横町、三辻（東街道に突当る）、本町（左本町通り江戸の方旧測筋見渡三町許）。従是本町通り上方の方へ向て重測。左右町並、従本町。元より三間左横町、星測所四ッ目屋平左衛門前象限儀跡に繋ぐ。此度の止宿脇本陣近江屋伊兵衛前測所、右制札、右一向宗唯称寺門。三辻、本道筋西横町、右小横町、傳馬町、真直に引込日蓮宗身延山久遠寺末妙祥寺、追分町、石橋、右横道氏神木元権現、左横道禅宗竜安寺あり、是より四十間許づつ引込。右引込浄土宗今井山大運寺、左許引込禅宗慈眼寺、左引込津田村、左右人家限、左引込京都智音院末前富山称念寺、右の方棒杭（従是吉原宿）に繋。同所追分大印を建置重測終る。但大宮道測量の残し印となる。	一〇一
9	（7）	同	同	同	雨天滞留	一〇一
10-1	昼休	厚原村	同　富士市	樋岙庄五郎	吉原宿出立。駿河国富士郡吉原宿字追分町内三辻追分棒杭大印より始、大宮道測量。真直は東街道筋、四間橋川四流、傳法村、左引込石橋村、左引込傳法村枝国久保、左引込下瓜島村、右引込傳法村枝宮ノ上、左引込日蓮宗本光寺。弥生村、弥生新田、香西村、香西新田、下瓜島持永田村、与田原新田、下瓜島村、上瓜島村、傳法村。従是一支浅間打上。左右馬場、鳥居を入、境内拝殿に終る。正面本社迄石段上玉垣十八間許。本堂六社浅間宮。別当東泉院。但此浅間廻り並木外、右の方溜池方四十間許、和田川の水上なり。往還に戻り左右人家、下瓜島村傳法村家並字前河原という、左引込上瓜島村、左引込傳法枝中村、右浅間馬場道、左畑村、左右猿弐、左右傳法本村（百三十三軒）、唐沢傳法橋、右側許厚原村、左引込原田村永明寺末曹洞宗富士山保寿寺、左傳法村枝字片宿、右厚原村字片宿人家続、左引込傳法村枝田端、左引込同枝中桁村、厚原村一円、右陣屋、右久沢村枝字川久保人家中に旧跡楠木（頼朝公御狩の節、此木を幕杭に打せたまうという）、昼休、樋岙庄五郎（此辺の荒地開発大樋を通したる功により三十石の場除地被成下）。	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
10-2	（　8）	大宮郷中宿町	同　富士宮市	百姓渋屋惣太郎 百姓油屋大助	左引込曹洞宗鷹岡山福泉寺。境内旧跡曽我兄弟五輪塔あり。左小溝向久沢村、右引込曽我八幡宮、字樋詰、左引込榎沢手前旧跡時宗首流水、榎沢、久沢村、左女夫石、入山瀬村、天間村、一円天間村、左杉田村道追分、天間沢、左潤井川手前引込天間村本村、左右天間村、字天間沢、四辻、右杉田村左天間村道追分、界三ヶ村入会（若宮村、下小泉村、中小泉村）人家入交、右引込杉田村二百五十軒、此村脇（上下）小泉村枝祖母懐（ウメカフトコロ）、角ノ伏沢、左右入会人家、右若宮八幡宮（鳥居建、社前迄四十五間許）、右引込浄土宗福寿山直至院誓運寺、右に甲州本街道制札、尾無沢、右引込日蓮宗大竜寺、西沢、上小泉村に上印を建置。従是久遠寺へ打上。大門を入る、左右杉並木、左小泉村、右本乗坊、左大恩坊、大鼠坊、左本坊本堂前に終る。正面左祖師堂、右鍾楼、其脇に天王社・八幡社、従秀吉公後御当家大猷院様御代々頂戴。日蓮宗勝劣久遠寺。開山日郷上人。建武元年戊年開基。 又上印より始め、左小泉村字久遠寺門前、左引込下小泉村字清泉、椛田川、右許引込源道寺村、欠畑沢（仮橋）、源道寺村、左小浅間森、左字欠畑、右側許河幸地村、右引込河幸地村、大宮郷東新町、同郷青柳町、左横町引込浄土宗宗直寺、右人家後引込神領裏宿、同町内三辻にア印を建置。是は高原通り松岡道の残印也。右引込小横町の限り。京智音院末後冨山平等寺、連尺町、右横町村山本街道追分。右引込京都智音院末浄法山正定院大頂寺、大宮郷中宿町右側所、神田町、右庚申堂、神田川（仮橋）、右側許大宮郷浅間社領西新町、左側小界江川支配西新町、右浅間社一ノ鳥居前、御料所西新町人家前打止め西印を残終る。明日当社内村山道且追て五ヶ寺廻り妙連寺より来り繋印ともなる。	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
11	昼休	大岩村	同　富士宮市	名主定右衛門	大宮郷中宿町出立。駿州富士郡大宮郷（右富士浅間鳥居前）左側字西新町人家前街道残西印より始、浅間社境内より村山道測量。往還中央界大宮郷西新町一ノ鳥居、左右境内、二ノ鳥居、鏡池反橋渡長八間、右引込神田川向冨士伊賀守屋鋪構の後神田古城跡、神前迄二町三十九間。楼門内、左右廻廊、本社拝殿あり。駿河国一ノ宮本社冨士浅間宮、式内浅間神社。右引込別当冨士山玉涌寺宝憧院。本社、左三ノ宮、右七ノ宮あり。三ノ宮本社より右の方三十間引込構外御手洗涌玉ノ池という方六十間許。七ノ宮、此上に神立山旧跡風土記に出つ、此下に不動堂あり。旧跡衣掛松、神立山、玉涌池、右古歌あり。左引込冨士右馬之助構、真直綱橋街道へ向、左右社家町、一支横物。即大官司冨士上総門前に終る。是は已後の止宿測所也。又境内後杉並、左側社家屋敷、冨士登山街道を行。横溝、左引込旧跡工藤谷戸（ヤト）というあり。此畑中に工藤左衛門祐経の墳墓あり。左浅間二之宮、大宮郷登山道限甲州街道に出る。左野山道追分、右引込大岩村（百十一軒）内昼休	一〇〇
12-1	昼休	山宮村	同　富士宮市	名主栄蔵	西ノ河原、中央界、大岩村、粟倉村字二股、四辻、右冨士山・左上井出道追分に上印を残す。是より真直登山道筋村山浅間宮打上。左追分小道小坂を登る、字山辻坂、村山郷、左右雑木中、左右惣門を入る、左右村山人家散在、左引込鎮守大棟梁別当大憧坊門前。左止宿浅間別当辻ノ坊門前。右大日別当池西坊門前。即測所前に打上終る。是より一支浅間社内へ打込。左右杉並入口鳥居広前に至る。正面本社まで測る、本社（村山浅間宮という）、其後に大日堂あり。又左後三十間計引込小高所大棟梁の社あり。恒星測定（　9）粟倉村出立。同所四辻、右冨士山・左上井出村道追分上印より始め、甲州街道本門寺に向て測量。由沢（前村にて西河原という）、山宮村字宮外人家続、右引込村山浅間宮古社跡、浅間沢。同村昼休、	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
12-2	（10）	北山村	同　富士宮市	日蓮宗冨士山本門寺 境内坊中　行泉坊	右引込八幡宮鳥居建、字蒲沢、春沢、北山村、四辻追分、字堀ノ内、横沢（水無）、右題目堂、右延竜庵、四辻、大門通に至て街道打止め天印を残。是より大門迄直道杉並十八町という。大門の方へ向て坊中、右行泉坊止宿、右西ノ坊、左蓮行坊、左養運坊、左宝蔵坊、左円行坊、左東陽坊、又本堂の方へ向て坊中、右輪雄坊、養仙坊、左本坊門前、二王門を入、左右廻廊、廣前、左の方方丈より本堂続の廻廊、本堂九間四面、右に並て祖師堂、境内五重ノ塔あり、北山浅間ノ社、八幡宮、七面社、水神社、山神鐘楼。天印より本堂迄測る。日蓮宗勝劣冨士派本山五ヶ寺ノ内冨士山本門寺。恒星測定	一〇〇
13	（11）	上井出宿	同　富士宮市	名主十左衛門 百姓八郎兵衛	北山村出立。同所天印より始、甲州街道測量。右本門寺裏門、左引込字門前、北山村、字此（コン）田、字横道、字久保、字下組、大久保沢（当時水なし）、字大久保、字高田、右鳥場道追分、字馬場、竹ノ沢、字和平（ワダイラ）、左大石寺道、字中井出、溝之尾用水、上井出村、右引込日蓮宗恵光山寿命寺、枝新田に田印を残す。是は大石寺通の残し。矢帳甲州道を行。右引込狩宿村新田上原に曽我八幡の社あり（曽我兄弟を祭るのみなり）。無間谷大河原巾三十六間（無間谷川上、冨士山の内無間山という大谷より流る。当時水なし。雪解の砌みぎり高水となる。即浮涙（ウルイ川）の上なり）、字上井出宿測処に至り打止めカ印を残終る。恒星測定	一〇〇
14-1	（12）	人穴村	同　富士宮市	百姓善左衛門 百姓助左衛門	上井出宿出立。同所カ印より始、人穴道測量。左稲荷社字観音前、左白糸滝道追分に白印を残す。追て滝の方より来て繋印なり。左猪ノ頭村道追分、元堀、左天神ノ森、北山用水川、此辺不二裾草生広し、首掛沢、右甲州郡内道追分、字間遠之原、大股沢、都て是迄の沢冨士山無間谷より押出すという。人穴村、左に小股沢、大股沢落合あり、小股沢、此辺茶畑多し、人穴村家飛々〆三十軒。（但夏の頃人穴参りの旅宿す。田なし。家々炭を焼）、左猪ノ頭道追分打止に人印を残す。左に天王小社あり。是より人穴打上。左甲州道根原道追分。	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
14-2	（12）	人穴村	同　富士宮市	百姓善左衛門 百姓助左衛門	是より茶畑中の小道を人穴の方へ向て行。石段、右引込鎮守浅間ノ鳥居（本社まで五十間許）、左に参詣人諸国の供養塔多し。左大日堂、右石玉垣、左右石灯篭、即人穴入口迄測る。人穴村は江川支配所にして、都て除地。百姓作り取の地なり。故に他村にては御朱印地と号す。尤水乏しく夏の頃雪解氷を汲、秋より天水を留置。人穴入口より石段を下りて五間許行、穴二筋に分る。一町許より奥水ありて橋を渡る。中に篭堂というあり。それより一町許を行て水深さ膝に至る。入口より四町許行て左へ廻りて帰る。是より奥、上下大岩石となり水深して行事克わず。又入口より三十間行て石の御柱というあり。	一〇〇
15	（13）	内野村	同　富士宮市	曹洞宗大安山法蔵院	人穴村出立。同所人印より始め、マヽ下沢、字平山、此辺都て廣野草原也。猪鹿多し、猪頭村、右引込山裾谷間に麓村。村高免除の地なり。枝大橋、当村内に太鼓石、バチ石というあり。形に仍て号なづく。字遠原、冬の頃榛野村より来りて川海苔を取りて江戸へ貢献す。是を冨士海苔とも、又芝田のりともいう）。内野村、左大宮道追分、枝足方組、芝川鬼橋、同川分水新川仮橋、止宿前に打止めチ印終る。	一〇〇
16-1	（14）	上条村	同　富士宮市	日蓮宗富士山大石寺 境内坊中　寂日坊	内野村出立。同所止宿前チ印より始、白糸滝道測量。右引込白糸滝観音堂・修験大乗院、枝横手沢、芝川分水、原村、左十二間許にて芝川分水（白糸滝上流なり）、左芝川上に地蔵ヶ滝（高二丈斗、巾三尺斗）、滝道追分にタ印を残。是より白糸滝打上。左眼下十二間許滝壷の脇に涌水あり。字帯水という。滝壷迄測る。白糸滝（高五間許、巾六間許、四筋に落る。滝壷の両岸より涌水数多く落て糸を引たるがごとし。故に白糸滝と号く。其両岸藤多し。花さく頃は諸国の人多く群集す）、又タ印より始め芝川分水（滝の分水なり）、上井出宿芝川、権現橋、首掛沢（当時水なし）、三方追分に出て字観音前の白印に繋ぐ。	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
16-2	（14）	上条村	同　富士宮市	日蓮宗富士山大石寺境内坊中　寂日坊	又飛て上井出宿枝新田追分の田印より始め、大石寺道測量。狩宿村、無間谷雪解川大河原を渡。右頼朝公御陳跡、冨士御狩の頃此所に御陳屋、其後旧民傳右衛門へ給う。同人屋敷方二町許、屋敷前に下馬桜というあり。根廻り二抱計（古木なり。本木枯れると又根元より枝を生じ栄う。一重桜なり）。傳右衛門居宅生木を以柱とし、大家なりしが中古焼失にて建替る。先祖は由ある武士なり。家宝伝来の品多数あり。上野郷上条村（但上条村、下条村二ヶ村を上野郷という）、右芝川向榛野村枝熊久保滝あり。字熊久保滝（高七間三尺、巾四尺許）、字美野口、芝川分水仮橋、左日蓮宗妙喜寺、字下釣、字角ヶ谷戸、右竹藪中下条村人家あり、分水仮橋、字市場。是より大石寺境内、左厩裏、左宮殿、表門を出る。本堂筋大門通に至て打止石印を残す。是より大石寺打上。左右杉並木、右学頭蓮蔵坊、左本坊構、右鐘楼、左鼓楼、石段を上り本堂前迄測る。日蓮宗冨士山大石寺。本堂前より右の方三町許後へ引込五重塔あり。本堂より右に八幡宮、並て天王社。本堂十六間四面。境内南北千三百六十間、東西五百十四間。開山日興上人（此寺より北山本門寺へ隠居す）。坊中三十六ヶ寺、内十四坊無住、表門通り位牌堂前両所にあり。	一〇〇
17-1	（15）	上柚野村	同　富士宮市	名主平蔵	上条村出立。同所大門通り石印より始め、左右並木、両側坊中右側、理境坊、百貫坊、寂日坊、観行坊、蓮成坊、南之坊。左側浄蓮坊、久成坊、蓮東坊、本住坊、本境坊、蓮仙坊、〆表坊。楼門（横十間長三間）、門外左之坊、裏坊、清光坊、壽命坊、報恩坊、西山坊、慈雲坊、円因坊、正円坊、東光坊、本達坊、信教坊、弁立坊、本要坊、宗順坊、行真坊、要行坊、法雲坊、随本坊、善立坊、善行坊、表裏合三十六坊。是より真直黒門外まで杉並凡二町許、字市場、字古ヶ谷戸、上野郷下条村、妙蓮寺、惣門通りへ出て後の方杉並、惣門まで五町許に下印を残す。	一〇〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
17-2	（15）	上柚野村	同　富士宮市	名主平蔵	是より妙蓮寺打上。字中神用水川、左引込開山堂字宮ノ前、本堂正面に出て左引込字的場旧跡、右蓮光坊、右善応坊、同蓮蔵坊、右心教坊、左本妙坊、右徳元坊、左本坊表門、本堂前迄測る。右に祖師堂あり。富士山妙蓮寺。本堂七間四面、坊中十二ヶ坊内七ヶ坊有住。本堂後引込妙蓮尊儀の墓あり。開山日華上人。当寺建立年歴四百九十四年程。此辺すべて南条氏古城跡。方三町許にして川筋あり。是古の外堀なり。当時田畑となる。又下印に戻て始、字大門下、字西原、字出口、字東光地、字堂平、右に法花宗北山本門寺末冨士山東光寺。上条村、字角ノ谷戸、精進川村、字山本、川欠、左浅間熊野合社、右芝川向に禅宗千光寺、芝川分水、芝川姥ヶ橋、右に日蓮宗常境寺、左川向字格（柿）ヶ谷戸、西川、西川橋、字大倉、左芝川向引込枝渡瀬（ワサビ畑というあり）、上柚野村、字上条、字堀之内、字勢子、打止めセ印終る。恒星測定	一〇〇
18	昼休	大久保村字船場	同　富士宮市	名主与右衛門	上柚野村出立。同所止宿星測所より始、昨日の打止めセ印に繋ぐ。字堀之内、山沢。右引込山根曹洞宗東昌寺末押野山延命寺。字土岩、字大門、小流、字市場、下柚野村、字大畑、右引込日蓮宗広徳寺、字押出し、左道端にカロウト石、字下村、谷川、鳥並村、字馬木沢、字上村、西山村字熊畑、字熊久保に片印を残す。是より大宮通打出し。字久保、左本門寺、開山日代堂、芝川大橋、字新垣外、左本門寺大門通り三方追分に打止西印を残す。又片熊に帰り片印より始め、内房通を行。左芝川中に畑島あり。左芝川向字下条（今夜の止宿所）、大久保村、字船場、昼休、	一〇〇
	（16）	西山村字下条	同　富士宮市	名主源兵衛 百姓忠右衛門	左芝川向山根に羽鮒村百十六軒、長貫村、枝川間、左一町半許にして冨士川・芝川落合、左冨士川中に瀬戸島というあり。枝橋場、即冨士川端綱橋渡口（文化八辛未年十二月十四日残）題目碑に終る。旧新測遺量連綿。冨士川上十町許東側に枝楠釜、橋中央庵原郡、内房村網橋（渡長二十七間）。瀬戸島より内房村へ舟渡し。名所内房綱橋（竹縄にて組立。中に巾一尺許の板を置。是を踏て渡る。央に至る頃至て怖し）、それより八ッ半時頃西山村字下条に着。	一〇〇

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
19	(17)	大宮郷	同　富士宮市	富士浅間宮大宮司 富士上総	西山村出立。同村本門寺領字新垣外カイト、大門前西印より始、本門寺打上。黒門、右引込学頭上行院、右円心坊、左恵林坊、左妙ノ円坊、右行谷坊、右浄因坊、右臨唱坊、右浄円坊、左本泉坊、左大詮坊、左引込方丈中本堂、右祖師堂、左位牌堂、三堂共八間四面、本堂前に打止。富士山本門寺（西山本門寺という）、開山日興上人（嫡弟）日代上人、境内諸堂拾壱ヶ所、坊中十六ヶ寺。又西印より始め、大宮道測量。三ッ沢、是より少し山越坂道、字原（左右草生広し）、中里村入会、左側青見村、字青見坂、左右青見村、左引込当村内に曹洞宗甲州竜花院末広国山先照寺。里村、浮涙川上飢濁川の分水、右引込駒木根、阿居山村、飢濁川、大宮郷本宮浅間社領、右引込畑中旧跡（絹掛松）、社前町四辻シ印を残す。是より神社打上。右小流向大宮司構、字立宿、左日蓮宗本光寺、左甲州道追分、境内鳥居を入、社前に打止め。本宮末社式内冨知神社。又シ印始め、字田宿、左社家町、右引込真言古儀宝積寺、小流、字西新町、左側許西新町、浅間一ノ鳥居前西印に繋ぎ終る。止宿屋敷廣し。	一〇〇
20	(18)	同	同	同	雨天滞留。地図調。	一〇〇
21-1	昼休	岩本村	同　富士市	組頭与次兵衛	大宮出立。大宮郷字青柳町ア印より始、高原通り松岡道測量。右側青柳町、左側連尺町、惣名傳馬町、黒田村、大宮持宮、黒田村字田中、浮涙川金谷橋、又黒田村、左引込日蓮宗本光寺、右引込星山村内曹洞宗甲州巨摩郡源向院末明星山大悟庵。境内に式内倭文（シトリ）神社。左引込陣屋あり。山本村、左上山本村枝高原、左引込禅宗先照寺末祖母山竜泉寺、什物は先照寺にあり、当村名主勘介末葉にて本名吉野と号す。山本村に居住するが故山本と改。同人持伝の宝物、古書系譜等あり。左引込陣屋、下山本村枝村高原、岩本村、右引込曹洞宗先照寺末曹洞山永源寺。ヲ印を残。是より実相寺打上。大門を入、左右坊中、右常在坊、左信乗院、山門を入、右鐘楼、右客殿、本堂前迄打上。日蓮宗岩本山實相寺。坊中八ヶ寺、開山高祖上人。又テ印より始め、街道を行。昼休。	一〇〇

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
21-2	(19)	松岡村字松耕地	同　富士市	百姓代与次兵衛	松岡村、用水川、字四ッ谷耕地、字松耕地にフ印を残す。是より測所打上。又フ印より始め、左引込松樹中黄壁宗福壽山瑞林寺。四方追分、左本村道、右引込柚木村枝北村、用水、左字新町耕地、東海道に突当る。但此道筋は富士川渡船場への新道なり。右上方筋の方松並二町許先新田ヶ耕地。それより三町許行ば富士川河原に至也。此堤の字雁金堤という。従是江戸の方へ向て東海道新道筋を行。左右人家、字橋下耕地という。東海道三辻に至り右古道街道追分に三印を残す。従是江戸の方へ向て東海道重測。柚ノ木村、重測の限り。真直は字見六町という。又三印より始め、上方へ向て重測。恒星測定	一〇〇
22	昼休	今泉村字寺市場	同　富士市	名主三郎右衛門	松岡村出立。無測量二里吉原宿小休。それより十町許行、富士郡今泉村、十里木街道追分字横道ヨ印より始め、根方通り佐野道測量。今泉村旧名、往古は瀬古村、中古は善徳寺村、慶安年中より今泉村という。字水ノ上、左臨済宗興津清見寺末瑞竜山法雲寺、字山本、右引込臨済宗善徳寺、字寺市場、左に日蓮宗身延山久遠寺末福王山妙遠寺。坊中一ヶ寺、実相坊。右横町人家続、字寺市場、昼休、	一〇一
22	(20)	比奈村字東組	同　富士市	百姓万右衛門 名主佐右衛門	右に孝子五郎右衛門（天和二年常憲院様御代より頂載。毎年年始御礼に出府す。道中計帯刀御免）。字吹上、右引込鎮守天幡宮、原田村、左に浄土宗京師智音院末冨榮山清岩寺。本堂迄三十間許。名所テゴノ呼坂、紫式部の古歌あり。字宇東川、左薬師堂、宇東川、左引込飯盛浅間の社あり、用水小流を渡、右田中に郷蔵一ヶ所、左曹洞宗洞慶院末大富山永明寺。境内東西一町、南北二町。滝川仮橋、字滝川、左原田浅間ノ社、比奈村、此沢、字西組。字中組、字東組、字西組、右引込春日明神の社、其側に別当法花宗本住寺。字中組、小流を渡り左に禅宗申守庵、左引込曹洞宗洞慶院末瑞竜山玉泉寺。右田中に郷蔵。字東組、止宿前測所に打止ヒ印に終る。恒星測定	一〇一

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
23	(21)	西柏原新田	同　富士市	浮島屋利右衛門	比奈村字東組出立。同所止宿前ヒ印より始、左引込法花宗蓮池山長学寺、陣屋あり、右側許宗高村、花守村、此沢、東宗高村、西宗高村、宗高村、花守村、字逆さ川、左側比奈村字東組、赤淵川、中里村、字天念寺、字長沢、右引込陣屋、右引込法花宗竜泉山東光寺、境内二町四方。字久保、左止八幡宮、別当多門坊。右愛鷹明神。字宮込、須津川手前街道打止め子印を残す。従是廣沼へ打下。左側神谷村、右側神谷村枝川尻、西川尻村・東川尻村、但し中里村、神谷村人家も入込也。廣沼堤上に至てヌ印を残す。従是右沼周り。神谷村堤、川尻村堤、須津川尻（東増川村・西増川村入会）堤、右舩入小屋、小溝、江尾村堤、万久ヶ沢、中央郡界。駿東郡西舩津村堤、総名浮島ノ原という名所なり。舩津村堤字屋川河原、石川村堤、駒瀬沢橋、沼中に男塚女塚という松生の島あり（周十五間許ずつ）。一本松新田堤、水吐口橋、沼川大橋。字新道堤、左東街道一本松新田人家迄打出し。字横堤、助兵衛新田堤、上田新田堤、又富士郡東柏原新田・西松原新田・中柏原新田・沼田新田入会堤打止めカ印を残し終る。それより無測にて行、東街道立場西柏原新田止宿。恒星測定	一〇一
24	昼休	東増川村	同　富士市	名主源蔵	西柏原新田出立。同所止宿測処より始め、廣沼へ打下堤上にロ印を残す。是より郡界へ行。昨日の打止カ印より始、字山伏塚（松也）前に残すロ印に繋ぐ。田中新田堤、字東堤を行、沼川清友橋、大坪新田、中里村堤ヌ印に繋廣沼一周終る。又中里村昨日の残し子印より始め、根方通り測量。須津川（川上愛鷹山より流る）、神谷村、左若宮八幡宮、左引込禅宗小林山天澤寺、西増川村、左引込禅宗円通山福聚院、東増川村、左法花宗法経山妙蓮寺、昼休、	一〇一
	(22)	西舩津村	同　富士市	百姓才次郎 名主五右衛門	江ノ尾村、左愛鷹山の頂、愛鷹明神小社あり。式内桃澤神社。矢田沢小流、馬毛沢小流、郡界迄測る。駿東郡境村、左に熊野権現の社、右側西舩津村、街道打止めハ印に終る。恒星測定	一〇一

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
25	昼休	根古屋村	同　沼津市	百姓友八	西舩津村出立。同所測所より始め、右に冨士浅間社、街道に出て昨日打止ハ印に繋ぐ。春山沢（当時水なし）、左右西舩津村、字千間原、舩津村、左禅宗愛鷹山興隆寺、石川村枝荒久、駒瀬沢、左引込法花宗駒瀬山本広寺、東平沼村・西平沼村入会、字杉山、字吹上、左法花宗妙栄山法花寺、左鎮守八幡宮、井出村東組、左引込曹洞宗千福村普明寺末土詠山大泉寺。字馬場、根古屋村字西板、左浄土宗光明山西岸寺、左法花宗愛鷹山本法寺、右原宿道追分、昼休、	一〇一
25	（23）	中沢田村	同　沼津市	名主善兵衛	青野村、左根古屋内興国寺、古城跡（今堀石垣の跡あり）、高橋川、高橋渡、柳沢村、鳥ヶ谷村、真言古儀豆州三島宿愛染院末愛東山光厳寺。東原村、左牧道、按ヶ沢、西椎路村字東ノ郷、東椎路村、字久保、字小屋敷、左禅宗洞慶山竜雲寺、西沢田村、西川、字尾先町、左禅宗永正院、中沢田村止宿前に打止め中印残終る。	一〇一
26	昼休	下長久保村字高橋	同　長泉町	名主忠蔵	中沢田村出立。同所止宿前中印より始、荒田沢、左引込臨済宗興津清見寺末沢田山大中寺。右沼津道追分、西熊堂村、前川、東熊堂村、左熊野権現社、字南方、八ッ橋、字新道、用水川、岡宮村、右引込日吉村内日吉山王社（東海道に鳥居あり）。右引込冨士浅間ノ社、字寺下、左引込仁王門あり。法花宗勝劣徳永山光長寺。本堂迄一町半許、境内、東西五町余、南北二町半。文明年中建立。岡一色村、字松ヶ尾、右引込光長寺開山堂あり。字瀬子、用水、左角池一周十四五町、上小林寺、木瀬川分水、下長久保村、右に一柳伊豆守墓（四面塔）、字高橋、百沢仮橋、昼休、	一〇一
26	（24）	水窪村	同　裾野市	名主茂兵衛 百姓文助	右法花宗蓮花寺、左諏訪ノ社、左岡山牧野、右馬之允古城跡、栂ノ木沢、下御厩郷一色村、左定林寺道追分、喜瀬川分水、島巾二十四間、同川元流渡巾二十間飛石渡り（又仮橋もあり）、島周り七町許、納米里村、左禅宗貴方山普向寺、上土狩村、用水溝二枚石橋、右沼津道追分、水窪村止宿前打止め水印終る。	一〇一

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
27	(25)	深良村字大森新田	同　裾野市	名主治兵衛 百姓半右衛門	水窪村出立。同所止宿前水印より始め、用水、中川、伊豆島田枝堰原新田、三間堀、右側平松新田、左側二ツ家新田、字唐沢、小柄沢、佐野村枝二本松新田、左喜瀬川向引込曹洞宗小田原早川海蔵寺末桃園山定輪寺。寺内桃園親王の御廟あり。当時桃園大明神と称す。同所に宗祇の墓あり。三島街道に出て正月二十二日残し石牌に繋終る。それより無測、深良村字大森新田着。	一〇〇
28	昼休	新橋村枝相沢	同　御殿場市	名主五左衛門	深良村字大森新田出立。無測。岩波村、神山村、大坂村、中山村より閑道を行、東川を渡り二子村小休、沼田村、東田中村、新橋村枝相沢昼休、	一〇〇
28	(26)	東山新田字中安場	同　御殿場市	名主嘉野右衛門	深沢村に至る。無測行路二里。駿東郡御厨郷深沢村字繁小田小印より始め、仙石原道測量。相沢川分水、東田中村字蜂ノ尻、相沢川、又深沢村、左に山神ノ社、東山新田、塩沢川、字塩沢、字中安（休）場止宿前に打止め中印に終る。	一〇〇
29	(27)	仙石原村字下向	神奈川県箱根町	禅宗竜向山長安寺	駿州駿東郡東山新田字中安（休）場出立。同所止宿前中印より始、ウトウ越測量。右中山道追分、栖沢（水なし）、深沢村、是より坂登、水呑沢、字ウトウ坂、水呑沢、字土用沢、字ウトウ坂峠、左猪ノ花権現鳥居あり、国界に至る。相模国足柄上郡仙石原村、是より下り坂。御要害の地故仙石原御関所より役人出張付添、屈曲坂、太郎沢小流を渡、字上向、字下向止宿入口に打止め下印に終る。	九九
30	(28)	宮城野村枝木賀	同　箱根町	柏屋市三郎	仙石原村出立。同所止宿入口下印より始め、湯本道測量。右深良道追分、御関所北門を入り右に番所、小田原持字仙石原御関所という。南門を出る迄柵内四十五間。釜淵川小流、大久保沢、大沢細流、是より山の横道を行、宮城野村字薄井峠、火打石沢、字向、ロウスツ川、居村人家間を過、三度川。但、出水の砌は一面に水高し。すべて焼石川温泉河岸通所々にありという。右芦ノ湯道追分、字阿弥陀坂、宮城野村枝木賀止宿前打止キ印に終る。	九九

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
文化13年3月						
1	（3．29）	芦ノ湯	神奈川県箱根町	亀屋善蔵	宮城野村枝木賀出立。同所止宿前キ印より始、芦ノ湯道を行。宇木賀坂、宇須沢坂、左底倉道追分にソ印を残す。枝二ノ平、中沢、足柄下郡底倉村、鳴沢渡、左底倉道追分、左鷹ノ巣山（小田原征伐の時、太閤御陣跡。頂上草生平也）、宇葱坂峠、蛇骨川、芦ノ湯（村名なし）、左二子山頂に樒（シキミ）生茂る。（是を畑宿にて取り、初春門に立、松飾の心也という）。左畑宿道追分、右小平に宇弁天ノ台というあり。其所に恩人碑あり。此山下名所アジガ淵（眺望よし）。芦ノ湯人家中温泉壷四ヶ所（硫黄強し）。旅宿屋六軒（何れも大家あり）。止宿前に打止めア印を残す。	九九
2	（　30）	箱根宿	同	本陣石田太郎左衛門	芦ノ湯出立。同所止宿前ア印より始、右宝蔵ヶ岳、左二子山間を越る。名産、矢竹、羅宇竹多し。地獄名多し。右の竹山を死出の山という。箱根権現神領箱根山、左二子山裾曽我兄弟並虎御前の墓三ツ並てあり。右に二十五菩薩巌石に彫付あり。空海作。右引込多田満仲の御廟。右死出ノ山、血ノ池というあり。其下に精進ヶ池、宇六道ノ辻、岩窟奥の自然石に地蔵彫付あり。空海作也。右駒ヶ岳頂に鞍掛石というあり。嗟作惟影音（アヽイエイノヲトヲナス）六道の辻地蔵前にあり。宇西ノ河原、左窪に名所薺（ナヅナ）ヶ池、宇狭石坂、東海道宇八町坂に出て六道地蔵菩薩に繋。従是東海道重測。右に出茶屋一軒、左側許箱根駅御要害の地、宇八町坂、右引込駒形権現の社、右に山神の社、右に出茶屋一軒、右箱根権現参詣道宇江戸道という、鳥居あり、是より社迄六町許という。右引込曹洞宗広福院、左屏風山という。右に地蔵堂二宇、宇西ノ河原、右箱根権現鳥居前（是より七八町許）、湖水端に出てコ印を残す。右に銅地蔵あり。従是湖水廻り兼東街道重測。右湖へ三町許の出鼻、宇堂ヶ島という。左引上り箱根関遠見番あり。江戸口門入口、（右湖水迄、左山上迄御柵）。構内左に向い番所、右改番所、毎月交代。右に小番所、上方口門迄構内二十四間。箱根宿宇新町、左に制札、宇小田原町、左引込法花宗本着寺、右止宿本陣前打止め小印に終る。恒星測定	九九

大日本沿海輿地全図 第１００図 甲斐・駿河 の一部及び拡大図

出典：国立国会図書館デジタルコレクション

会員だより

「能登半島地震」続報

金沢市　河崎倫代

一、能登さいはて資料館のこと

２００６年（平成18）10月に能登半島最北端、石川県珠洲市狼煙町に開館した「伊能忠敬と灯台と民具の能登さいはて資料館」は、昨年元日に発生した能登半島地震で「半壊」と診断され、今年中の解体を余儀なくされている。

手作り看板を掲げて2006年10月に開館

その年の３月に退職して実家の両親のもとに通ううちに、10年近く閉鎖されていた「民俗資料館」の再利用を思いついた。かねがね、「伊能忠敬の加賀藩測量」に関する展示施設を作りたいとの思いを抱いていたからだった。この施設は、１９７３年（昭和48）４月に発足した禄剛崎観光事業協業組合が、「能登地方に残る古い民具を展示して、観光客に奥能登の歴史を知ってもらおう」と設置したものである。団体客に昼食を提供する茅葺き古民家「山伏乃館」と土産店・食堂を兼ねた「あすなろ」の三施設を運営していた。輪島市町野町曽々木から珠洲市狼煙町に至る外浦海岸が、トンネルと道路の新設によって大型バスの通行が可能になると、半島を一周する秘境奥能登観光ブームが到来した。

やがてブームは去り、利用客減少で経営難に陥った組合は、１９９７年（平成９）12月に解散した。たまたま実家の田んぼを埋め立てて建てられた「民俗資料館」は、父の要望で内部資料共に残されていた。それを利用して筆者の夢を実現しようとしたのである。

今さらながら、大それた名前を付けたものだと、忠敬先生に申し訳なく思う。佐原の「伊能忠敬記念館」以外に「伊能忠敬」を名乗る施設はあるだろうか。富山県の親戚宅に来たついでにと、わざわざ足を運んで下さった渡辺一郎ご夫妻、奥能登の歴史・文化を訪ねる旅行のコースに組んでいただいた星埜由尚ご夫妻、バス旅行に参加して立ち寄って下さった前田幸子理事の方々には、今も感謝とお詫びの気持ちでいっぱいだ。

こんなボロッちい資料館だったが、開館の翌年からは珠洲市の全６年生が参加する「史跡めぐり」コースに組み込まれて、「伊能忠敬」の事前学習・地域学習の場となった。毎年７月には学校毎に児童が訪れた。展示資料を解説し質問を受けるなどの交流が楽しみだった。資料は、忠敬さん旅装パネル、「測量日記」を書き込んだ「加賀藩測量行程図」（国土地理院北陸地方測量部作製）、グリニッジ国立海事博物館蔵「文政四年伊能小図」（複製）、呉市入船山記念館「浦島測量之図」・「御手洗測量之図」（複製）、ペイレ氏旧蔵「伊能中図　石川県版」などである。

珠洲市での測量行程を追いながら、「私たちの先祖も測量を手伝ったり見学したりしたんだよ」とか、「残念ながら忠敬さんは能登町松波までしか来ていないけど、それは弟子の平山郡蔵さん達が険しい外浦海岸を勤勉に測量したから。もし途中で一日サボっていたら、忠敬さんは珠洲市に足を踏み入れていただろうね」などと話を進めた。しかし昨年は学校の運営そのものが困難を極める中で、「史跡めぐり」は実施されなかった。これまでの参加者は現在の中学一年生から30歳の大人までである。伊能忠敬に親しみを抱き、「珠洲市で６泊した測量隊」と「協力した自分たちの先祖」のことを覚えていてくれたら、こんな嬉しいことはない。

加賀藩測量の概要を示したパネル。『測量日記』を簡略に紹介。
その日の行程、宿所などが記載されている。

二、能登半島地震と資料館

昨年1月1日午後4時10分に発生した大地震と津波の被害報道は、まだ皆さんの記憶に新しいことと思う。筆者も102号で報告させていただいた。幸いにも狼煙町では死者が出なかったものの、倒壊した家屋も多く、水道は2月23日にようやく復旧した。

筆者が発災後初めて狼煙町へ入ったのは2月7日の午後だった。金沢の自宅から狼煙町まで150㎞、通常は2時間半から3時間の行程。しかし「のと里山海道」は随所に崩落・亀裂等が発生していて、途中からは半島の東側へ大きく迂回せざるを得なかった。半島を周回する国道249号線は崖の崩落、倒木、道路に迫り出した家屋もあり、路面の凹凸に注意を払いながら慎重に走行した。途中、全国から支援に来てくれた救急車・消防車・パトカー・自衛隊車両等とすれ違う。任務交代の帰路だろうか。どの車両も前面や側面に自治体名や駐屯地名が書かれている。「ありがとう」、「ありがとう」とつぶやきながら走行を続けた。半島先端まで6時間余りかかった。

その後何度も狼煙町へ通う中で、DMAT（災害派遣医療チーム）、移動薬局車、移動式トイレトレーナー、移動販売車などの災害支援車を度々見かけた。仮設住宅を一棟丸ごと載せたトレーラーを見たこともある。ナンバープレートは「札幌」だった。被災地に入り込む不審者に対応するために、各都道府県パトカーが日に何度も巡回してくれていた。宿所も食事処も復旧していない中、支援に入られた皆さんはどうしていたのだろうか。今にして思う。

2月7日に入った資料館は、見るも無惨な状態だった。前年2023年5月5日の震度6強の時の比では無かった。大屋根を支えていた4本の太柱の2本に亀裂が入り、うち1本が大きく裂けて梁が外れていた。

そのためショーウィンドウのフレームが大きくゆがみ、外れ落ちた分厚いガラスが床に散らばっていて、足の踏み場もなかった。翌日から片付けにかかった。割れ残ったガラスをバールで床に叩き落として、ブルーシートの上でさらに細かく砕き紙製の米袋（30㎏用）に入れる。その作業を繰り返した。米袋は意外に丈夫で、本当に重宝した。倒れて大破したショーケース2個も、同様に叩き割って米袋に入れた。破損した展示物の多くを災害ゴミとして処分することにした。幸い、狼煙漁港に災害ゴミ仮置き場が設けられたので、車で搬入した。広い敷地内はゴミの種類別に区分けされていて、数人の作業員が次々に車からおろしてくれた。炎天下の作業だったが、皆さん親切だった。寝具・家電・家具・食器等、すべて発災直前までは大切な個人財産だった物が、こんなにもあっけなく「ゴミ」と化してしまう現実に、悔し涙がにじんだ。

展示品を整理・処分

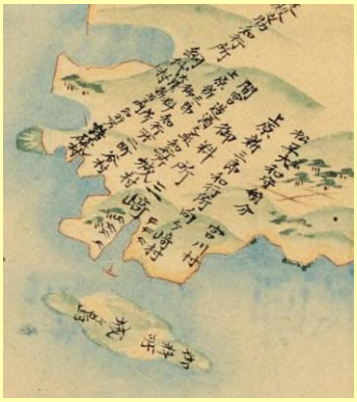
こうして月1、2度、隣接する小宅に4、5泊して片付けていった。発災から6カ月になる7月1日、「資料館は廃館にするしかない」と心が決まった。当初の診断「準半壊」に納得で

きず、再度の審査を申請し「半壊」の診断が出た。「公費解体」してもらえるとホッとしたのもつかの間のことだった。12月に解体前見積もり測量に来た長野県の業者から、住居部と壁を共有しているので、解体前に自費で「縁切り」しておく必要があると知らされた。この大きな建物を事前に切り離して、新たに自費で壁を造らなければならないという思いがけない展開に困惑した。

住民票が珠洲市に無いということで、被災しても各種補助金・見舞金・支援金・義援金等は一切もらっていない。「縁切り」の費用は幾らか？ 資金繰りをどうする？ 業者は自分で探さなければならない。明けて２０２５年、解体までの道のりはまだまだ険しい。昨年後期高齢者入りした身にとって最大の終活。普段は〝適当人間〟な筆者だが、今度ばかりはピンチである。どう乗り切って行けるだろうか。こんな私的な投稿が許されるなら、この結末をいつかご報告したいと思う。

三、大地震と伊能図

『伊能忠敬測量日記』には、時に「地震」の記述がある。筆者が記憶しているのは、享和元年5月15日（１８０１年5月27日）の項である。この日、三浦半島の先端に位置する城ヶ島（神奈川県三浦市）測量を予定していたのだが、早朝「大地震」があり、城ヶ島役人に周辺の情報を尋ねたが、舟行も成らず、道も無いと言われ、やむなく「遠見遠測」に成ったと記している。大図93号には測線の無い輪郭のぼやけた城ヶ島が手描きされている。



国立国会図書館大図 第93図

発災後10日を経た1月11日の国土地理院発表によると、この地震によって輪島市で最大約４m、珠洲市で約２m、地表が隆起した。水平方向では、輪島市で西に最大約２m、珠洲市でも西に最大３mの地殻変動が起きた。地理院は「東日本大震災など過去の大地震と比較しても震源地付近の隆起が大きい」とコメントしている。日本地理学会チームによると、約90㎞に及ぶ海岸線が前進し、その最大は輪島市門前町の約２４０mだという。すべての漁港が使用不可となり、漁業の復旧を困難にしている。冬季の能登の風物詩だった岩ノリ取りも、今年はほとんど不可能だ。

阪神淡路大震災で生じた野島断層（淡路島）は全長約10㎞、南西方向に約１～２m横ずれし、同時に南東側が約０・５～１・２m隆起した。現在は国の天然記念物に指定されている。能登半島地震では、珠洲市若山町で東西に全長約４㎞、幅１００～２００m、田畑や川を横切る最大約２mの段差が出現している。野島断層を上回る規模である。

このくらいの地殻変動が伊能図の輪郭を大きく変えることはないだろうが、金沢大学の青木賢人准教授が語っていたように、「長期的にみると、能登半島は数千年に一度のこのような地震活動を繰り返しながら徐々に形成されてきた」とすれば、今回のような最大４mの隆起が１２０回起こって珠洲市最高峰の宝立山（４７１m）が出現したのだろうかと、単純頭で考えた。数千年ごとに大地が隆起すれば安定した地層はどこにもできない。能登半島が地すべり地帯である事実に思い至った。大きく揺さぶられた半島上空に線状降水帯が発生し、昨年9月21日のような豪雨が襲えば、軟弱地盤はひとたまりもないということになるのか。重ねての大災害に暗澹たる気持ちになってしまう。

四、禄剛埼灯台のこと

１０３号に「灯台と伊能忠敬」を掲載していただいた。１４２年前に設置された禄剛埼灯台のフランス製フレネルレンズは上部レンズが大規模に破損した。海上保安庁はＬＥＤ灯器に交換するという。上部レンズを失ったままでは本当に海の安全は守れないのか。「灯台どうだい」というフリーペーパーを発行している不動まゆうさんに相談し、海外の２社に破損状況を示す画像を添付したメールで問い合わせてみた。初めての英文メールだったが、自動翻訳アプリDeepLに助けてもらった。

フロリダ・アートワークス社からは「レンズはそのままで、損傷した後でも機能補助として機能します。上部が欠けているため、それほど明るくないかもしれませんが、ベルトレンズ（中央部分）は無傷で、ランプからの光のほとんどを投影します」、メルボルンのチャンスブラザーズ社からは「上部の破損が多いようですね。多くのプリズムが破損しているため、修理は非常に困難です。壊れたレンズはスペアパーツが入手できないため、再生するには非常にコストがかかります。私のアドバイスとしては、このレンズは遺産を残すために上部を外して使うことができます。上の部分がなくても70％くらいの効率で

動くでしょう。光源をよりワット数の高いＬＥＤに変えれば、損傷前と同じように海へ光を送り出すことができます」。２社ともに、損傷したレンズはそのままに使えるという見解だった。昨年５月、伊能忠敬研究会総会の翌日、不動さんに仲介を取っていただき海上保安庁の担当部局を訪ねて、歴史あるフレネルレンズを残すよう要望した。しかし「破損したレンズのままでは海上の安全を担保できない」という方針を変えることはできなかった。灯台台地のヘリも崖が崩れて大規模な工事が必要であり、現在その修復のための調査が行われている。

この３月にレンズの交換作業が行われるらしい。取り外されたレンズは珠洲市が譲り受けることになっている。筆者としては、復興後に狼煙町に展示施設ができることを望み、それを見届けたいとの思いが強い。

灯台に関して、もう一つ動きがあった。灯台下の岩場には、建設時に市外から船で搬送された石材を標高36ｍの台地上へ運び揚げるための索道が設けられた。そのための柱穴が多数確認されていた岩場の隆起が気になって見に行った。長年海中にあったり岩場で時折り海水を浴びたりしていた約20㎝四方の穴が、地上に露出したことで風化が始まっていた。せめてこれらの柱穴群を調査測量して記録に残したいと思い、石川考古学研究会の知人に相談した。結果、明治期洋式灯台建築に関する遺跡として認識されるようになり、９月には金沢大学が本格的な測量調査を実施した。

左の画像は、筑波大学松井敏也先生が個人的に撮影・編集されたものである。約80ｍにわたって、かくも整然と２列に柱穴が掘られていたことに驚かされた。画像上部が着船した岩場であろう。荷揚げ場と思われる柱穴も見られる。これを機に禄剛埼灯台建設の実態が解明されることを願っている。

2024.9.6 ドローン撮影・編集
筑波大学教授（保存科学）
松井敏也
奈良県立橿原考古学研究所
河﨑衣美

五、これからのこと

狼煙町では発災直後から、区長のリーダーシップの下、復旧・復興のための様々な取り組みが為されてきた。それは絶えずグループラインによって、県内外に避難しているみんなが共有できている。私も金沢と狼煙町を行ったり来たりして、絶えず気にかけてきた。住民ではない「半よそ者」的立場かも知れないが、それでも、自分に出来ることをやり続けようと思っている。私の場合は、奥能登地域の生活を語る資料（生活用具・農具・漁具などを、縁切り縮小した建物に保管）を遺すこと、歴史的価値の高い禄剛埼灯台（レンズが交換されても重要文化財候補であることに変わりはない）と建設時の岩場の柱穴群を、復興後の貴重な観光資源としても守ること、そして、伊能隊の奥能登測量についてこれからも語り伝えることである。

※　たまたま能登半島の先端に生まれ育った者として、今回のＭ７・６の大地震のことを、「自分事」として語り続ける役目があるのではないだろうか。そんな思いからこの原稿を投稿し、会員の皆さまにお届けする次第です。記者でもカメラマンでもない人間が、金沢と能登半島の先端を往復しただけの一年間の「自分事」を綴ってみました。

【余話】

・突然の隆起にサザエもびっくり！
・支援物資いただきました！
・実家で発掘した懐かしいお宝！

震災直後の隆起岩場には大量のサザエが残されていて、貴重な食材になった。

道の駅のろし駐車場にテントを張り、テーブル・椅子も置かれて、コーヒーを飲みながら、久し振りのおしゃべり！乳酸菌飲料・魚肉ソーセージ・ひじきちりめん・練り歯磨き粉等、不足しがちな品々。感謝！

解体される土蔵で発見！昭和 32 年発売のカモメホーム洗濯器。直径 50 ㎝で手廻し式。効率の悪さにあきれてすぐにお蔵入りしたのか、箱共々きれい。母の期待を裏切った珍品。でも懐かしい！

貝塚市「文化の日のつどい」で伊能測量と岩橋善兵衛について語る

星埜由尚

昨年の文化の日に貝塚市・貝塚市教育委員会の主催により「文化の日のつどい」が開催され、その中で「伊能忠敬と天文測量」の講演を行い、座談会「伊能忠敬を巡る大阪の天文人脈～伊能忠敬から現代の測量へ～」のコーディネーターを務めたので報告します。

貝塚市は、伊能測量において用いられた望遠鏡を作製した貝塚の人岩橋善兵衛の縁で千葉県香取市とは連携事業を進めています。これまでも香取市において令和5年6月10日に開催された香取市測量の日イベント「完全復元伊能大図パネル展」において岩橋善兵衛の紹介と望遠鏡の展示などを行っています。

岩橋善兵衛(1756-1811)は、優れた望遠鏡作製者でした。伊能忠敬も間重富、高橋至時を通じて岩橋善兵衛作の望遠鏡を手に入れていました。伊能忠敬が測量に持参した望遠鏡は4本あったそうですが(貝塚市の資料による)、現在、そのうちの1本が伊能忠敬記念館に所蔵されています。伊能忠敬記念館での名称は「観星鏡(大)」と言い、伊能忠敬記念館HPの「国宝 伊能忠敬関係資料 概要・目録」の器具類に掲載されています。この観星鏡の接眼部には「岩橋」の銘があり、木製レンズ枠には「岩橋」の焼印があると説明されています。

国宝：器具類29 観星鏡（大）と部品　伊能忠敬記念館蔵 無断流用禁止

このような岩橋善兵衛と伊能忠敬の縁から、昨年の11月3日に催された「文化の日のつどい」において岩橋善兵衛と伊能忠敬に関連した記念講演と座談会が行われました。記念講演は、私が「伊能忠敬の天文測量」と題して行いました。伊能忠敬が高橋至時の門弟となり、自宅に天文観測装置を整備して天文観測に明け暮れたこと、地球の大きさを知りたいという知的欲究が全国測量の契機となったこと、全国測量では天候条件などが許せば必ず夜間に天文測量を行い、各地の緯度を求めたことなどをお話しし、伊能忠敬記念館に所蔵されている国宝の測量・観測機器、測量・観測記録などについて紹介し、伊能忠敬が作製した本邦初の実測日本地図を説明しました。

記念講演「伊能忠敬の天文測量」

座談会「伊能忠敬を巡る大阪の天文人脈～伊能忠敬から現代の測量へ～」では、私がコーディネーターを務め、パネリストとして伊能忠敬記念館館長の平野 功氏、間宮林蔵記念館館長の木村明夫氏、貝塚市立善兵衛ランド館長の井出 博氏に加え、国土地理院近畿地方測量部長の田中宏明氏を迎えて伊能忠敬、間宮林蔵、岩橋善兵衛のそれぞれの功績とお互いの関係について各館の紹介を含めてお話しいただきました。また、国土地理院の田中部長からは、それを踏まえて、現代の測量までの発達についてお話を頂きました。貝塚市民の皆さんにも伊能忠敬の地図作りや間宮林蔵との関係、岩橋善兵衛の望遠鏡が伊能測量に貢献していることなどから、現代の測量まで理解いただけたのではないかと思います。

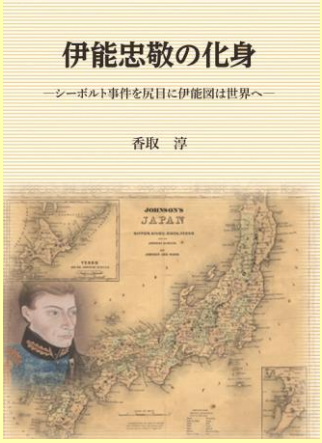
貝塚市は、貝塚らしさの確立とイメージアップを図るための貝塚コスモス・アイデンティティー運動のシンボル施設として平成4年に貝塚市立善兵衛ランドを開館し、岩橋善兵衛にちなんだ天文資料などを展示し、各種天文観測機器を備えて市民に広く開放しています。千葉県香取市とも友好関係を結んでおり、伊能忠敬記念館と資料の交換展示など行っていると聞いています。今回、大阪に向かう新幹線が豪雨のため遅れ、善兵衛ランドの見学ができませんでしたが、是非、再び訪れてみたいと思います。

小説「伊能忠敬の化身～シーボルト事件を尻目に伊能図は世界へ～」を出版

香取　淳（本名　樋口宗司）

■はじめに

この度、歴史小説「伊能忠敬の化身」をＰＯＤ(Print On Demand)と電子書籍の形で出版することになった。今回は〝伊能図〟が主人公であるが、地図は喋らないし、心情を表明することもない。そこで〝忠敬の化身〟に登場して貰い、将軍に献上された伊能図がその後にたどった数奇な運命を、化身の目から眺望する……というフィクションを考えた次第である。



この奇抜なフィクションを想起したきっかけは何であったのか？　今となってはよく思い出せないが、ただ一つ、脳裏に鮮明に焼き付いているノンフィクション小説の一場面がある。それは、江戸城の奥深くにある紅葉山文庫（御宝蔵の一つ）に異人ーシーボルトーが高橋景保（かげやす）の手引きで入ってきた。そこで、伊能図を目にしたシーボルトが、「伊能図を母国に持ち帰りたい」と言って引き下がらない……というくだりである。「鎖国下の日本でそのような事があったのか」という驚きとショックにも似た気持ちを味わったのである。

また、紅葉山文庫に入り込んだシーボルトの実像も、それまでの知識とは掛け離れたものであった。彼は西洋の医学を我が国に伝え、多くの門人を育てたオランダの医師という人物像が一般的である。しかし、シーボルトはオランダ人を詐称したドイツ人であり、オランダ政府に雇われた機密調査員であった。鎖国下の日本で政治・経済、軍事、文化・宗教など広範な調査をスムーズに進めるためには名医の肩書と最新の医療技術が役立つ……という目論見があったというのである。

一方、シーボルトに国禁の品である伊能図を渡すまいとする幕府は、勘定奉行の村垣定行の指揮の下、御庭番(隠密)たちを動かし、シーボルトと景保の身辺を調査。伊能図等の受け渡しの証拠を執拗に集めていく。シーボルトとその弟子、親蘭大名等の支援者と、異人を警戒する将軍家斉を支える御庭番たちは伊能図を巡って熾烈な情報合戦を展開してゆく……。と、いきなりストーリーのさわりに入っても、読者は戸惑われるに違いない。そこで、拙著の粗筋を簡単に紹介してみよう。

もちろん、拙著は歴史小説であり、作者の想像の産物である。古文書等に基づいた史実とは異なることを予めお断りしたうえで、本稿をお読みいただければ幸いである。

■小説のあらすじ

①化身の誕生とその居場所

伊能忠敬は隠居後に名を勘解由と改め、日本全国の測天量地を成し遂げた。その測量から得られた資料を元にして、亀島町の自宅兼地図御用所で日本の正確な地図の制作に当たった。しかし、待望した地図の完成を待たずに勘解由は病死。死ぬに死にきれない勘解由は、化身（家蜘蛛）に姿を変えて地図御用所に留まる。

日本地図の制作は、その後も恩師高橋至時の嫡男景保に引き継がれ、弟子の間宮林蔵や盟友久保木清淵らの手により３年後に完成。時の将軍家斉に献上されることになる。

地図御用所に留まっていられなくなった化身は、荷車に積まれた伊能図と共に江戸城に入った。大広間に広げられた伊能図を見た将軍家斉は、その美しさに感嘆の声を上げる。

「して、勘解由は何処に居るのじゃ」という公方様の問いかけに、「ここに居ります。この伊能図こそが勘解由でございます」と平身低頭して景保が答える。伊能図の美しさに感激した将軍は、その一言で景保を問い詰める気持ちをなくした。そのとき家斉は、御庭番たちから、「勘解由は既に死んでいる」という情報を掴んでいたのであった。

上覧の一部始終を忠敬の化身は天井から鳥瞰していた。そして、「この伊能図こそが勘解由でございます」という景保の一言に触発される。

「そうか！　この伊能図こそが私なのだ。これからは伊能図から一時も離れずに居ればいい」

それに気づいた化身は家蜘蛛から抜け出し、何事があっても常に伊能図と共に在ることを心に決めたのである。

将軍家斉の上覧を終えた伊能図は、大きな掛軸に軸装されて幕府の御宝蔵である紅葉山文庫に納められた。西丸の裏口に近い紅葉山には、大権現家康公の霊廟が祀られ、その麓に歴代将軍の霊廟が立ち並んでいる。そのような場所に居られることは化身に取って望外の喜びであり、未来永劫に平穏な日々が送れるものと思っていた。

しかし、それから数年も経たないうちに、前述のシーボルトが、文書奉

行の高橋景保に手引されて紅葉山文庫に入って来た。そして、伊能図を目にしたシーボルトは、何としても伊能図もしくはその複製図を手に入れようとくわだてる。

②シーボルトの江戸参府

シーボルトは、日本に着いてから幾らも経たないうちに出島から出ることを許された。「オランダから名医が来た」という評判を聞いて、弟子入りを乞う医師や診療を望む患者たちが集まってきたのである。そこで、長崎奉行の高橋重賢(しげかた)は長崎の街中に〝鳴滝塾〟の開設を許す。出島の医師には前例のない、破格の取り計らいであった。シーボルトは医学や博物学等を教える傍ら、弟子たちに色々なレポートの提出を求めた。オランダ語の実習と称して、日本の政治や産業、文化などについてオランダ語で書かれた報文を集めてゆく。しかし、狭い長崎に留まっていては、日本全国の状況や情報は入手困難である。

シーボルトは、４年に一度の江戸参府を利用すべく、ネットワークの構築に着手。長崎奉行高橋重賢の紹介で、天文方筆頭兼文書奉行の高橋景保、北方領土に詳しい最上徳内と間宮林蔵などに手紙を送る。さらに島津重豪(しげひで)とその実子奥平昌高等の親蘭大名に「病気の親族が居られたら江戸参府の折に診察をして差し上げよう」と手紙を認め、西洋の珍しい贈り物を付け届けする。そして、大胆にも江戸に逗留することを幕府に認めさせ、あわよくば将軍の御典医になる計略をめぐらせた。

江戸参府の準備を調えたシーボルトは商館長のスチュルレル、書記のビュルガーと共に長崎を発った。来日から２年と少し経った年の１月のことである。出島の専属絵師も同行させたかったが、参府に加われるオランダ人は３人と決められていたので、急遽絵師として川原慶賀を雇い、公式の参府とは別の〝陰の参府グループ〟に加えた。拙著の表紙に掲載したシーボルトの肖像画も、その川原慶賀が描いたものである。

③将軍謁見の裏で

二ヶ月近く経った３月に、江戸に着いた一行は、指定された〝長崎屋〟に投宿する。その宿には千客万来、親蘭大名の奥平昌高をはじめ奥医師の桂川甫賢、北方領土のスペシャリスト最上徳内そして高橋景保等々であったが、シーボルトに面会を望む客ばかりで、商館長のスチュルレルは殆ど無視されていた。

甫賢を中心とする蘭方医学を推す奥医師グループは、将軍家斉の岳父である島津重豪らの後押しを得て、「シーボルトの江戸長期滞在の願い書」を上申し、シーボルトに江戸逗留の可能性は高いと知らせる。それに対し、奥医師の本流を占める漢方医集団の〝多紀派〟はシーボルトの江戸逗留を阻止すべく、側室お美代の方を味方に引き入れ、猛烈な反対運動を展開する。

両者の間に挟まれた将軍家斉は決断ができず、謁見の日延べをしていた。しかし、二十日近く経って、「多紀派の反対」を理由に、シーボルトの江戸長期滞在願いを却下する……とようやく腹を決め、商館長らの一行に謁見の日時を通知する。

文政９年３月２５日(西暦５月１日)に商館長とシーボルトらは江戸城に参上し、大広間で将軍家斉に謁見。終了後、西丸に入った一行は世子の家慶を表敬訪問し、大奥に向かった。しかし、同行していた高橋景保は別行動をとる。シーボルトに霊廟の参拝をさせると言って裏門を通り抜けると、なんと客人を紅葉山文庫に案内したのである。

シーボルトは前述したように、ここで伊能図や江戸城内の見取図などを見せられ、是が非でも手に入れたいと思い立つ。そして、景保が欲しているクルーゼンシュテルンの〝世界周航記〟と引き換えに伊能図の複製図を求め、景保は重罪に問われることは承知のうえで、伊能図の提供を約束した。

④シーボルトらを陥れる罠

江戸参府の折に、多くの蘭方医や蘭学者がシーボルトに面会し、彼の長期滞在を願い出たことにより、幕府はシーボルトに警戒心を高める。さらに、商館長のスチュルレルとシーボルトの関係悪化から、「シーボルトは伊能図をはじめ国禁の品を蒐集している」という密告書が幕府に送り付けられた。これに対し、幕府は御庭番を駆使して、シーボルトと高橋景保の身辺を徹底して探索。伊能図が複写されて、出島のシーボルトに流出したのでは、という疑いを深めていく。

一方、シーボルトの方も幕府の探索に気付いて、高橋景保との文通を控え目にしていた。しかし、帰国命令を受けたシーボルトは、日本を離れる前に、間宮林蔵の樺太における壮挙を褒め称えたいと思い立つ。そこで、林蔵に宛てた小包を江戸の景保に送った手紙に添えたが、その小包が大問題を引き起こす。林蔵は、景保から転送されてきた小包を開かずに奉行所に届け出たのである。

周知の林蔵にまつわる事件であるが、小包の中から樺太探検の壮挙を褒める手紙と更紗一反が出てくる。幕府は、これらを出島に送り返し、商館長とシーボルトに「知らずにやっ

たことであろうが、和人との交流は禁じられているので、以後慎むように」と警告を発した。

⑤シーボルト事件勃発

文政11年8月9日(西暦9月17日)、その日の長崎は快晴であった。しかし、夜になると大粒の雨と南東からの強風が吹きつけた。夜更けに風雨は強まり、人が立っていられないほどの暴風雨に変わっていく。大型の台風が到来したのである。シーボルトの家は屋根が吹き飛ばされ、今にも倒壊しそうである。身の危険を感じたシーボルトは妻のタキと娘のイネを連れて隣家に逃れようとする。しかし、玄関から先には一歩も進むことが出来ず、戸口に積まれていた大きな木箱の間に身を横たえて、風雨を凌いだ。

一夜明けると、被害の惨状が明らかになった。家々の屋根は吹き飛ばされ、中には倒壊したものもある。石垣や塀も崩れ落ち、植物園の木々はすべてなぎ倒されていた。しかし、それ以上に重大な事態が、対岸の稲佐の浜で起こっていた。シーボルトのコレクションを満載した帆船コウネリウス・ハウトマン号が座礁したのである。中国の小船に錨綱を切られたハウトマン号は港内をさまよい、対岸稲佐村の名主志賀氏宅の砂浜に壊れた船底を露わにしていた。

奉行所の役人が現場に駆けつけ、違法な着岸である〝入り船〟として臨検。船内から運び出された積荷は、シーボルトの品と一般の品とに区別される。そして奉行所に没収されたシーボルトのコレクションは徹底的に調べられるが、その中から伊能図をはじめ、禁制品が次々に発見された。長崎奉行は、それらの品々をリストアップ。座礁から3日後には早馬で江戸に送った。

長崎から届いた文書に幕府の上層部は驚いた。予てからシーボルトは怪しいと睨んでいたが、想像をはるかに超える禁制品が流出していたのである。その中でも伊能図などの重要な物品は高橋景保が仲立ちをしたことは明らかである。何といっても、間宮林蔵が奉行所に差し出した小包が裏付けになっていた。

物的証拠が出揃った幕府は、もはや躊躇うことなく高橋景保らに縄を掛けられると判断。文政11年10月10日に、将軍家斉の命が下り、景保とその部下や息子を逮捕、和田倉門外竜の口の評定所にしょっ引いた。

「一寸、待った！　話が違いますぞ」

突然、大声を上げたのは、伊能忠敬の化身であった。

「座礁したオランダ船から禁制の品々が出てきたという筋書きは公儀に都合のいい作り話。早馬も方向が逆で、景保の捕縛が江戸から長崎に知らされたのじゃ」

何という事であろうか！　多くの書物や報文に基づいて書き進めてきたストーリーに、化身から異議が唱えられた。紅葉山文庫で江戸の出来事をつぶさに見てきた化身が、これまでの筋書きは、時の幕府により捏造された話に過ぎないと言うのである。

■つくられたシーボルト事件

シーボルト事件が勃発したのは、今から200年も前のことである。それから今日に至るまで、前述のような筋書きが延々と伝えられてきた。その〝正史〟とも言える筋書が「幕府により造られたもの」と聞かされても、俄かには信じられない。著者は、到底受け容れることが出来ず、さらに多くの資料を漁って、調査を進めた。

〝事件捏造〟の最たる根拠は「座礁したハウトマン号に伊能図が積まれていたか否か」である。もし、「座礁船は空であった」という記録が、役人が積荷を没収した後に確認されたものであれば、当然の帰結で何ら問題はない。

ところが当時のオランダ商館長メイランの日誌に、「ハウトマン号は積荷をすべて出島に降ろし、バラストの銅しか積まれていなかった」と記録されていたこと。さらには邦文でも、呉服商の中野用助が江戸の三井越後屋に送った報告書の写しに「禁制品は出島のシーボルト宅を捜索して押収」と明記されている。他に幾つかの記録から見ても〝座礁船には何も積まれていなかった〟という方が、筋が通っていて正しいようである。

■背後に見え隠れする　ロシアの脅威

それでは、事件の真相はどうであったのか？　そこには当時の時代背景、すなわち南下するロシアに対する脅威があったと考えられる。

そもそも伊能忠敬が蝦夷地の地図制作を口実に、幕府から測量の許可を取り付けたのは、緯度1度の距離を知ることが目的。それが解かれば、地球の大きさが推定できるという科学的な興味から発したことであった。一方、時の幕府が一介の隠居老人に測量の許可を出した背景には、南下するロシアへの脅威があり、北方領土の正確な地図の必要性に迫られていたことがあった。

忠敬の第1次測量は寛政12(1800)年のことであるが、その7年後(文化4年)に、幕府は函館奉行所を松前奉行所に格上げして、その長に御庭番の村垣定行を据えた。これは文化3年に始まったロシア軍の襲撃(文化露寇)への対応であろう。こ

のとき、奉行所の次席に当たる吟味役は高橋重賢が就き、実務担当には間宮林蔵がいた。さらに林蔵が樺太探検に赴いた時期には、最上徳内も幕府の命で蝦夷地や樺太に入っている。

これらの〝北方で名を成した男たち〟が、蝦夷地や樺太でロシアの侵攻に如何に対応したかについては誌面の関係で割愛する。しかし、ロシア皇帝が１８０８(文化５)年に全軍を撤退させ、日本への侵攻をやめた十数年後に、何故か、彼らはシーボルト事件で再び暗躍している。舞台は西国の長崎と江戸に変わっても、主な登場人物は不変である。勘定奉行は御庭番の村垣定行、長崎奉行が高橋重賢、村垣配下の隠密には間宮林蔵といった顔ぶれである。そして、彼らの裏で糸を操っているのは誰かと言えば、それは時の将軍家斉ということになる。

■将軍家斉の陰謀

将軍家斉には少なくても１６人の側室と彼女らに産ませた子女が５３人もいた。そのため、「オットセイ将軍」と揶揄されることもあるが、父の一橋治済から「子孫を増やせ」と強く命じられたことも無視できない。第１０代将軍家治の突然の死により１５歳で将軍の座に就いた家斉は、実父の治済と岳父の重豪の言いなりになり、自ら政を行うことは出来なかった。家老や幕閣たちも治済や重豪の顔を伺い、家斉の方を向いてはくれない。そうなると、家斉が相談する相手は陰に控える御庭番しかいないことになる。５０年ものあいだ将軍の座に就いていた家斉は、歴代将軍の中でも、最も御庭番を駆使した将軍と言われている。

その家斉がロシアによる文化露寇、イギリスによるフェートン号事件など、海外列強国からの脅威に晒されて「異国船打払令」を発布。国内では蘭方医や蘭学者が勢いを増し、人々の目は海外へと向けられていく。それはやがて、鎖国令に対する批判、さらには倒幕の流れに繋がっていく恐れがある。そのような危機感を抱いた家斉は、将軍就任時から身についている手法、すなわち御庭番を駆使した探索と秘密工作を展開。高橋景保を頂点とする外国崇拝者や蘭方医、蘭学者などを厳しく弾圧した。もちろん、標的にされた彼らの中心にはシーボルトがいたが、彼もまた日本御構(おかまえ／永久追放)の厳しい処罰を受けた。

この謎に満ちた事件は将軍家斉の御庭番たちの手に委ねられ、すべてが秘密裏に進められていく。従って、公式な文書や傍証などを探し求めても見つかることは期待できない。その〝闇の部分〟については著者が想像を逞しくして描くほかはなかったが、拙著をお読みいただく機会があれば、是非ご批評を頂きたいところである。

■事件を尻目に、伊能図は海外へ

伊能図は、高橋景保らの手で２度も複写され、一旦は出島のシーボルトの手中に収まった。しかし、いずれの図も奉行所の役人が取り戻し、江戸に送り返す。幕府は胸を撫で下ろしたが、シーボルトは没収される前に、その伊能図を秘かに複写していたのである。

シーボルトは複写した伊能図をはじめ、多くのコレクションを抱えて日本を去った。そして、オランダ国王のウィレム１世にコレクションの多くを買い取って貰い、その資金で小さな博物館「日本館」をライデンに開設。さらに著書〝NIPPON〟を刊行して、伊能図や樺太の地図などを世界中に紹介してゆく。

ロシア皇帝ニコライ１世は日本に対する関心が高く、〝NIPPON〟を出版する前からスポンサーになって手に入れたほか、各国の為政者や冒険家、学者などもこぞって彼の著書を買い求めた。また、浦賀沖に〝黒船〟を連ねて開国を迫ったペリー提督も〝NIPPON〟の熱心な読者であった。提督は浦賀に停泊すると直ちに周辺の測量を試みる。そこでペリーは、見取り図程度と思っていた伊能図の正確さに舌を巻いたという。

さらに、開国後にやってきたイギリス海軍も、日本全土の測量に取り掛かったが、幕府の役人に伊能図を見せられて、その必要はないと判断する。そして、伊能図に水深や暗礁などを追記した海図を完成させている。フランスにあった伊能図(中図)の話も興味深く、拙著に描き加えた。本研究会誌の前身である「伊能図探究」に掲載された故渡辺一郎氏の「フランスにあった伊能図」が情報源であるが、当時のフランスの政府や軍も入手した伊能図を大切に扱ったものと思われる。

数奇な運命をたどって世界に飛び出した伊能図は、列強国の注目の的となった。未開地である東洋の島国〝日本〟に、ヨーロッパに匹敵するような正確な地図があったことに列強国は驚愕。日本の文化・科学レベルの高さに舌を巻き、他の東洋の国とは違う、簡単に制圧支配ができるような国ではないという認識が広がっていく。その認識は、我が国が欧米列強国による植民地支配から免れることへの一助に繋がったのではないか……。

そのことが、いま著者がもっとも訴えたいことである。

「伊能忠敬の歩いた道」ウォーキング「金辺峠編」に参加して

佐賀県武雄市　馬場良平

秋、恒例の福岡県田川地方で開催される田川郷土研究会（会長・中野直毅様）の主催する「伊能忠敬の歩いた道」ウォーキングに参加して来ました。

第12回目の今年のコースは、「金辺峠編」と題し、旧小倉街道沿いの採銅所から小倉方面へ歩いて、金辺峠をめざす約5kmのコースで、金辺峠から峠道を約1km引き返して、バスで香春町役場へ移動。昼食、まとめの会を開いて解散するという日程でした。当日の参加者は24名、スタッフ24名で開催されました。

当日は曇りがちの天気でありましたが、集合場所の日田彦山線の香春駅には、馴染みの顔ぶれの参加者が集まっておられました。香春駅から採銅所駅までは、汽車で一駅の移動でした。

日田彦山線採銅所駅は大正4年（1915年）に建築された近代洋風木造駅舎で、出入口の方位や天井などに、建築当時の名残をとどめ、香春町文化財に指定されています。ちなみに採銅所とは平安時代から見られる「採銅使の役所」で、金、銅が多く採鉱されたことからの地名であるそうです。

文化10年伊能忠敬測量経路図（下採銅所村-金辺峠）国土地理院地図25000より作図　図2　第12回「伊能忠敬の歩いた道」ウォーキング-金辺峠編-

駅前広場で班分けがあり、4班でそれぞれのリーダーの下で、スタートすることになりました。

私は第一班で中野会長のご案内で、駅前の坂を下り旧小倉街道（秋月街道）に入り、古宮八幡神社の西側にある「採銅所村役場跡地」、「採銅所里程標」の二つの石碑の前で説明を聞きました。

採銅所里程標前で案内する中野直毅氏

高さ150cmほどの里程標には「従是香春迄壱里」「従是呼野迄壱里四町」と刻まれています。この場所は「測量日記」では採銅所町駅馬と記され、「下図」では採銅所町と上採銅所村の界と記されていて、伊能測量経路は旧街道筋とよく符合できるということでした。

ここから引き返して小倉へと続く旧街道沿いを、金辺峠めざして歩いてゆきました。

「JAたがわ採銅所購買店舗」の

古びた店構えに、繁栄のあとを偲びながら、旧街道はなだらかな上り道を進んでゆきます。

「測量日記」に枝天屋とある天矢では、天照皇太神宮に立ち寄り、この近くの高原には豊前・小倉藩が設置した5つの郷蔵の内の一つがあり、金辺峠を越えて小倉へ米が運ばれたと説明がありました。拝殿には三十六歌仙の絵馬や小倉藩の家紋・三階菱を模った木彫などがあり歴史を感じました。

鮎返川に架かる横川橋付近の旧街道は、往時を偲ばせる風情を醸し出し、伊能忠敬測量隊の測量踏査に思いを馳せるに十分の風景が広がっていました。日田彦山線の開通により旧街道は寸断されていますが、その痕跡は、はっきりと見ることが出来

金辺峠めざして歩く草むらの中に
旧街道の痕跡が見える

ました。

日田彦山線の跨線橋を越える辺りから小さな雨が降り出し、一時、谷口のバス停で雨宿りをすることになりましたが、間もなく雨はやみ、伊能忠敬測量隊が越えた金辺峠をめざして、急坂の道を上ってゆきました。

金辺峠への道

標高217mの金辺峠は旧企救郡（現北九州小倉南区）と旧田川郡（現田川郡香春町）の郡境にあり、峠道の西側の山の斜面には「従是北企救郡」「従是南田川郡」と刻んだ郡境石が建っています。

郡境石

金辺峠は戦国時代から小倉街道と呼ばれる重要な道筋にある峠で、古くは太宰少弐藤原広嗣の乱の際に出て来る「田河道」と考えられています。藩政期には九州諸藩の参勤交代の道や幕府巡見使に道として広く利用された街道で、小倉藩は関所を設けていました。峠道の東側には幕末の小倉藩家老島村志津摩の顕彰碑が建ち、観音堂があり、道沿いに旅人がのどを潤していた井戸跡がありました。

金辺峠では30分ほど中野会長の説明や峠周辺の散策で過ごしました。中野会長の話では、歩いて来た採銅所里程標から金辺峠までの街道筋は、ほぼ伊能測量の経路と符合するということでした。

金辺峠にて

その後、峠道を引き返し、峠下からバスで昼食・まとめの会の会場・香春町役場へ移動しました。

当初の計画では、弁当は各自持参ということでしたが、田川地区に住いの伊能忠敬研究会会員・奥永渚様が子育ての合間を縫って運んでくれるということで「伊能忠敬弁当」が手配できることになり、希望者に配布されました。

昼食が終わるとまとめの会が始まりました。中野会長の奥様の軽妙な進行により、本日のウォーキングのコースの中からクイズ形式の質問があり、それに中野会長がクイズの解答をされるという進行であっという間に時間が経ってしまいました。正解者には田川地方産の賞品が用意されていて、楽しいひと時でした。中野会長の御子息さまも班長として、参加されており、家族ぐるみで伊能忠敬顕彰に取組んでおられる姿に、頭が下がる思いでした。

田川郷土研究会（会長中野直毅様）の主催する「伊能忠敬の足跡をたどる」ウォーキングは、伊能忠敬研究会会員でもあられる中野直毅様の指導の下、「伊能忠敬の歩いた道」プロジェクト実行委員会を立ち上げ、「伊能忠敬ウォーキング」や「伊能忠敬の『測量日記』を読み解く会」などの活動を通して、忠敬が歩いた道をたどりながら、忠敬の足跡を広く次代へ伝えたいという思いで、毎年行われて来ています。実行委員会の調査や運営には数多くの若い人たちが参加しているということであり、これら

の人達が伊能忠敬の偉業を次世代へ引き継いでいってくれるものと思うと、頼もしい存在に感じられました。

中野会長の測量経路の解明は、単に測量日記や伊能大図、下図などからばかりではなく「伊能大図」「下図」と「陸地測量部地形図」「国土地理院地形図」などの重ね図や地理学、地学的見地から検証され、綿密な現地確認作業をして来られた処にあると思います。

振り返れば筑豊のシンボル香春岳・三ノ岳

中野直毅様の「伊能忠敬測量経路の復元」の検証、調査作業については、伊能忠敬研究２０２３年第１０１号「伊能下図を活用した測量経路の復元-伊能図の二つのずれの問題について考える-」で、詳しい検証、調査報告をなされておられます。

私は毎年「伊能忠敬の歩いた道」ウォーキングを楽しみにして来ました。令和４年秋に参加した後、筑豊への思いを地元紙に投稿しています。その記事をここに紹介して結びといたします。

おとこの星座

筑豊への旅

武雄市　馬場 良平　72

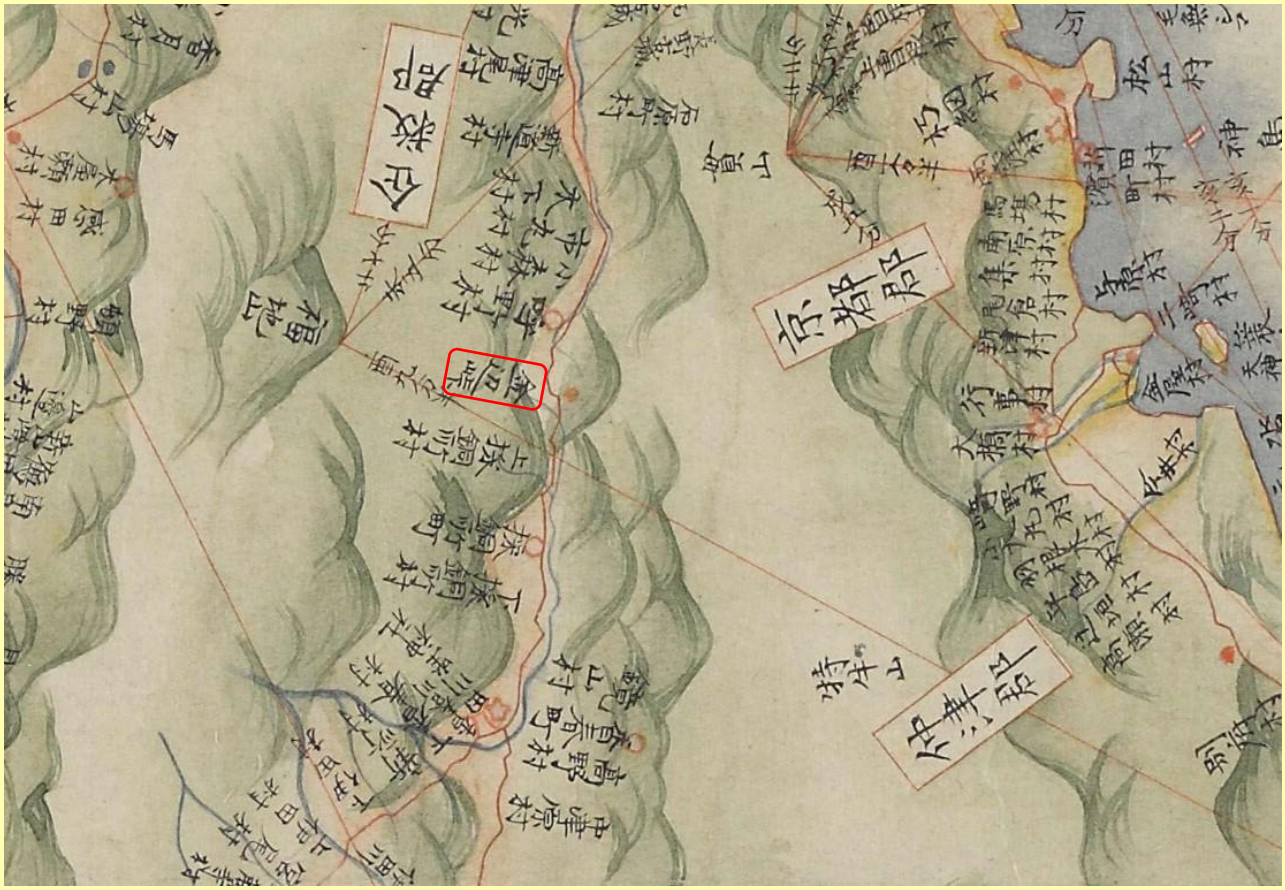
50年以上前のことです。高校を卒業して社会人となった私は、五木寛之のエッセー集『風に吹かれて』を読んで、東京や金沢の町に憧れ、シベリア鉄道で行く東欧の旅に心を引かれました。そして、『青春の門』が出版され、伊吹信介と牧織江の世界に引きずり込まれ、青春の痛みを感じながら、筑豊地方に興味を持つようになっていました。

独身時代、香林坊や犀川、浅野川など金沢の町を歩いて五木寛之の世界に浸ったことはありましたが、筑豊へは近くに居ながらも足を運ぶことはありませんでした。

二十数年前、街道歩きに興味を持ち始めたことで、筑豊へ足を延ばす機会が出てきました。長崎街道沿いにある直方や飯塚、秋月街道沿いに位置する田川や嘉麻など、この20年で17回訪ねています。特にこの5年間は田川市で行われていた「伊能忠敬の歩いた道」探訪ウォークに参加するため、毎年のように田川の伊田や後藤寺へ行きました。筑豊への旅は列車乗り継ぎの旅です。武雄市の高橋駅から烏栖へ、そして筑豊本線の原田、桂川、新飯塚、後藤寺線の田川後藤寺で乗り換え、日田彦山線の田川伊田駅までの長い旅路です。

列車の旅の楽しみは、車窓からの風景であり、その一つが香春岳です。今は石灰の採掘のため削られて低くなった一ノ岳、そして昔と変わらぬ二ノ岳、三ノ岳が『青春の門』の世界へ誘ってくれます。「青春の門・筑豊編」のプロローグには「香春岳は異様な山である。決して高い山ではないが、そのあたえる印象が異様なのだ」とあり、五木寛之の世界に引き込まれた青春を重ねながら、筑豊の旅を楽しんで来ました。

佐賀新聞令和４年１１月１０日
おとこの星座　佐賀新聞提供



「大日本沿海輿地全図 中図７ 北九州」（日本学士院所蔵）から金辺峠周辺

第8回 数矢小の子どもたちによる「伊能忠敬銅像清掃デー」開催

前田 幸子

一月二十六日（日）、抜けるような青空の下、東京・富岡八幡宮において「数矢小学校の児童による伊能忠敬銅像清掃デー」が開催されました。

まずは伊能測量の歩測体験として境内東側の八幡堀散歩道で歩測大会を実施。歩測によってゴールまでの距離を当てるという課題に児童14名と保護者数名が挑戦しました。

歩測大会に続いて伊能忠敬銅像の清掃を行いました。今年で建立25年目を迎えた銅像を、子供たちが背伸びをしながら丁寧に拭き上げました。

清掃終了後は大会議室での講話。数矢小ＰＴＡ・城野会長の司会で富岡八幡宮・丸山宮司、数矢小学校・澤田校長、彫刻家（銅像作者）・酒井道久氏、ＮＰＯ法人千葉県ウオーキング協会・伊藤会長がそれぞれの視点から、歴史に大きな業績を残した「地域の先人」伊能忠敬とその銅像について話されました。伊能忠敬研究会の堀野代表理事による記念講話「伊能忠敬と伊能図」のあと、「参加感謝状（歩測達人証）」と記念品が参加者に贈呈されました。一人ずつ名前を呼ばれて嬉しそうに感謝状を受け取り、銅像清掃デーは終了しました。

このあとは自由参加で「第24回忠敬江戸入りフォーデーウオーク」（ＮＰＯ法人千葉県ウオーキング協会、一二一キロ）のゴールを果たしたウオーカーたちと共に八幡宮本殿前で玉串奉奠を行い、解散しました。

ご後援、ご協力いただいた関係者の皆さまに厚く御礼を申し上げます。

・主催　伊能忠敬研究会（参加・堀野代表、柏木副代表、狼事務局長、星埜特別顧問、前田理事）

・後援　富岡八幡宮
江東区立数矢小学校
（一社）日本ウオーキング協会

・協力　数矢小学校ＰＴＡ
ＮＰＯ法人千葉県ウオーキング協会

「健脚御守」を作ってみました！

河崎 倫代

忠敬さんを敬愛する皆さまへ

この度、私たち「金沢・忠敬さん応援団」は「忠敬さん健脚御守」を作製しました。愛用のリュックやバッグに付けていただき、忠敬さんを身近に感じつつ日々を健康にお過ごしいただきたく、これを「健脚御守」と名付けました。

詳細は以下の通りです。

・使用画像：東京深川・富岡八幡宮境内に建立された伊能忠敬銅像。

・銅像製作者：彫刻家酒井道久氏（当会員）。氏には製作の意図をご理解いただきました。

・入手方法：「金沢・忠敬さん応援団」にメールで注文してください。
ishikawa@inoh-ken.org

・添付した写真の４種類から選んで、番号・個数を明記してください。

・１個５００円です。送料が高いため、３個以上での注文をお願いします。

・代金支払い方法：注文後に振り込み口座をお知らせします（振込料はご負担ください）。

・製作費・送料・手数料を引いた残りを伊能忠敬研究会へ寄付します。

唐突なお知らせと思われるでしょうが、伊能忠敬研究会の存続・発展に微力を尽くしたいとの思いから模索・試作したものです。

ご理解の上、無理のないご協力をお願いいたします。

「金沢・忠敬さん応援団」
河崎倫代・室山 孝

新入会員自己紹介

福岡県小郡市　松本正子

この度入会いたしました松本です。

伊能忠敬の第八次測量の時、九州、鹿児島―屋久島―種子島へ測量のために向かいます。文化九年正月二十七日、小倉を出立して、長崎街道筋の筑前六宿を測量して、二月五日山家から薩摩街道の方に向かい、「筑前御笠郡西小田村福岡領、筑後御原郡乙隈村久留米領国界」を測量し、松崎宿で止宿。薩摩街道筋の筑後御原郡乙隈村は現在の小郡市に当たり、まさに我が家の近くの国境を測量していったのだと、感動しました。

福岡県小郡市に越して来て三〇年になりますが、小郡市は江戸時代の筑後国に属し、家の近くを通る薩摩街道には江戸時代の筑前国と筑後国の境石が残っています。境界にはそれぞれの基壇（高さ１ｍ）の上に威風堂々とした国境石（巾５０㎝×高さ３ｍ）が、二本並んで立っており、現在も現役で、福岡県の筑紫野市と小郡市の市境になっています。

この立派な国境石に興味を持ち、主人と二人で、国境石を調べはじめたところ、資料集めの最中に、伊能忠敬の「測量日記」に出会ったのです。

九州の街道筋には、思った以上に境石が残っていましたので、「測量日記」をなぞりながら、研究できればと思っています。よろしくお願いいたします。

宮城県石巻市　門脇利勝

入会のきっかけは、仙台二華高校の総合学習の取り組みをお手伝いする中で伊能忠敬を知る必要が出てきたからでした。また、当地の海岸の史跡を見学に来る団体に伊能測量の説明をしたいと思い、研究会に入会させていただきました。

これからいろいろ勉強していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

お知らせ

事務局

令和７年度「総会」の開催

令和７年度伊能忠敬研究会総会を左記により開催します。会員の皆様のご出席をお願いします。

記

日　時　令和７年５月24日（土）13時～（受付開始12時30分）

会　場　富岡八幡宮　婚儀殿会議室

（交通）地下鉄東西線・大江戸線「門前仲町駅」下車

住　所　東京都江東区富岡1-20-3

電　話　０３-３６４２-１３１５

議　題　令和６年度事業報告、会計報告　令和７年度事業計画、予算案他

その他

総会に先立って講演等を予定しています。また、総会終了後には同会場で懇親会を予定しています。

なお、総会の案内は後日郵送します。

令和７年度年会費納入のお願い

今号には令和７年度会費「払込取扱票」を同封しました。皆様には左記により会費の納入をお願いします。

令和７年度会費　５０００円

振込先　ゆうちょ銀行振替口座

加入者名　伊能忠敬研究会

口座番号　00150-6-0728610

会費の未納分がある会員には未納年度を記入した振込用紙を同封させていただきました。年度が変わりますので早めに納入をお願いします。

会費納入状況がご不明の方は、事務局までお問い合わせください。

事務局へのお問い合わせは、なるべく左記の電子メールをご利用頂きますようお願いします。

〔伊能忠敬研究会事務局〕

E-mail：mail@inoh-ken.org

会誌１０４号（２０２４年10月31日発行）の印刷ミスについてご報告致します。

【印刷ミスの箇所】

『伊能忠敬研究』１０４号の60ページ「お知らせ」の部分の原稿が印刷されておらず、裏表紙ページ裏面が60ページの箇所に重複して印刷されていました。

【原因と対応】

印刷会社に印刷ミスを指摘したところ、「データチェック時のエラー」があったことを認め謝罪などがありました。

印刷されなかった１０４号の60ページについては、１０５号とともに送付致しました。

訃　報

神奈川県藤沢市の会員大沼晃さんが令和７年１月９日に御逝去されました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

訃　報

東京都世田谷区の伊能忠敬研究会顧問の伊能洋さんが令和７年１月23日に御逝去されました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ
論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。
＊刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち
・本文（テキスト）　原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。
・写真　一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。
＊印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによってSMモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。
デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。
・図　写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。

③原稿の送り方
左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくはホームページ　http://www.inoh-ken.org/　を参照）

送り先
・電子メール添付の場合　kaiho@inoh-ken.org
・郵送の場合　〒153-0042　東京都目黒区青葉台4-9-6日本地図センター2階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項
・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って会誌及びホームページ掲載の許可を取っておいてください。
・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。本誌に掲載された記事の著作権は、伊能忠敬研究会に帰属することとします。
他誌等へ転載する場合は、事務局に連絡して許可をとってください。

次号（第106号）は2025年6月発行、原稿締切は4月30日です。皆さまの投稿をお待ちしております。

伊能忠敬研究会入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。
①会報の発行　研究成果・会員活動情報など　原則として年三回発行
②例会・見学会の開催
③忠敬関連イベントの主催または共催
④その他付帯する事業

三、入会方法等
入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地
〒153-0042　東京都目黒区青葉台4-9-6　日本地図センター2F
電話・FAX　03-3466-9752
（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）
事務局メール　mail@inoh-ken.org
郵便振替口座　〇〇一五〇-六-〇七二八六一〇
ホームページ　http://www.inoh-ken.org/

編集後記
◇クロネコゆうメール便で104号が手元に届いた。◇喫驚仰天。◇裏表紙裏のページが重複しているではないか。◇やらかしてしまったか。◇顔面蒼白、茫然自失。◇震える指先でWEB入稿したファイルをチェック。◇入稿した原稿に問題はない！　◇そこから印刷会社との水掛け論のメールの遣り取りが始まった。◇曰く、ご入稿いただきましたデータ通りの仕上がりとなっております。◇曰く、ご入稿いただきましたデータを確認いたしましたところ59ページの後、同じ画像が2ページ続いております。◇漸く曰く、データチェック時のエラーでございます。◇最後に曰く、深くお詫び申し上げます。◇かくして一件落着。◇校正刷りのないネット印刷のリスクを痛感した。（T生）

「伊能忠敬研究」第105号© 2025年2月28日発行　編集 玉造功　発行 堀野正勝
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6　日本地図センター2F　伊能忠敬研究会　TEL&FAX 03-3466-9752